

から、すぐに治るだらうと思ひます。」

道枝は心配して、

「大變悪くなるといけないから、お医者様に一寸見て頂いて、お薬を戴いて飲んだ方がいゝだらう。」

春光はそばから

「お医者様に見て貰ふのもいゝけれど、本當に風邪を引いたんなら、幾ら見て貰つて薬を飲んで、空腹に御飯を食べた様に、直には治らないよ。兎に角頭が痛かつたら、晝頃まで静かに寝ませた方がいゝよ。」

それからでも仕度は充分出来るんだから。」

「まあ貴方は、そんな呑氣な事を仰有つて……、それから髪を結つて、お湯に入つてお化粧をして、支度をさせて終ふまでには、どれだけ急いだつて、四時間位はかゝりますもの。向へは三時に着く事になるんでございませう。」

今から支度にかゝつても、餘り呑氣じゃありません。」

「そんなに時間のかゝるものなのか、面倒な事だなあ。」

女の支度つて、どうしてそんなに時間がかゝるんだ。」

「だつて私達みたいに、體を少しもかまはないものは、五分間だつて仕度は出来ますけれど、少し嗜みのよい奥さんなんかでしたら、一寸他所へお出かけになると言つても、髪を結ふ以外に、二時間位支度にかゝるんですよ。」

それに一生一代に一度のお嫁入りなんですから、時間なんかごれだけかゝつても命がけて綺麗に、作つて頂かなければ駄目ですわ。」

「さうかも知れないけど、餘り長い事かゝつてゐて、病氣を悪くしてはいけないから出来るだけ簡單にして貰つた方がいゝよ。」

父の正雄も、

「さうだ、餘り難かしい事はしないでいいよ。」

「そんなに一生懸命作つて見た所で、別に鼻の形も耳の恰好も、造り直す事は出来る譯ではないんだから……。」

「でもね兄様、上手な顔つくりは、顔の形まで直すんださうです。」

「眼も上手に、一重眼瞼なのを、二重眼瞼に見せたり、低い鼻も高くつくり、頬のこ

けた人は下ぶくれに作るのです。」

「そんな事が出来るものじゃない。」

「いゝえ出来るのです。そこが商賣人ですもの、花嫁さんを造り上げてから、みんなからいゝお嫁さんだと賞られるのは、本人の花嫁よりも嬉しい位ださうですから……。」

「そんなに力を入れるものかなあ。」

「そりやそりでございますよ。しつかりしたお嫁入りを引受けると、自分の腕だめしになつて、顔もしつかりと賣れて行きますから……。」

其處へひよつこりと、附女に頼んだ美容師のはるさんが入つて来ました。

「お早うございます。」

「あらお早うございます。昨日は色々、御苦勞様でございました。」

どうぞ今日はよろしく、お願ひ致します。

どうか一つ、一生懸命の腕前を振つて、よい花嫁さんにしてやつて下さいませ。」

「かしこまりました、今日こそ貴女方が、吃驚して誰方様でございませうかと、お見違へ遊ばす位に、仕上げさせて頂きますは……。」

もうお湯は沸いて居りませうか。」

と注意すると道枝は

「お湯はもうすぐ沸くと思ひます。」

一寸好枝が風邪の氣分で頭痛がすると言つて、居りますが、お湯に入れてはどうか

と思ひますが……止めてはいけないでせうか。」

「まあさうでございませうか、でも今日はお湯を止る事は出来ませんでございませうね」

「それじや長い事入らないで、首から上だけでも洗ふ事にしたらどうでせう。」

「そうでございませうね。まあ、その時はその時の事として、又何とか考へますから、

では先にお髪を上げさせて頂ませう。」

と準備をしてかゝると、聽て美事に髪を結び上げて、お湯に入りすつかりお化粧を仕上げ、緋縮緬の長襦袢の上に、薄紫地の縮縮に華やかな牡丹の裾模様、お振袖の三枚襲ねを着けて、派手な絲錦の帯を、華やかにきちんと締めて、箱迫を胸に帽子も着けて終ふと、普通の時の姿より、丈が五寸も伸びたかと思ふ程、すらりとしてゐます。眼つき顔つき鼻つきの輪廓も、別人かと思ふ程に、手際よく、造り上がりまし

たので、肉身の親でさえ、全く別人かと思ふ様に出来上つて終ひました。追々出發の時間が迫つて來ると、客間で仲人や客人をもてなしてゐた、春光も入つて來て、

「やあ、綺麗に出来ました。本當に親が見ても、見違へて終ふ程です。」

「おほほ、さうでせう、賞めて頂かうと思つて、今朝から一生懸命腕を振りま

たのでございますから……。」

「本當に御苦勞様でした、大變なお骨折りでしたでせう。」

房枝も道枝も最初から、殆ど附き切りの様にして、仕度を手傳つてゐましたので、花嫁姿に出来上ると、もう誰譯もなく嬉しくて、いそ／＼として自分達も髪を梳きつけて貰ひ、衣装も白衿に五つ紋付に着替えて、これも同じく五つ紋付に仙臺平の袴を穿いた、正雄と春光と共に、迎へに來た自動車に着くと、部屋を立ち出て玄關へ出ました。前の車には仲人の川村夫妻、中の車には好枝と附女と道枝が乗り込み、宮崎と兩親は後の車に乗りました。

多數の親戚や知人の見送りを受けて、邊り一杯の人だかりの中を、車は徐々に動き

出して、聽て驀らに車は稻澤の方に進みました。

三時半頃自動車が山田家の門前に着くと、そこには老人子供大人入交つて、何百人といふ程の人が、山田家の花嫁を見やうと、詰めかけて騒いで居ります。

家の定紋の入つた幕を引き廻した大きな門は、左右に八の字に開かれて、邊りは掃き清められて、よく手入の行き届いた庭には塵一つなく水を打つて、すが／＼しい氣分を漲らせてゐます。主立つた親戚の人達は、男女とも禮装で門まで出て、威儀を正して出迎へて居ります、前の車の仲人が下りて、簡単に挨拶すると、後の車から宮崎や兩親が下りました、すると花嫁の乗つた自動車の傍へ髪は丸髷乍ら、その他の造り衣裳などは、花嫁かごまがふ程華やかに装つた和子が、母と共に／＼と進み寄りました。

附女のおはると道枝は、靜かに花嫁の衣裳や髪に注意し乍ら、自動車から扶け下しました。すると邊りに見てゐた人達は口々に、

「ほら嫁さんだ／＼。」

「まあ、何て可愛らしい顔のお嫁さんだらう。」

「あの立派な衣裳はどうですか？」

「なご、言ひ乍ら、口々にわい／＼と騒いで居ります。」

好枝は頭がポーツとして終つたので、唯無我夢中のうちに、和子に手を引かれて門の中へ入つて参りました。その邊りに集つてゐた人々は、御祝儀のお菓子を貰つて、何時の間にか引き上げて行つて終ひました。

出田家の玄關へ着いて、中の間の上り口から入つて、一應の挨拶がすむと、好枝は嫁の部屋と定められた、二階の部屋へつれて行かれ、仲人や両親、春光と道枝とは、客間の別席へ通されて、そこで鄭重にもてなされました。

聴て父の昭博や、重立つた親戚の人々が代る／＼挨拶に来て、嫁の支度と式の準備の出来るまで、その部屋に待つ様にと申しました。

道枝や房枝は何分にも、女の事とて好枝の支度がかゝるので、中座して二階の嫁の部屋へ案内して貰つて、其處で何呉となく、衣裳更への手傳ひを致しました。

母親の茂子も出て来て、衣裳を一通り出させて、一々念入りに調べて見てから、これをどの時に、あれをこの時にと、事細かに附女のおはるさんに言ひつけます。

おはるは一寸首を傾けて、

「あの奥様、こんな事私から申上げて失禮でございますが、お嫁様は昨日から、少しお風邪氣味でお加減が悪うございますので、大分お苦しい様でございますから、成るべくならば、餘りお召替えをなさらないで、すませて頂き度いと存じますのでございますが……。」

と丁寧に申しました。道枝も房枝もそれに續いて、

「本當に勝手な事をお願ひ申しまして、何とも申譯ございませんが、どう致しましたものか、今朝になりました、大變頭痛がすると申しますので、困つて居りますがどうぞよろしくお願ひ申上げます。」

茂子はそれを聞いて、何氣なく、

「お嫁入りの時は誰でも心配したり、色々と體も忙しうございますから、氣疲れがしてそんな事もありますけど、この元氣なら大丈夫でございますませう。」

こちら俊夫の一生一代のお祝ひでございますから、成るべく立派にすまし度いと思ひます。殊に今晚は嫁が大役ですから、どうしても病氣で、起きられぬ様なら、仕

方がございませんが、ごうかこうか勤まりさえすれば、折角かうして澤山衣裳も拵へて頂いてあるのですから、後では着て見て貰ふ事は出来ませんから、全部今夜一通りは着せて頂き度いのです。」

「それがお體さえ具合がお悪くなければ、私達も是非さうして頂き度いと思ふのでございませうが、今朝から何も召上つて居りませんし、大變お熱がある様でございませうから、普通のお嫁さんの時の様に、何遍も着物をお替えさせして、大丈夫かしら？と思つて心配して居るのでございます。」

「まあ兎に角、貴女方がそんなに、最初から勝手に決めてお終ひにならないで、折角の式ですから、少しは無理でも座敷へ出す事にして、着物も有るだけ着せて頂く事に手順を定めておいて頂かねばなりません。」

「どうしても出来ぬ場合は、又何とか考へますから……。」

兎に角婚禮式の方を先に済ませてからの様子で、又何とか御相談させて頂きませう。道枝もそれは尤もだと思つたので「本當にさうでございませう。」

他の時とは違ひまして、一生一代に一度の事でございませうから、少し位のこと事は苦しくても、出来るだけ我慢をして、今日だけは勤めさせて頂かなければ、申譯ございませぬ。それだけは本人もよく承知してゐますから、成るべくは豫定通りにさせて頂きます。」

こんな押問答を二三しましたため、幾分双方の感情を氣まづく致しましたが、それも結局は目出度い上にも目出度く、今日の日を祝ひ度いといふ、願ひは同じ事でございませうから、直ちにさうした感情は融け合つて、應て御祝儀物が山と飾つてある式場へ、下から上まで清淨な白無垢姿になつた好枝が、導かれて参りまして、禮装した俊夫と向ひ合つて座りました。この頃東西の椽側の端から大道まで、溢れる程村の老若男女の人達が、この式を見るために集つて来て、前へ／＼と押しかけて、大騒ぎをして居ります。

應て高砂の謠につれて、美しい二人の少女が、銚子盃を持つて、出て来て酌を致します。目出度く夫婦の固めの盃が濟むと、引き續いて親子盃、兄弟盃、親戚盃等がありました。二時間もかゝりました。

始終俯向き加減に座つてゐた花嫁も、式が終つて二階の座敷へ連れ歸られると、思はずぐつたりとして終ひました。

おはるが急いで帽子を取つて、休ませやうと顔を見ますと、好枝は物凄く程蒼い顔色をして、唇の色まで變つてゐます。

みんなは心配して、薬を飲ませて充分注意してから、僅かに髪を直し化粧をして、顔を引き立てるために、頬紅をさし口紅も濃くつけて、顔も華やかに見える様に造り直して、すぐに色直しの衣裳に着替えをしました。着物を着せ乍ら、おはるが

「貴女、大丈夫でございますか。」

と聞きますと、好枝は、

「はい大丈夫ですわ。」

と口では言つてゐますが、何となく體が苦しうに見えますので、道枝も房枝も不安が胸に迫りましたので、心の中で一生懸命に、間違ひの起らぬ様祈りつゞけました。それでもどうやら支度が出来上ると、おはるは

「今度はお母様について、お座敷へ御出ましになつて、お客様に御挨拶をしておいて

すぐにお嫁さんの席につくのでございます。その時に御膳が出まして、色々御馳走が出ましても、貴女はお箸をお取りになるのではございません。

暫くしてお祝杯が一通り廻つて終ひますと、いゝ時期を見計つて、お嫁さんは座敷を引上げるのでございますから、うしましたら後は御婦人方のお座敷に代るまで二時間以上間がありますから、その中ゆつくり休めますから、今度はしつかりしてゐらつしやいませ。」

と力づけて呉れました。

聽て母の茂子が迎へに參りましたので、好枝は心を落付けて、座敷へ下りて參りました。茂子は下座の方に好枝を坐らせて、

自分は少し前へ出て、扇子をきちんと膝の前におくと

「皆様に一寸御挨拶申し上げます。」

これが嫁でございます。名前は好枝と申します。

どうぞよろしく御願ひ申し上げます。」

凜とした口上を述べて、叮寧に頭を下げると、好枝も母親に習つて、度ましくお辭

儀を致しました。客は皆居すまゐるを正して、挨拶を致しました。

すると直ちに好枝は、嫁の席につかせられました。段々祝盃が取交されると、客人はその盃を受ける度毎に、夫々に目出度い謠を謠ひ出します。

御馳走の數々が運ばれて、客にも酔が廻つて來ると、仲人の妻はよい頃を見計つて花嫁を失禮さすといふ挨拶をしてから、好枝を促して、部屋へ歸つて參りました。

すると直ちに衣裳を脱がせて、おはるは

「好枝様、おゑらかつたでせう。でもお大事なお座敷も、無事にすみまして、本當にお結構でございました。」

「私何だか苦しくて、眼がくら／＼として、倒れやしないかと随分心配致しました。けれども失禮してよいと仰有つて下さつた時は、あゝ助かつたと思つて、ほつと致しましたわ、でも階段を二足三足上る時は、頭が割れる位痛かつたんですの。」

「本當にいけませんわね。どんなですか、お熱はありませんか知ら？」

と頭に手を當て、見て、

「あら！これは大變なお熱ですわ、兎に角暫く横になつて、お休みにならないといけ

ません。」

「でもそんな事をしてよろしいでせうか。」

「よろしうございますとも、これで一番座敷がおすみになりましたから、もう二番座敷が始まりますまでは、お嫁さんはお出にならなくてもよろしうございますから……。」

「さう、それでは少し休ませて頂きます。」

「さうなさいませ、お藥りを召上つてね、私がお頭をお冷し申しますから。」

「有りがたうございます、色々御心配をかけてすみません。」

と言ひ乍ら、好枝はおはるが述べて呉れた布團の上に、長襦袢のまゝ横になりました。

おはるは汲んで來た冷たい水で、一生懸命頭を冷してゐます。

少し眠ると頭痛が治るからと言つて、そこに有り合せた風呂敷で、電燈を覆ひます

と、少し暗くなりましたので、

「これでよろしうございます、電燈を暗く致しましたから、少し落付いてお眠り遊して下さい。」

と言ひ乍ら、冷たい手拭の上から、靜かに頭を揉んで居りますと、房枝も道枝も様子

を見に上つて参りまして、その様子を見ると、驚いて終つて、

「気分が餘計悪くなりましたでせうか。」

「はい、矢張り無理でございますから、少し休んで頂きました。」

かういふ席へ出ますと、病氣でない時でも、のぼせますものでございますから……。」

道枝は心配さうに、

「休ませて頂いても、お座敷の方の都合はよろしいのでせうか。」

「宜しうございます。」

あれは一番座敷でございますから、二番座敷の方は婦人座敷でございますから、かうして休んで頂いて、少しおさまりましたら又仕度を致しますから……。」

「さうですか、そんならよろしうございますが、どうも私達は様子がさつぱり分りませんので、何も彼も貴女がこちらのお母様に伺つて下さつて、よい様に計つて下さいませね。」

と話してゐる所へ、茂子は慌しく登つて来て、

「あれまあ、そんなに悪くて寝てゐるんですか。」

「はい、少し頭痛が烈しいと仰有るものでございますから。」

「さうですか、それは困りましたね。大變にいけない様ですか。」

と言ひ乍ら好枝に近づいて、

「あんた大變悪いんですか。病氣なら仕方がないけど、今夜程大事な時に、気分が悪いなんで、本當にあんただけぞ、うちも運の悪い事だねえ。」

「すみません、こんな御心配をかけまして。」

「病氣なら何とも致し方がないんだけれど、こんなお目出度い日は、一生に二度あるのじやないから、もう少し元氣を出して貰ひ度いんだけれど。」

「さう思つて、随分御本人は氣をしつかりしてゐらつしやるのですけれど、どうも御病氣には勝てませんものでございますから……。」

「困つた事ですね。私はそんなに悪いと知りませんから、一時ののぼせ位に思つて、和子にもそんな事を聞かせてありませんものですから、和子が好枝さんと一緒に餘興にお琴を弾くんだと申して、嫁のも下へ持つて行つて、調子も合せて出るばかりに、準備して待つてゐますので、直に衣裳を換えて出て貰はうと思つて迎に來たのです。」



それを聞くに、みんな吃驚して顔を見合せました。

好枝も少からず驚いたと見えて、瞑つてゐた眼をぱつちりと開けましたが、又ちつと瞑つて終ひました。おはるはそれを聞くと、

「それは折角でございますから、お嫁さんを出し度いんですけれど、御覽の通りの始末ですから、とてもそれは勤まりませんと思ひますから、お嬢様だけにお願ひして、弾いて頂きましたら、如何でございますか。」

「でもお琴も持つて来たんだし、衣裳もあるんですから、出来たら一曲だけでも弾いて呉れるといふんですが……さうすれば座敷も本當に賑やかなるんですから。」

「でも奥様、一寸頭へ手をやつて御覽下さいませ。」

この通り火の様に熱くて、脈も大きく打つて居りますから……。

餘り無理な事を致しますと、後でお體がどうかと思ひます。それに後にお座敷がなければよろしいが、お大事な座敷がまだ二つもありますから……。」

おはるにさう言はれて、茂子は近寄つて、好枝の頭に手をやつて見ましたが、一寸驚いたらしく、

「本當にこれは大變な熱です。これじゃ何と言つても無理ですから、和子一人に弾かせませう。どうかよく世話をしてやつて下さい。」

と立ちかけると、房枝も道枝も面目な氣に頭を下げて、

「お母様、本當に申譯ございません、どうかして今晚だけ、しつかりとして勤めさせて頂き度いと、心で祈つて居りますのでございますけれど、こんな始末でござる事も出来ません。」

「いゝえ。病氣の事は仕方がございません。でもまあ披露も式も無事に済みましたのですから、よろしうございました。」

と言ひ乍ら、慌しく下に降りて行きました。その足音を聞き乍ら、一同先づよかつたと安心してゐる所へ、俊夫がつか／＼と入つて来て、この様子を見ると吃驚して

「どうかしたのですか。」

「はい昨日から少しお邪風を引いてお出でになりましたのを、無理をして仕度をなすつたのが悪うございましたのか、頭痛がして苦しいと仰有るものでございますから、少し休んで頂きました。」

「はあ、さうですか、僕ちつともそんな事は知りませんでした。どうも今下で見てみましたら、元氣がない様に思ひましたが、氣分が悪かつたんですね。」

と言ひ乍ら好枝の傍へ寄つて、

「好枝さん、大變悪い様なの？」

と言ひ乍ら座ると、頭へ手をやつて見て、

「これはゑらい熱じやないか、こんな事をしておいていゝか知ら？」

好枝さん、餘程苦しいか、苦しければ丁度下へ、お醫者さんも來てゐるから内緒で來て貰つて、診て貰ふといゝのだが……。」

それを聞くと房枝は、

「貴方、今夜はかういふお目出度い日でございますから、そんな事をする縁起が悪うございますから、どうぞお止めになつて下さい。又悪い様でございましたら、明日でも明後日にでも、お願ひして頂く事にして……、ねる道枝さん、その方がよろしうございますわね。」

「さうですわ、本當に今晚はどれ程悪くても、靜かにしてゐた方がよろしうございま

すわ。それにこんな事、若しかお客様に知れたら大變ですから。」

「さうですなあ、折角の嫁が病氣だなんて事が知れると、旨く呑んで呉れる筈の酒もまづくなりますからね。」

「さうでございますよ、だから黙つてゐらして下さいませ。」

又二番座敷の時には、どんな事をしてゞも、一寸でも出て頂きますから。」

「それではさうして下さい、すみませんが。」

と言つておいて、俊夫は部屋を出て行かうとすると、下から急いで上つて來た茂子と入口で一緒になつて、

「お母さんですか。」

「お、俊夫か、困つた事が出來て終つてね。」

「はあ、好枝が氣分が悪いさうで。」

「その事は私も知つてゐたんだが、和子はそんな事はちつとも知らないものだから、好枝と一緒に座敷に出て、琴を弾くと言つて、支度をして終つて、お客様の方へもそんな事を洩らしたものだから、皆が聽かせて貰ふのだと言つて、喜んで待つてゐらつ

しやるので、和子は早く姉さんの支度をして貰つて呉れど、焦つてゐるんだけど、好枝は病氣でとても出られないと言つたら、今更そんな事言はれないと言つて、泣き出して終つたんだよ。

それに好枝が出ないで、和子一人で弾くとすれば、好枝が病氣になつた事も言はねばならぬし、そんな事を話せばみんなが、又此處へ見舞ふとか何とか言つて、ごやごややつて来て、うるさいからそんな事言ひ度くないし、どうしたものだらう。

それに又そんな事を言ふと、後で又何だ彼だと言つて、縁起でもない事を言はれると、嫌だと思ふから、苦しくて起きられなければ仕方がないが、若し我慢出来たら一曲だけでいゝから、弾いて貰へないだらうかね。

和子が添へ弾きするのだから、一人で弾くよりはずつと楽なんだけれど……。」

「だけごお母さん、僕今見て来たんだけど、とても苦しい様ですから、そんな事可愛さうでさせられませんでせう。」

「私もさう想ふのだけれど、それではどうしたらよからうね。」

「困りましたね、どうしませう、何とか體裁よく言つて、お客様の方は病氣だと言は

ないで断りませう。」

「そりやさうするより仕方がないけれど、その理由のつけ様がなくて、困るじやないか。まあ一寸お待ち、一遍よく皆様と相談して見ませう。」

と座敷へ入つて来ると、

「どうしたものでございませう、今俊夫と話しました様な譯で、和子は何も知りませんものでございますから、うつかり先觸れしましたので、お客様の方から催促して騒いでゐらつしやいますし……。」

出ないと思ふのは、病氣の事を言はなければなりませんし、それを言ふのは面白くないと思ふのですが、それかと言つて、病氣の者を無理に出す事も出来ませんしね。」

おはるも當惑して終つて、

「でもこんなにお悪いものを、そんな無理な事も出来ませんし……。」

道枝も房枝も、顔を見合せて、

「本當に困つた事でございます。」

「飛んでもない御心配をかけて、申譯もございません。」

みんながさう言つて、困つてゐるのを知ると、好枝は布團を撥ねてむつくりと起き上つて。

「あの私出させて頂きますわ。」

「でも貴女そんな事仰有つて……大丈夫でございませうか、

そんなにお悪いのに……。」

「いゝえ、僅かの間位、辛抱出来ると思ひますわ。」

「でもそんな無理をして、後が大變悪くなつても困るが、お前大丈夫かえ。」

俊夫も心配氣に入つて来て、

「無理をして、取返しつかない事になつちや大變だが、大丈夫なの？」

「はい、大丈夫でございませう。」

「貴女本當に大丈夫でございませうか、後の事もお考へにならなくてははいけませんでございませうよ。」

「はい、私出して頂かないと、皆様に御迷惑がかゝりますから、何とかして出させて頂いて、一生懸命弾かして頂き度いと思ひますわ。」

あの勝手な事お尋ねしてすみませんが、曲はこれでございませうか。」

「曲は最初は高砂と千鳥を弾くと言つてゐましたよ。」

と茂子と言ふと、

「あの申譯ございませませんが、二曲はつとまらないかも知れないと存じますから、恐れ入りますが、高砂だけすませて頂きましたら、御無禮させて頂き度うございませうか。」

茂子は飛上る程喜んで、

「結構です、一曲だけ出て貰へば、その上の慾はありません。」

では和子によく言ひつけておきますから、一曲だけで止める様に……

それでは本當に可愛想だけど、急いで支度をして出て下さい。

私は和子によく言ひ聞かせて來ますから……。」

と言つて、お母さんは大喜びで、いそ／＼として下へ降りて行きました。

「大丈夫だらうか、そんな無理をして。」

「こんな大事な時に、病氣なんかになりましたして、申譯ございませう。」

「他の事なら代りの者で手傳ふ事も出来るが、ごうもそれが出來ませんし、手を當て

る様に思ふのですが、仕方がありません。」

「世の中といふものは、こんなものでございますよ。」

「禍轉じて福となる」と言ふ事がありますから、多少こんな事がありましたも、これが却つて後の仕合せの種になるかも知れません。」

「本當にさういふ風に言つて頂くと、私達も幾分か心が明るくなります。」

さう言つてその中に顔を直し、髪もどきつけて、又衣裳をつけて終ひますと、美しい花嫁姿に出来上りましたので、お母様につれられて、みんなが前後に氣をつけて、階段を降りますと、座敷の方ではお客が皆お酒が廻つて、大變な元氣で歌ひさんざめいてゐます。

好枝が下へ来たのを見ると、和子は喜んで、すぐに座敷へ好枝をつれて出ました。皆この餘興の琴を、見たり聞いたりするために、座敷の方へどやどやと押寄せて参りました。座敷では華やかな花嫁と、それと同じ様に正装した和子の姿を見て、破れる様な拍手を以て迎へました。

二人が静かに琴の前に座つて、お客に向つて一禮して、琴爪をはめるのを見ると、

房枝や道枝やおはるは入り口に、俊夫と母は座敷の外に、何れも手に汗を握つて、心で無事に最後まで務まる様に、一心に念じて居りました。二人の指が琴の絃の上に伸びると、静かに絲の音が冴えて、コロ／＼と聞え始めました。

聽て和子が玉を轉ばす様な美しい聲で、琴唄を歌ひ出すと、好枝もそれについて、人にも自分にも聞き取れぬ様な聲で、歌ひました。最初に一度も手合せしてない割合に、よく合ひましたので、お客は有頂天になつてゐます。

聽て一曲終りましたが、好枝は唯眞剣な、強い責任觀念がその手を動かすだけで自分の體は全く無我夢中で、前に客が一杯ゐる事も、後に澤山の人達が押かけて聞いてゐる事も、意識しない位に苦しくなつて参りました。

一曲終つてはつとして、お辭儀をして爪を外さうとしますと、和子は

「姉さん。今度は千鳥ですから、一寸調子をかへて下さい。」

と言ひますので、好枝ははつとすると、頭がぐ／＼して破れさうになりました。和子はそんな事には少しも頓着なく、又お客に向つて、大きな聲で

「今度は千鳥の曲を合奏致します。」

といふと、お客は又嵐の様な拍手を送りました。お母さんは驚いて、そばへ寄つて、  
「和子！ 和子！」

と注意をしましたが、和子は振り向いても見ないで、宛ら聞えないものゝ様に、手早く  
琴の駒を動かして、調子を直しながら、コロン／＼と弾いて見て居りますので、好  
枝は立つ事も出来ませんので、眼が眩んで倒れさうになる體を、無理に支へて調子を  
變えて、用意をするのでありました。茂子も俊夫も房枝も道枝もおはるも、同じ様に  
「大丈夫か知ら？」

と心配し乍らも、尙首尾よかれ、と願つて居りますと、二人は千鳥の曲を調べ初めま  
した。始めの中は可成り調子が揃つてゐましたが、少し進むと好枝の指がしごろもご  
ろになつて、調子が亂れて參りました。

和子は、れを助けるつもりか、一層爪音高く弾きました。と、好枝の爪音がはつと  
止んだと思ふと、今迄座つて弾いてゐた好枝は、琴に手をかけたまゝ、琴の上に俯伏  
しになつて、倒れて終ひました。

客は驚いて、

「あれ 大變だ!!」

と立ち騒ぎかけると、その瞬間座敷を取持つてゐた、分家の俊夫の叔父が、矢の様に  
近づく、好枝の盛装した體を横抱きにして、二階へつれて參りました。

それに續いて俊夫も房枝も道枝も、おはるも茂子も眞蒼な顔をして、ごや／＼と上  
つて參りました。好枝を敷布団の上に寝かすと、みんなして帯を解き着物を脱がして、  
氣付け薬を吞ませたりして居ります處へ、丁度招待されて來てゐた、醫者の齋藤さん  
が飛んで來て色々に手當てをしました。そこへ父の昭博も、好枝の父の正雄も春光も  
あはてゝ入つて參りましたので、俊夫は

「皆さん騒がないで下さい、別に心配する程の事ではないのですが、頭痛がするとい  
ふのを、無理に座敷へ出したので、體が苦しかったのと、あゝいふ酒の席で、空氣が  
悪かつたので、のぼせたらしいのです。すぐに治りますから、御安心して下さい。齋  
藤さんが大丈夫だと言つて下さるのですから。」

お父さん、何とかしてお客様の方を、工合よく取り做して下さいませんか。  
「よし／＼、こちらさえ大丈夫なら、座敷の方は工合よく、あしらつておくが、兎に

角大變な事になつたものだ。そんなに氣分が悪かつたのなら、嫁は出さずに和子だけにさせておけばいいのに、何といふ行届かぬ事をするのだ。」  
「そんな事仰有つても、出来た事はもう仕方がありませんから、お客さんの方を工合よくして下さい。」

「よし、それでは貴方々も座敷へお出で下さい。」

と言つて、お父さんは春光や正雄を無理に誘つて、座敷へ出て行くど、お客が心配さうに、盃も明けずに待つてゐます。昭博はにこ／＼し乍ら、元氣よく、

「やあ、大變失禮を致しました。こんでもない事を仕出来しまして、御心配をかけましてすみません。實は嫁が二三日前から、風邪を引いて工合の悪いのを、日が決つてゐたので無理に式を挙げました。」

そのために朝から、少し頭痛がすると言つてゐましたのに、無理にお客様の御機嫌を伺はせるために、餘興に引き出しましたので、のぼせて終つて、あんな始末になりました、本當に面目ない次第でございました。

すぐに氣がつかまして、部屋で休んで居りますから、どうぞ御心配なく、御充分に

御過し下さいます様、私からお願ひ致します。」

と挨拶しました。それを聞くと皆口々に、

「一時は吃驚したけれど、そんな工合なら結構です。」

若い女の人には、ありがちの事です。そんなに御氣分が悪ければ、お出にならなければよかつたものを、お氣の毒な事でした。」

とあちらでもこちらでも話し合つてゐる中に、一時陰痛になつてゐた一座の氣分も又晴れやかになり、元の様に陽氣に騒ぎ出しました。二階で好枝は、死人の様な顔をして、微かに息をして、眼を瞑つてゐますので、おはるや道枝や房枝は、何も言はず唯鼻をすつて泣き乍ら、頻りに頭を冷して居ります。俊夫は瞬きもしないで、好枝の顔を、不安さうに見凝め乍ら、時々大きな吐息を洩らすばかりであります。

座敷の方では、益々客のさんざめきの聲が高くなつて來るのに和して和子が牙え渡つた聲で大内山の曲を得意さうに、調べてゐるのが聞えます。

俊夫はそれを聞いて、言ひ様のない心持ちになつて、つと立ち上り、東側の窓の戸を少し開けて、外を覗くと、空には半月が朧ろにかゝつて、中庭の櫻は風に揺られて

ハラ／＼と散つて居りました。

## 里 歸 り

結婚式がすんで、十日程後には、好枝の病氣もすつかり治りましたので、吉日を選んで、山田家の両親、宮崎夫婦仲人夫妻が、新夫婦に附添つて里歸りのために、中里村の野田家へ参りました。

村では珍しい客を、野田家へ迎へるのだといふので、村中の大評判になつて、當日は花嫁姿の好枝を見るため、村中の人が出て待つてゐます。

その中を田上川を溯つて、三臺の自動車の中央に、俊夫と好枝を乗せて、前には仲人夫婦と山田家の両親、後の車に宮崎夫婦が乗り、中里村へ入つて参りました。村に入ると、野田家の祖父母の頼みで、成るべく自動車をゆるやかに走らせて、充分村の人達に嫁を見せて呉れど、孫を思ふ恩愛の情から、強つての言葉でありましたので、自動車は極靜かに、徐々に通りますので、村の人達は充分に花嫁を見る事が出来ました。

「あれ、見えた／＼、奇麗な着物を着て、立派なお婿さんと、中の自動車に乗つて見える、まるで花の様な。」

「ほんによく見える、まああの好枝様のお奇麗な事はごうだ。」

何といふ立派な衣裳を着てゐらしやるのだらう。」

とみんながわい／＼言ひ乍ら出て見て居ります。

好枝は恥づかしさに俯向き加減になつてゐますが、心では本當に世界中の幸福を自分獨りで集めて終つたかと思ふ程の幸福と誇りを胸一杯に感じてこんな喜びの旅がせめて三日も續いて呉れたらと、夢の様に思つてゐる中に、早や自動車は野田家の表に着きました。野田家の門前には、親戚近所の人々が、一杯に出迎へて、この大切なお客を待ち設けてゐました。

みんなの人の顔は、喜びに満ち溢れてゐます。

野田家では廳で車から下りた花嫁花婿、山田家の両親や宮崎夫婦や仲人を座敷へ招じて、あらん限りの真心を盡して、もてなしました。

さうしてその夜から翌日へかけて、田舎には珍しい程の祝宴を催しましたが、そ



れがすむと山田家の両親と、仲人と宮崎夫妻は、新郎新婦を後に残して、先へ歸つて終ひました。後に残つた二人は、重なる親戚等への挨拶まわりをするために、二三日は忙しい日が續きました。

俊夫は會社に勤める様になれば、自由に休暇は取れないから、新客と新婚旅行を兼ねて、遊んで行くのだと言つて、ゆつくりした氣持で、野田家で四五日遊ぶ事になりましたが、町で生れて町で育ち、小さい時から各縣の都會ばかりを、両親について廻り、農村の生活状態を知らない俊夫には、野田家ばかりか、その邊りの家の造り方や家の廻りの設備や、農業に使ふ道具、又村人の言葉遣ひ態度等、何れもみんな物珍らしく思ひました。

他の者が見れば、何でもなげな事でも、矢鱈に喜んで、臺所の大きな圍爐裡に、自在鉤をつるして、茶釜をかけてお茶を沸し、又つるのついた大きな鍋をかけて、下へ丸太の薪をどんぐり燃やすのを見ると、珍らしがつて子供の様に喜ぶのでした。

或る日両親や祖父母に奨められるまゝに、俊夫と好枝は山遊に行く事になりました。清吉といふ十六になる小僧に、お茶とお辨當を用意して持たせて、供につれて、三人

は家を出ました。谷川を溯つて細い山道をあちらへ曲り、こちらへ折れて、ある時は峰を傳はり、或る時は崖を登つて、幾度か休み乍ら登つて參りますと、凡そ里から十五六町も離れた、山の中の洞に出ました。

そこには丸い粗末な柱を組み合せて、上手の方は山の土を堀つて、その中へ刺し込みにして、小さな小屋を作り、その周囲は杉の皮で壁をして、入口には蓆が垂らしてあります。表には小さな川に、美しい水が流れて、その水の中に銅や飯櫃や茶磁が浸してあり二三匹の蟹が匍つてゐます。

俊夫は變な顔をして、

「オイ君、こりや一體何だい、こんな處に茶碗や鍋が放つてあるが……。」

好枝は笑ひ乍ら、

「おほほ、貴郎お分りになりませんか？、此處に人が住んでゐるんでござ

いますわ。」

俊夫は少からず驚いたらしく、周囲を見廻して、

「此處につて？ 何處に人が住んでゐる？」

「あら 貴方、そんな大きな聲をお出しになつて、聞えますわ、清吉、中に人がゐるでせう。」

「さあどうですか、だが今は大抵、竈の方へ行つてゐるでせう。」

「さうでせうかね、貴方、この家に人が住んでゐるのでございますわ。」

「何だつて？　これが人の住む家なのお前、」

「え、さうですの、これは炭を焼く夫婦の人が住んでゐるのですわ。」

「本當か、こんな小さな小屋に、人が住めるのかい。」

「おい、一寸入つて見ようじやないか。」

「でも人のゐない所へ、悪うございますわ。」

清吉は笑つて、

「なあに、かまふ事はありません、入つて御覧じませう。」

小言を言つたら俺が引受けて、悪者になりやすみますから……。」

「さうか、それでは君に引受けて貰つて、参考のために見せて貰はうか、中はどんなのか。」

と清吉について小屋へ近づくと、清吉は大きい聲で、

「今日は！　お出でるかね。」

と呼んで見て、

「矢張留守だ、中へ入つて御覧じませう。」

「じや 君、入るよ、いゝか、こりや一體何だい。」

と蓆を擱んで中を覗くと、好枝は、

「貴方、それが戸の代りでございますわ。」

「何？　戸の代り？　これが戸の代りなのか、この蓆か？」

「さうですよ。随分面白いでせう。それで村へ出て、戸障子を明け放して、閉めない人は、よく菰つるしと言つてからかはれますの。」

「ほう。それは面白い、こんな暮しをしてゐるのは、此處だけなのか。」

「いゝえ、山の中で炭を焼いたり、木を伐つたり色々な山仕事をする人は、その山が

片付くと、外の山へ行かねばなりませんから、本當に住へるだけの小屋を造つて、そ

こに住んでゐて、そこがすむとすぐに荷物を纏めて、次の山へ行くんですわ。」

「ほう、それでこんなに簡単なんだね。」

「え、それですから、二年も三年もあられる様な大きな山へ入れば、少しは大きなしつかりした家を建てますけれど、半年や一年居るだけなら、本當に粗末な小屋しか建てませんの。」

「さうかなあ、こんな山の中に居たら、日常生活に必要な品物は、何處から持つて来るんだ。米とか味噌溜り、その他の野菜や日用品なんか……。」

「お米やお味噌やお鹽なんかは、里へ炭を出しに行つた時に、買つて歸るんですわ。野菜物なごたまには、里の農家で貰つて來ますけど、大概はこんな山の中ですから、落や三ツ葉や、たら、しんづき、わらび、ごよばの葉など、言ふ様な、随分美味しい木の葉や草がありますから、そんな物を取つて食べますの。」

椎茸も取れますし、秋は松茸やその他の、珍らしい茸が出ます。

山の芋なども美味しいのが取れますから、少しも野菜に不自由なごしませんの。それは、く、吞氣に暮せますのよ。」

「さうかなあ、こんな静かな山の奥で、こんな住居の様を見ると、まるで遠いお伽の

國へ行つた様な氣がするね。何も彼も詩になりさうだよ。」

清吉は笑ひ乍ら、

「中の様子を御覧じませう、中に立派な物が積んでありますに。」

さう言はれて、俊夫が奥の方を見ると、煤けて破れた葛籠の上に、煎餅の様な接ぎの當つた布團が、二三枚積んであります。その邊りには破れた赤子の着物や、大人の着物が無造作に、窓にかけてあります。

黒く茶しぶのついた茶呑茶碗もころがつてゐるし、大きな圍爐裡のそばには、溜壺や薬鐘があり、そして世帯道具の全部が、その邊に並んでゐますが、何一つ貴重品らしいものは見付かりません。

座敷と言つても、下に板を並べて、その上に荒蓆を敷いてあるだけで、十分間も坐つてゐたら足が痺れて終ひさうに思はれます。俊夫は何遍もく、その邊りを見廻して、

「こりや面白い、これつきりで何も無いのだな。こういふのを賤が伏屋つて言ふんだらうなあ、さうだけごこんな貧しい小屋に、こんな暮しをして生きてゐても、生き甲斐があるだらうか。」

清吉は笑つて、

「そんな事をお言ひますな。山の中でも三軒家でも、住めば都に勝り住む。

といふ唄がありますに。」

「だつて君、三軒家ならまだいゝが、これは又一軒家といふにも、餘り淋しく又見す  
ばらしいじゃないか。」

「それでも住んでゐる者は、世間知らずですから、此處が世界一の所だと思つて、毎  
日暮してゐるんでございますよ。」

「さうか知ら？ 僕はそんな氣持は、ちつとも分らんよ。」

と尙もその邊りを珍しさに、見廻してゐるので、好枝は

「貴方、まあこんな所で感心してゐると、遅くなりますから、早く山へ行つて來ませ  
う。折角お辨當を持つて來て、椎茸も蕨も取らずに歸りますと、又笑はれますから。」

「よしそんなら行かう。」

と其處を出て、一丁ばかり細道を登つて行きますと、土で塗り固めた炭焼竈の前に三  
つばかりと六つばかりの、手も足も眞黒な子供を遊ばせて、三十五六の男と三十前後

のおかみさんが、一生懸命に炭の荷造りをしてゐました。

その顔は炭の粉で眞黒になつて、本當に眼ばかり光らせて、化者の様な顔をしてゐ  
ます。

俊夫は餘りの珍らしさに、呆れて物も言はないで、ぼんやりとして遠くからその様  
子を見つめて居りますと、清吉が、

「今日はいゝお天氣でござんす。」

と言へば、

「いゝお天氣でございます、今日はどちらへお出でるえ。」

と聞きました。清吉は物馴れた調子で、

「はあ お客様のお供をして、山へ遊びに行くだ。」

「おゝ さうか、それじゃ此のお客様は、貴方んどこへ此の間見えた、新客のお客様  
だかえ。」

「あゝさうだ。」

「さうかく。」

と言ひ乍ら、夫が鉢巻を取ると、妻は黒い手拭を取つて、叮寧に、

「野田さんとお客様とも知らんで、ゑらい御無禮をしました。」

いつも野田さんの方で、お世話様になります。」

と挨拶しました。好枝はそれに對して、

「いゝえ、私の方こそ、却つていつも色々お世話様になります。」

と言つて、お辭儀を致しました。

二人は何かぼそ／＼相談してゐましたが、

「清吉さ、山へ行つてやつと居つて来るかえ。」

「さうだなあ、椎茸でも取つたり、蕨でも折つたりして来ると、二三時間はかゝるづらか。」

「さうかく、そんならこんな珍らしいお客様が、又こんな山の中へ来て下さる事はないだで、俺等はこれからうちへ行つて、お客様の御馳走に、伍平餅を焼いとくだで、歸りにはお客様と一緒に寄つとくれよ。」

「伍平餅を焼いて呉れるえ、そりや本當かえ。」

そりや御馳走だね、そんなら俺お客様に聞いて見るにのう。」

と清吉は好枝の傍へ行つて、

「好枝様、伍平餅を焼いて呉れるで、歸りに寄つて食べて行けつて、言つて呉れるだが、どうしたらよからず……。」

「さう、そんな親切な事を言つて下さるの、貴方どうしませうか。」

俊夫は訝しげに、

「何を焼いて呉れるのだ。」

「貴方の本當に御存じないもの、伍平餅といふものですわ。」

「伍平餅つてどんなものだい。」

「あのね、糯の御飯を炊いて握つて、木の串にさして炙つて、お砂糖味噌をつけて戴くのですわ。」

「ふゝん、珍らしいものだね。」

「そりやおいしいものですよ、山の中にある人達は、それが一番御馳走で、お祝ひなごの時には、澤山拵へて實家へも持つて来て呉れますの。おいしいのおいしくないの

つて、お話になりません。おいしいといふよりも、本當に珍らしいのですわ。

折角あゝ言つて下さるのだから、およばれして行きませうか。」

「あゝ、よばれて行つて差支へなかつたら、よばれて行かうよ。」

「さう、それならね清吉、およばれますからつて、言つて来てお呉れ。」

「さうかね、そんじやそう言つておく。」

清吉は、

「お客様に聞いて見たら、よばれて行き度いとお言ひだから、氣の毒だが拵へてお呉れよ。」

「食べてつてお呉れるらうかね。折角造つても、そんなものごうもならんと言つて、食べてお呉れんとつまらんど思つて……。」

そんなら俺等仕事を片付けて、支度にかゝるだから、いゝ加減に来てお呉れよ。

伍平餅は焼き乍ら食べにや、味噌つけておくと、まづくなるだから……。」

「あゝよし／＼、時を見計つて來るで、頼むぞえ。それじや行つて來ます。」

「あゝ、お大事に行つといでませう。」

お客様はこんな山路を歩いた事はないづらで、ゑらいづら。

でも好枝様は、お小さい時には、山をお歩きた事も、おありづら。」

「えゝ、私はよく歩きましたから、何ともありませんの。」

「だがお氣をつけて、行つといでませう。」

「有りがたうございます。」

さう言つて見送つてゐる前を通つて、山路を登り乍ら俊夫は

「面白じやないか、あの恰好と言ひ言葉と言ひ、本當に純朴だね。」

「本當に人間が圓いんですよ。山の中にばかりゐて、世間を知らないものですから、

神様みたいなものですわ。」

人を疑ふなんてこと、塵程ありません代りに、人前を飾るなんて事は、ちつとも

ないのですから……。」

「本當だなあ、折角の仕事を止めて、僕達のために餅を焼いて、食はせるつて言ふん

だから、兎に角豪氣なものだよ。」

「貴方お餅と違ふんでございますわ、伍平餅つて言ふんですの。」

「伍平餅か何か知らないけど、兎に角その餅より、真心に味があるんじゃないか、本當に田舎の人はいゝもんだなあ。」

三人は漸く峠へ登りつめました。此の嶺が此の界限では一番高いので、遠くの山や村が霞んで見えます。東の方には三州灘が渺々として、擴つてゐます。方々を眺めて俊夫は思はず驚嘆して、

「これは素敵！ こんな所から海が見えるじゃないか。」

「見えますわ、晴れた日には、ずっと向ふまで見えます。」

「いゝなあ、本當に素敵だなあ、この眺めは……。」

「山もまんざら悪くはないづら……。」

と清吉が言へば

「山はいゝなあ、君、こんな田舎に、こんな景色が見られるとは、僕思つてゐなかつたよ。」

「見捨てたものじやありません、向ふの山へ登ると、富士山が見えるぞへ。」

「さうか、あの峰まではこゝから遠いのか。」

「さうだね、うちから五里位のものづら。」

「さうかな、此處から見ると、一寸で行けさうに見えるが、そんなに遠いんかなあ。」

さう言つて一頻り眺めてから、

「僕ね 好枝、餘り骨折つて登つて来たから、腹が減つたんだよ。」

「さうでございませうね、それじやお辨當を頂いて、蕨を取りませう。」

清吉、お茶を沸して下さいな。」

「はあ、まだちつと早いが、それじやお辨當に、やうか。」

歸りには伍平餅を焼いて、待つてゐるだから……。」

と清吉は一人で嬉しさうに笑ひ乍ら、枯木を集めて火を焚き、木の股を土にさして薬罐を吊して火にかけると、聽て湯がこごとくと煮え立つて參りました。

清吉は白紙に包んだお茶を、そのまゝ火に炙り、湯の中に放り込むと、持つて来た重箱の辨當を茶碗に移し、

「さあ、ごうかお上りてお呉れませう。」

「やあ、有りがたう、あはゝゝゝ。」

君 今、お上りてお呉れませうと言つたね。」

「はあ、さう言つた。」

「さう言ふと僕は、何て言つて食べりやいゝんだい。」

「何とも言はんでも、唯お上りやいゝじやないかへ。何とか言はんと體裁が悪いと思つたら、そんじやごつそうさまになりますと言へばいゝ譯だわいの。」

「何だ？ ごつつをうさまになりますか？」

「ごつつをうさまになりますはいゝが、そんじやは何だい。」

好枝は笑ひ出して終つて、

「そんじやといふのは、それではがなまつたのですわ。」

「さうか。あはゝゝゝ。そんじやごつつをうさまになります。」

「さあ、お上りてお呉れませう。」

俊夫が清吉にからかひ乍ら、愉快に食事をすますと、好枝は道具を片付けて、暫く休んでから、清吉に蕨の出る山と、椎茸の出る山を教へさせておいて、

「清吉、お前一度先に歸つて行つて、彌造さんの所で、晩に御馳走して頂いて歸るか

ら心配しないで下さる様に、と言つといて頂戴。」

そして屹度お砂糖も何もないだらうから、お前買つて来てお土産に上げておいてお呉れよ。

そして早かつたら、お前も手傳つて上げてお呉れ。」

「はあ、それじやわしはお先に行つて、うちへさう言つて来てから、彌造さんここで手傳つて、拵へてゐるから、三時頃までに小屋へ降りて来てくれませう。」

清吉は辨當の空や、薬罐を持つて、山を下りました。

俊夫は上着を脱いで、チョッキだけになり、山の腹に仰臥して、空を仰ぎ乍ら、

春瀟漫の花の色

紫匂ふ雲間より

を歌ひ乍ら、大空を行く雲を眺めて、言ひ様のない愉快な心持になつてゐますと、遠くで美しい聲をして、天然の美を歌ふ聲が聞えました。

それをチツと耳をすまして聞いてゐた俊夫は、我に復つてむつくりと起上つて、聲の方をすかして見ると、半丁ばかり離れた向ふの切株の上に、好枝が腰を掛けて、頻



りに歌つてゐます。俊夫は起ち上ると、上着を小脇に抱えたまゝ足を忍ばせて、後へ近づいて行つても好枝は少しも氣づかないで、夢中になつて歌つてゐます。

その聲が餘り美しいのと、朗かに聞えるので、俊夫は唯恍惚として、傍に佇んでゐましたが、やゝあつてその氣配に氣がついたのか好枝は、ふと後をふり向いて、

「あら貴方は何時ゐらしたの？」

「僕今來た所だ、好枝！ 御前とても歌がうまいんだね。僕吃驚したよ。」

「まあ厭ですわ、私歌なんて歌つた事ありませんもの。」

「今歌つたじやないか。」

「でも貴方、お一人で寢轉んで、歌なんか歌つてらして、淋しいものですから、私も一人で歌つたんですわ。」

「全くかういふ静かな山の嶺へ来て、思ふ存分聲を張り上げて歌つて見るのも、面白いものだね。でも僕はお前がそんな大きな聲で、歌へるとは思つてなかつたよ。」

「私始めてでございますの、そして恐らくこれが終りですわ。」

「何故？ これからだつて、大いに歌へばいゝじやないか。」

「だつて境遇が、私にそれを許して呉れないだらうと思ひますわ。」

「そんな事ないよ、境遇は作れば出来るよ、時々又休暇でも取つたら、二人で山へでも海へも行つて、大いに歌つて遊ばうじやないか。」

「でも貴方、そんな事夢でございますわ。何時の間にか若さが行つて終ひますもの。」

そんな呑氣な夢を見てばかりゐられませんわ。」

「さうかも知れないね、だけれども好枝。」

考へて見ると、人間といふものゝ生活程度は、色々あるものだね。

僕は何時だつたか、大阪の淀川へ行つた事がある。

その時見たんだが、小さな船の中に、三人ばかり子供を連れただおかみさんが、世帯道具を一杯擴げて、何か炊いてゐるじやないか。僕は不思議に思つて、どうしてあんな處で、あんな事をするんだと聞いたたら、或人が教へて呉れたよ。

あれは船頭の妻で、何時も子供を連れて、船の中にあるんだつて言ふから、家はなにかつて聞いたたら、家なんか無い、船が家なんだから、降つても照つてもあの船の中に住んでゐる。さうして荷物をあちらこちら運搬して、子供を育てゝゐるんだから、

呑氣なものだと話して呉れた。

僕は面白い生活だと、感心して見て来たが、今日は又下の炭焼さんの小屋を見て、一層深く感じたね。幸福といふ様なものは、名譽や地位や金ではなくて、矢張どんな小さな船の中で、も、こんな山の中のさゝやかな小屋の中で、も得られる。

本當に好いた同志、仲良く暮す事が出来れば、それが一番の仕合せだね。

なまじ中流以上の家庭になると、名譽や地位や金が邪魔して、本當の幸福な生活が得られない様に思ふね。」

「さういふ事もございますでせうね、でも理解し合ひ、愛し合つてゐたら、不幸になるといふ事もございますまいが、名譽地位がありお金があつて、不自由をしないと生活上の苦しみが無いので、本當の同情がお互に起りませんから、色々な間違ひが起るのではないでせうか。貧しい者はお互に、夫は妻を妻は夫を大切に思つて、少しでも自分が骨を折つて、相手に樂をさせてやり度いと思ひ合つて、一生懸命の力で助け合ふので、そこがうるはしく行くのではございませんまいか。それで餘計に信頼も、愛情も深くなつて行くのだと思ひます。

子供でも餘り有り餘る程の財産家で、親が不自由なく與へた金より、親が艱難して汗水垂らして、養つて育て、貰つた子供の方が、思想が堅實で親孝行だつて言ひますから！」

「それはたしかにさうだね、僕もさう思ふ。

それだから本當の大偉人は、こんな山の中か又は廣々とした、海邊なんかに出來るものだ。屋根から朝日を拜んで、屋根へ夕日を送る様なコセ／＼した町では悠々とした偉人は出なくて、せゝこましい人間ばかりが出来るんだ。僕は田舎が好きになつちやつた。

若い中一生懸命働いておいて、年が寄つたら田舎に引つ込んで、かうした自然を相手にして、のんびりと餘生を送らうか知らず？」

「でも貴方、田舎もこんな所まで入つたら、あんまり深すぎますわ。

もう少し便利などころでなくちや、私困りますわ。」

「さうだね、町へ行き度くなつたら、何時でも出掛けられる所で、閑靜な所を撰び度いね。」

二人は心ゆくまで山の自然に親しみ乍ら、暫く蔵を折つたり椎茸を取つたりして遊びましたが、約束の時間が来ると、小屋まで下りて来て立寄りました。

小屋の中では炭焼き夫婦が、それでも體も洗ひ顔も洗つて、着物を着替えて、先刻とは見違える程さつぱりとした姿で、一生懸命に御飯を大きな小判型に握つて、木の串にさした物を、圍爐裡に大きく火を焚いて幾つも並べて焼いてゐました、清吉も一生懸命で手傳つてゐます。二人が入つて来ると、

「まあお客様、よう寄つてお呉れました。

さあお上りしてお呉れませうと言つても、坐つて貰ふ所もないだが、こんな汚い小屋へ坐つて貰ふのも、後の話の種になるに、先づこつちへ入つてお呉れませう。」

夫婦が手を取る様にすゝめるので、二人が中へ入ると、それでも何處にあつたのか一枚きりの花莫産を出して来て、そこへ擴げて、

「さあ此處へお上りしてお呉れませう。

こんな汚い莫産でも、蓆の上よりはいくらかありましたに。」

と勧めるので、二人はその好意を謝して、上へ上りました。

おかみさんが、茶碗にお茶を汲んで出して呉れると、夫は

「先づ焼き立てを一本、お上りしてお呉れませう。

熱い中に食べにや、冷えるごまづいだから……。」

と俊夫の前に出すと、俊夫はけぼくとして、

「これどうして頂くのですか。」

「はは、は、は。それはどこからでもいゝから、食ひついて食べてお呉れりやいゝんだね。」

「食ひついて食べる？ 本當かね 好枝。」

「本當ですの。」

と自分も一本受取ると、

「貴方本當にかうして召上るんですわ。」

と頭から食べて見せると、俊夫は笑つて、

「こりや面白い、好枝、お前のさうして食べてゐる所を、僕がスケッチしておくから、さうしてちつとしてゐて呉れ。」

「あらまあ、厭ですわ、そんな事なすつたら……。」

俊夫は自分も面白がり乍ら、一口食べて見て、

「これは美味しい、こんな美味しいもの、僕は食べた事がないよ。」

これうちのお父さんやお母さんに、お土産に一本づつ貰つて行かうじやないか。」

「お客さま、それは駄目でござんすだよ。冷へたらまづくつて、食はれやしませんだから……。」

「それじゃ好枝、お前うちへ行つたら、これを拵へて、お父さんやお母さんに上げて呉れないか。」

「それも駄目でござんす、これはかう言ふ山の中で、木の間から月や星を眺めて、蟲の聲や鹿の聲を聞乍ら、食べる所に味があるので、町でなんか幾ら上手に好枝様がお造りでも、うまくはありません。」

「さうですかなあ、矢張り環境のせい知らず？ それなら僕惜しい事をした。」

こんな御馳走があるなら、お父さんやお母さんに、もう二三日遊んで貰つて、一緒に此處へ来ればよかつた。」

「本當にさうでしたわね、貴夫惜しい事をしましたね。」

と好枝が言へば、彌造夫婦も、

「本當に皆さんで、お出でてお呉れるごよかつたに。」

と言ひ乍ら、次ぎ／＼に焼いて熱いのを、俊夫に勧めました。

何本も食べて満腹してから俊夫は、小さな木の皮で圍んだ窓際まで出て、下を覗く

と、谷川の水がさら／＼と流れて、早や邊りは日が暮れて、室には木の間に洩れて、

月の光が淡くさしてゐます。この山の神秘に打たれて、うつとどとしてゐると、何時

か清吉もこの御馳走をよばれて、紺の風呂敷に尙一杯土産に貰つて包んでから、

「お客様、まあ、餘り晩くなりますから、ぼつ／＼歸つて行かまいかね。」

「貴方、餘りおそくなりませうから、もう歸りませう。」

清吉と好枝にさう言はれて、俊夫は名残り惜しさうに立上り、

「僕はこんな所に、一晩でいゝから泊めて貰つて見たいなあ。」

「まあ貴方は、そんな我儘な事仰有つて……。」

「若しさうお思ひになりや、こんな汚い處でも、お泊りしてお呉れませう。」

その代り布團などは粗末なもので、貴方なんか見た事もない様な、破れ布團だからおはづかしいが……。」

「有りがたう、だげど又好枝のうちで、心配するといかんから、歸らせて貰つて又來ますよこの次に。」

「さうですか、それじや又長い事遊んでお出でたら、登つておいで、お呉れませう。こんな汚い小屋で、坐つて貰ふ處もないが、貴方衆の様に、立派なお暮しをなさる人には、又話の種にもなるに。」

「いゝや、そんな事はないです。本當の幸福は貴方方の様な、かういふ暮しをなさる方にあるのです。本當に僕美しいんです。」

「それでは、色々御馳走様になりまして、有りがたうございました、宅へ歸つたら又珍らしい物でも見付けて送りませう。」

「どう致しまして、そんな御心配はいりません。貴女方が喜んで上つてお呉れたで、わし等は折角拵へた甲斐があつて、嬉しうござんしたよ。」

と三人を送り出して、小屋の表まで出ると、黒く煤けた提燈を清吉に渡しました。清吉はそれを受取つて、先に立つて山路を歩き乍ら、

「足を踏み外すと、谷へ落ちるから、成るだけ山の手の方を歩いてお出でませう。」

「あゝ、よし〜。」

「それから二人並んで歩くと、道が狭いで怪我をせるで、ちつたあ淋しくても、我慢して、一人々々お歩きしてお呉れませう。」

「まあ清吉、何といふ馬鹿な事を言ふの？」

「でも轉ばぬ先の杖つて事があるから、わしは心配だと言ふだ。」

「清吉君も却々隅におけぬ事を言ふじやないか。あは〜、〜……。」

「でもお客様のお供をして來て、わしの注意が足らずに、谷こけたといふと、うちへ行つておぢい様や、旦那様にうんとおこられるから……。」

清吉はさう言つて、提燈を横へ差出しつゝ、道を明るくしながら、木の下の道を、登つてた時の様に、幾洞幾澤か越して、漸く里へ出て野田家へ歸りました。かうして夢の様な歡樂の幾日か過ぎて、四月の十六日に、名残惜しい故郷の父母

祖父母兄妹や友達村人に送られて、迎へに來た自動車に乗つて、別れを惜しむ人達に又來る日を約しつゝ、好枝は懐しい家を後にしました。

涙ながらに若き二人の行末に、何時くまでも幸あれど、見送る人々に、後髪引かれる思ひで、見返る好枝も、神ならぬ身の、これが永遠の別れとは知る由もなく、又逢ふ日を楽しみに、振返りく思ひ出多き故郷を離れて、自動車は驀らに走り去るのでありました。

## むら雲

俊夫と好枝は、楽しい新客を終へて、將來の最も意義深く幸多き、家庭生活の理想を語り合ひつゝ、只管前途の幸福の夢に浸る心持で、我家へ歸りました。

二人の歸つた姿を見られたら、両親はさぞかし心から喜んで、迎へて呉れる事だろうと想像して、その最も好まれる土産の數々を持つて、勇んで家へ入つて見ますと、家の中はしんとして、両親の聲も致しません。

唯女中のきみが出て來て、

「あら 若旦那様、奥様お歸り遊ばしませ。」

と挨拶しました、俊夫は元氣よく

「只今、きみ、お父さんやお母さんは、家にお出でになるかい。」

「はいお出でございます。」

奥のお座敷の方で、和子様と何かお話ししてゐらっしゃいます。」

「和子が來てゐるのか。」

「はい、あの……。」

どきみが何か口籠つてゐるのを聞き流して、俊夫は好枝を連れて、奥座敷へ行つて見ますと、両親と和子は何か頻りに、話して居ります。

二人が其處へ行くど、始めて氣がついて、

「やあ、お前達歸つて來たのか。」

「只今歸つて參りました、大變長い事遊んで來ました。」

好枝もそれに續いて、

「お父様、お母様、長い事遊ばせて頂いて參りました、實家の方からよろしく申上げ

て呉れる様にと、言ひつかつて参りました。

「丁寧に両親に挨拶してから、和子に向つて、

「和子様、長らく遊ばせて頂いて、只今歸つて参りました、今日はよくお出で下さいました。」と言つて、お辭儀を致しました。

和子が機嫌よく答へて呉れる事を想像して、かう言葉をかけたのでしたが、和子は「お歸りなさいませ。」

と一寸お辭儀したゞけで、にこりともせず顔をも向けてゐます。

俊夫には、一言も言葉をかけません。俊夫は訝しく思ひ乍ら、

「和子お前何時來たの？」

と尋ねました。

「私貴方達がお客にゐらしてから、四日目の日に來ましたわ。

お父さんやお母さんが、田舎から歸つてゐらした日に……。」

「さうか、では大分長お客をしてゐる譯じやないか。」

「長お客だつて仕方がありません。行く所がなければ、一代でもおいて頂かなければ

なりません。

私の生れたうちですもの、ごんなに邪魔にされたつて、仕方がありませんわ。」

といふ終りの言葉は、早や涙聲になつて、聞き取れない位です。

二人は何が何やら、和子の言ふ事が分りませんので、怪訝な顔をしてゐると、お母さんは、

「まあ、お前達はお客様じやないんだから、そんな所にゐないで、こちらへずつと入つたらどうだえ。和子が突然あんな事を言ふから、變に思ふだらうけれども、和子は黒瀬の方から離縁されて來たんだよ、俊夫。」

俊夫は吃驚して、

「え、つ！ 離縁して歸つたんですつて？」

本當ですか、それは……お父さん お母さん、事實なんですか。」

「それが事實なんだ、眞にどうも黒瀬のやり方が都合千萬な話で、わしも腹へ落ちないから、お前が歸つたらよく相談して、處置しようと思は今日まで待つてゐたんだ。」

「それは一體、どうした譯からでせう。」

「どうもかうも、あつたもんじやない、わし達が好枝の在所から歸つた晩に、和子が愛子連れ、ひよつこりやつて来て、御客に來たと云ふのでさうかと思つてゐたら、その翌日に仲人の石崎さんが來て、黒瀬家の方から、折角子まである仲だから、成るべくなら圓満に治め度いと思ふけれども、どうも黒瀬家の家風に合はないから、引き取つて貰ひ度いと言つて來たので、

「それには何か事情があるのだらう。」

と聞いて見ても、何も言はないで唯家風に合はぬといふ事一點張り、何も外の事は言はずに、引取つて貰ひ度いといふので、兎に角よく考へて相談してから、御返事をするが、何分子まである仲だからと、その日は歸したんだが、一昨日は又お宮の邊りまで、黒瀬のお母さんが來て、きみが抱いて遊ばせてゐた愛子を、一寸貸して呉れと言つて抱き取つて、それつきりうちへつれて行つて終つたので、大騒ぎをしてゐたら、間もなく荷物を全部送りつけてよこして、子供はこちらで育てるから、心配して呉れなくてもいい。

荷物は和子のものだから、受取つて貰ひ度いと、自分勝手な理不盡な事を言つて、

よこしたんだよ。石崎さん呼びにやつて、色々かけ合つたけれど、兎に角向ふは義理人情を缺いてする事だから、一通りの話では埒はあかないし、大道へ荷物をおいて、理窟を言つてゐても、世間へ聞えが悪いから、兎に角荷物はうちへ取り込んで、倉へ仕舞つたけれども、話は何もついちやゐないんだよ。

お前達には先づ歸るまでと思つて、通知しないであつたけれども、私達は歸つた日から、こんな思ひもかけない事が出來たものだから、お父さんは腹を立てる、和子は欺されて口惜しいのと、愛子をつれ去られたのが悲しいのとで、毎日泣き通しだし、わたしは本當に氣が狂ふ程心配してゐるんだよ。

さうだけご俊夫、黒瀬さんの處には、どうしてあんな譯の分らない人達ばかりが揃つてゐるんだらう。

氣に入らぬなら入らぬで、ちやんと順序を踏んで話して呉れ、ばい、のに、和子を欺してお客によこしておいて、後から突然斷つて來たりして、こちらが承知しない中に荷物を送り返して、そのお負に和子の手から、愛子をまるで盗む様にして、奪つて行つて終つたりして……本當に鬼でも仇同志でも出來ない事じやないか。



何といふ怖ろしい人達だらう。私は口惜しくて／＼仕方がないから、お前が歸つたらよく相談して、話をつけて貰ひ度いと思つて、毎日待つてゐたんだよ。」

俊夫はそれを聞くと興奮して、

「そんな理不盡な、馬鹿化た事があるものですか。それにしても和子、そんな事になるまでには、多少何か原因でもあつたんじゃないのか？」

和子は漸く涙を拭いて、

「別に大した原因といふ程の事もないんですけど、黒瀬が二三ヶ月前から悪い方面へ時々遊びに行く様になつて、心安い女でも出来たのではないかと思ひますの。」

そんな事のために此頃、時々夜泊つて、朝歸つて来る様な事があるものですから、それをお母さんが、私が行届かぬからだご、私ばかりに叱言を仰有るものですから、家の中に氣まづい事も、幾分かあつたんですわ。

それが近頃になつて、段々遊びに身が入るので、晝間の診察時間や往診時間にも、家にゐない事があつたり、受持の病家を診廻る事を怠つたりしますので、お母さんが遺瀨なく思つて、私に待合へ行つて、主人を連れて来いと仰有いますので、二度も三

度も厭な思ひをして、迎へに行つて見たんですけど、あゝいふ處の女將さんや藝者などは、一筋縄では行かぬ、薄情商賣の人達です。

遊んでゐてもゐないなど、言つてゐるのです。

無理に上らうとすると、家宅侵入罪など、言つて、上げては呉れません。

何度も／＼恥をかゝせられて、私はごんなに泣いたか知れませんが。

そんな事でも随分口惜しい、情ない思ひをしてゐるのに、お父さんやお母さんは、黒瀬が段々深入りするのには、私が行届かぬためだと、皆私の故爲にして終ふんです。

そして此の間、兄さんの御婚禮より三日四日前、宮子さんが京都の工學士の山内繁夫さんといふ方の所へ、お嫁に行く様に昨年の秋から定つてゐて、其の結婚のためにすつかり支度までして終つたんですのに、ごういふ都合からか、向ふから破談を申込んで来たものですから、宮子さんはすつかり、力を落して終つたのです。

その事まで何とか彼ごか、私のわざの様に仰有つて、辛く私に當つて見えて、兄さんの御婚禮の日も、本當なら當然主人と二人で、一日二日前から手傳ひに来るのが、親戚や近所の手前、當り前の事ですので、主人は他所へ旅行にやつておいて、私一人

だけでよこしたので、餘りひどいと思つて、私も口惜しかつたのですけれども、お目出度い時ですから、忪えてお父さんにもお母さんにも、そんな事は一言も言ひ出さないで、機嫌よく歸つて行きました。

そしてうちへ入つて、只今歸りましたと言つて、挨拶しても、歸つたかとも言つては呉れず、向ふのお父さんやお母さんへ、貰つて行つた御馳走を出しても、見向きもしません。それからろくにやさしい口も利かずに、四五日は氣まづい思ひをして暮してゐました。

それからもう一遍嫁見に行かなければ、義理が悪いから、行つてお出でと言はれま

すので、その時は私も何も氣づかず、愛子をつれてこちらへ參りました。

翌日石崎さんが来て、今お父さんのお話になつた様な事を言つて、こちらで承諾もしない中に、無茶苦茶に荷物を送つて寄越したんです。そしてお母さんが自分で来て、愛子まで私の手から、攫つて行つて終つたのですもの……。

譯が分らぬと言つてよいか、非道といふか、人間としては出来ない様な事をして、私を虐めるんですもの。私口惜しくて……こんなにしてまで私、生きてゐたくはあり

ませんわ。兄さん、ごうかして愛子だけでも取返して来て下さい。お願いですわ 兄さん……。

と言つて、和子はそこへ俯伏して、聲を上げて泣き出して終ひました。

父は堪り兼ねて、聲を荒立て、

「泣くな馬鹿！ 泣いたつてどうなるか。」

「でもあんまり向ふのやり方がひどいので、和子の口惜しがるのも無理はない。

まだ乳の欲しい盛りの子供を連れて行つて、どうするつもりなんだらう。

和子は乳が張るので苦しいし、あれ程一生懸命可愛がつてゐたのに、それを引離して連れて行くなんて、こんな無慈悲な事がよく……出来たと思ふと、わたしは腹が立つて仕様がなない。」

「全くひどいなあ、言語道斷です。そんな無法な事が、通るものであるかどうか、僕は何處までも正義を以て戦つてやります。」

俊夫はさう言つて、深く心配してゐる父母を慰め、和子を力づけておいて、自分は休む暇もなく、直ちに仲人の石崎を尋ねて、その眞偽を正し、それから黒瀬家へも出

向いて、その不法を責め、又子供の將來の幸福のために、和子の復縁を只管頼みましたが、黒瀬家の兩親又夫の茂も、頑として聞き入れず、唯

「ごうも家風に合ひませんから……。」

といふ事のみ強く主張して、復縁を承知しませんので、俊夫も腹を立て、家へ歸り一時は父母と相談の上、無法離婚の訴訟を起さうかどまで、言ひ出しましたが、それは却つて世間の物笑ひになつて、山田家の名譽に疵がつくばかりか、和子の將來のため再縁をまで妨げる事になるからと、結局泣寝入りといふ形になりまして、籍を受取つて終ひました。

けれども和子は、最後まで愛子だけは、私の手へ取り戻して欲しいと、願ひ續けましたが、斷然拒絶して、返して呉れませんので、和子は餘りの口惜しさ悲しさ淋しさ、愛子可愛さの餘り、恩愛の情に堪えかねて、極度のヒステリーに罹つて終ひました。それでなくても幼い時から、一人娘で寵愛せられ、我儘氣儘に育つて、自分の思つた事は何事でも、仕遂げねば承知しないといふ、勝氣な性質も、一旦黒瀬家に入つて嫁となつたからは、あらゆる苦痛を強ひられ、侮辱されて、忍び切れない程心に

痛手を負はされて、理不盡に實家へ戻され、總べての幸福と共に命懸になつて慈しみ育てゝゝた愛子を奪はれた事に依つて、眼に觸れる此世の一切の物を、呪ひ盡さねば居られないといふ様に、感情が荒んで参りますのも、止むを得ぬ事でした。和子がかくまでに悲しい運命に翻弄されて、日夜涙のかはく間のないのを見ると、兩親はもとより、肉親の兄弟だけに俊夫は、和子に深く同情して、成るべくその心を慰さめ引き立て、他の方面から多少でも、和子の氣分を甦生させる材料を求めて、愛子の事を忘れさせやうと思つて、時々お母さんと一緒に、芝居や活動を見に行く事を勧めたり、保養に行く様に勧めたりして見ましても、和子の心持は却々治らないのでした。そればかりか、却つて心持がより以上に荒んで参ります。

それは俊夫夫婦の間柄が、至つて睦しく、俊夫が會社へ通勤する様になつてからも朝夕家にゐる間の好枝に對する、總べての態度などは、和子が且て夫から一度も受けた事のない程に、細やかな愛情を示しますので、和子が見まいと努めれば努める程、尙一層その眼に見え耳に聞えて來ますので、唯譯もなく嫉妬心と、憎惡心のために火の様に胸が燃えるのでした。

それに俊夫が好枝に親切であるといふばかりではなく、父の昭博までが、まるで好枝を生みの我が子の様に可愛がつて、一にも二にも好枝々々と言つて、寵愛するばかりか、お客でもあると、すぐに嫁がくと言つて、嫁の自慢ばかりするのを見ると、一層腹を立て、それがために好枝のする事なす事、一々氣に食はなくなつて、何も彼も自分に對する當てつけか、皮肉の様にばかり取つて、日が立つにつれて、嫂としての好枝が、唯譯もなく憎らしくして、たまらなくなつて行くのでした。

それに又聰明そのもの、様に世間から、尊敬されてゐた母親の茂子も、我が子の可愛さに眼が眩んで、和子があれ程不幸になつて、毎日涙のかはく暇もなく、泣き暮してゐるのに、俊夫や好枝はそれを思ひやるどころか、却つて夫婦の親しさを遠慮もなく、親兄弟の前でも見せつけたりするのは、餘り人情がなさ過ぎる。

和子の心持を思ひやつたら、少し位は口の利き方位、遠慮してもよからうのにと思ふのに、お父さんまでも一にも二にも、好枝々々と言つて嫁ばかり寵愛して、人毎に嫁の自慢ばかりしてゐるのを見ると、何となく淺ましくも又、怨めしくも憎らしくも思へて、始めの中は何とも思はなかつた、好枝の日常の態度、言葉つき仕事等も、段

々と缺點が見え出して、その一つ／＼がたまらなく氣に入らなくなりました。

茂子自身でも時々、こんな筈ではなかつた、こんな心持になるのは、自分の心の迷ひからだど考へ直し、好枝の總べてを正しい方に見直して、眞の愛とまごころを以て導いて行かなければならないと、本心でははつきりと悟つてゐますけど、すぐにそれが邪心に攪き亂されて、何の意味もなく憎み度い様な心持になるのを、どうする事も出来ませんでした。かうして日一日と、家庭は惱しい空氣に包まれて、晴れやかな笑ひ聲など少しも、聞えなくなりました。

## 森の囁き

或日昭博も俊夫もゐない晝頃、隣の家のおかみさんが、ひよつこり裏口から訪れて和子の耳に何事か囁きますと、和子は忽ち飛び上る程喜んで、

「あれさう、本當？ 小母さん。」

とまるで別人の様にはしやいで、お母さんにも耳打ちすると、すぐにおかみさんと一緒に家を出て、お宮の森の方へ走つて行きました。

森の木立の所まで來ますと、そこには黒瀬家の娘の宮子が、四十位の婦人に愛子を抱かせて、にこ／＼し乍ら立つてゐます。和子が近づいて行くと、宮子は

「まあ、お姉様、よく來て下さつたのねえ。」

「宮子さん、貴女よく愛子をつれて、來て下さいましたのね。」

本當に私……ごんなに逢ひ度く思つてゐましたか……。」

と言ふ後は涙で、二人は手を固く握り合つて、暫く泣いてから、和子は半ば氣狂ひの様に、乳母の手から愛子を抱き取つて、

「愛ちゃん、よう來て呉れたのね。」

お母ちゃんを忘れやしないだらう、愛ちゃん、あんたの母ちゃんよ……。」

と、覗き込んで言ふと、流石に親子の血肉を分けただけに、愛子は喜んで、ニコ／＼し乍ら、和子が胸を開けて與へたお乳を、喜んで呑み初めました。

三人はその様子を見て、一入涙にくれてから、宮子は、

「まあ、矢張り忘れないで、喜んで呑んでゐますわ。」

と言へば、和子は泣き乍ら、

「え、忘れてごうなりますか、親ですもの。本當に可愛さうに……。」

「姉様も愛ちゃんの事を、忘れる事は出来ませんでしたでせう。」

「え、え、私本當に他の事は諦めても、愛子の事はごんなにしても諦められないで、毎日々々泣いてゐましたの。」

「さうでせう、私本當にお察ししますわ。姉様はお母様を、本當にひどい人だと、怨んでゐらつしやるでせう。」

「それは私が行届かぬので、離縁されても仕方がないと、諦めては居りますが、此の子だけは私に、育てさせて下さつてもいゝのにと、それをいつも／＼思つて泣いてゐますの。」

「さうでせう、本當にお父様やお母様も、そんな事をなさらずに、姉様に今迄通りゐて頂く様に、私も何度も言つたんですけど、お母さんは兄さんがあんなに放蕩するのは、皆姉さんのわざの様に誤解して見えるんですもの、仕方がありません。」

幾ら姉さんがしつかりしてゐて下さつたつて、若い時ですもの、魔がさば少し位よくない遊びをする事位、ごこの人にもあるんですもの。

兄様ばかりぢやありませんのに、それが分りませんのねえ、

それに姉さんも御承知の通り、私の縁談が破れた事までも、何のかわりもない事だのに、姉さんのわざか何かの様に考へて、突然こんな事をするんですもの。

私自分の肉身の親ながら、世間へ出て来ても恥づかしくて、顔向けが出来ませんので、家にゐるのも何だか面目なくて、何處か人のゐない處へ行つて終ひ度い様な氣がしますの。姉さん、お願ひですから、今一度歸つて来て下さいませ。

さうすれば愛ちやんとも一緒に暮せますわ。

兄さんだつて何時までも、そんなつまらない事をして、遊んでばかりはゐないでせう、もう直ぐに眼が覺めて、昔の兄さんに歸るにきまつてゐますわ。

姉さん、歸つてゐらして下さい、お願ひですから……。

「貴女が仰有るまでもなく、私は返して頂き度いんですけれど、歸らせて頂けないではありませんか。」

「私一生懸命で父さんや母さんを説きますわ、そして兄さんの眼がさめる様に命がけて兄さんを諫めます。姉さん、どうぞ私を信じてゐて下さい。」

「有りがたうございます、宮子さん、貴女の御厚意は、私死んでも忘れません。」

貴女がうちの兄さんのお嫁さんに來て下さつたら、私もこんなに離縁をされて、愛ちやんと別れて泣かなくてもよかつたのに、何故貴女は兄さんのお嫁さんに、來て下さらなかつたのでせう。」

宮子は淋しく笑つて、

「だつて姉さん、それは無理ですわ、別に姉さんのお宅の方から、正式に私を貰つて下さるなんて、お話はなかつたのですもの。」

「あら！ それは違ふんですわ。」

貴女に來て頂かうといふ様に、内々相談してゐる中に、貴女が京都の山内さんと、御婚約なされたから、仕方なしに兄さんも、今のお嫁さんを貰ふ事に決めたんです。

お父さんやお母さんだつて、貴女さえ來て下されば、今のお嫁さんみたいな人を、貰ふんじやなかつたのですけど、貴女が京都へお決りになつたので、止むを得ずにかうなつたのですわ。それから又貴女が、あんな事におなりになつたのですもの。幾ら私が惜しい事をしたと思つても、あの場合どうする事も出来なかつたんです。

「宮子さん、それは分つて下さるでせう。」

「よく分つてゐますわ。私そんな事なんとも思つてはゐませんの。」

結局お姉さんのお宅へ、貰つて頂く御因縁がなかつたのですわね。」

「宮子さん、そんな事があつてはならない事ですけど、若し今のお嫁さんが、離縁にでもなつたら、貴女に来て頂きますか？」

「まあ姉さん、どうしてそんな事仰有るのですの？」

姉さんのお宅のお嫁さんは、大變よく出来た方だつて、言ふ事じやありませんか。」

「ですけどそれが、お話しになりませんのよ、世間では何と云ふか知れませんが、

本當に今度来た兄さんのお嫁さんたら、とてもお話しになる様な人じやありませんの。満足な御飯一つ炊けた事はなく、又お掃除一つろくな事出来ないので。」

「まあ冗談でせうそんなこと……。」

「何が冗談な事があるものですか。本當に私呆れてゐますのよ。」

父は男ですから、ちつとも氣がつかずにぼんやりしてゐますけど、母は女だけに何も彼も分りますから、これではとても、仕方がないと言つてゐます。

ですから大きな聲では言はれない事ですけど、遠からず實家へ歸す事になるだらうと思ひますの。それも後に適當な人があればいゝんですけど、ないと兄さんの心が逸れたりしては困りますから、それもよく考へてからでなければ出来ませんのよ。

貴女でも来て下さるといふ事が、決つてゐれば安心して、きまりをつける事が出来るのですけど……。」

「まあ姉さん、そんな事が出来るものじやありませんわ。」

そんな事なすつたら、お嫁さんがお可愛さうじやありませんか、第一お兄様との間柄は、大變お睦じくてゐらつしやるのでせう。」

「睦じいの睦じくないのつて、まだ一ヶ月や二ヶ月ばかりですもの、無茶苦茶で暮してゐるんですから、本當の性質や缺點なんか、分つてやしません。」

けれども今に、眼がさめて来るにきまつてゐます。

それに兄は長男ですし、到つての親思ひですから、お父さんやお母さんが、家の爲に面白くないと言へば、離縁するのは、譯ない事だと思ひます。

そんなに好き合つて貰つた、お嫁さんじやないんですもの。

貴女なんかと比較したら、とても問題にはなりません。兄さんだつて、貴女に来て頂ける事が、はつきりしてゐれば、今のお嫁さんなどに未練はないと思ひます。貴女さえ屹度来て下さる事を、承知してさえ下されば、私お母さんと相談して、話の種を作ります。ねえ、お願ひですから来て下さいな。」

「だつて姉さん、現在お嫁さんがゐらして、御夫婦睦じくゐらつしやるのですものそんな罪な事、私考へられませんわ。」

「だつて貴女、ごうせ遅かれ早かれ、離縁になるに決つてゐます、私がごうかう言はなくつたつて、兄さんは一生連れてゐる筈はありません。」

第一お父さんやお母さんが、可愛さうですもの……。」

「まあ、姉さん、そんな事お考へになるより、姉さん貴女が、一日も早く歸つてゐらして下さいませよ。愛ちやんが可愛さうですから……、私姉さんのために、命をかけてでも父や母や兄を説きます。」

そんな話を夢中で二人がしてゐる處へ、母の茂子が來ました。そしてその話を、聞くともなく聞いて終ひましたが、流石に聰明な女だけに、そんな話には少しも觸れず、

「まあ、宮子さん、よく来てやつて下さいました。」

それにしても貴女、愛子をつれて、よくお宅を出られましたのね。」

「はい、母が二三日京都の方へ、參りましたものですから、私ばあやと愛ちやんをつれて、名古屋まで買物に行くと言つて、家を出て此處まで來たのですの。」

「まあ、お若いのに、よくそんなにお氣がついて下さいました。」

本當に有りがたうございました、和子が毎日々々、愛子の事ばかりこがれてごうしてゐるか知ら？と言つて、泣いてばかり居りますので、餘り可愛さうですから一度何とかして逢はせてやり度いと、ごんなに思つてゐたか知れませんでしたのに、よくまあ逢はせてやつて下さいました。お、愛ちやん、叔母さんにつれて來て頂いて、本當によかつたね。おばあちやんだよ、忘れやしないかね、一寸來てお呉れ、抱つこして頂戴。」

と言つて、和子の膝から愛子を抱き取り乍ら

「こんな子供もあるんですから、成るべくなら親子が別れて暮す様な、悲しい思ひをさせ度くはありません。私の方から改めてお願ひするといふ、譯ではございませんの



ですが、貴女のお力で若し、和子と愛ちゃんが一緒に居られるものなら、お骨を折つて心配してやつて下さいませね。」

「あの私、その事只今も、姉さんに申上げてゐる處ですの。どうしたつて、歸つて頂かなければなりません。私ごんなにしてゞも、歸つて頂ける様に、力を盡しますわ。」

「本當にさうして頂けたら、ごんなに有難いでせう。そして貴方が若しうちの嫁にでも、来て頂けたら、ごんなに後も仕合せになるか分りません。」

「まあ、小母さま、そんな事仰有らないで下さいませ。」

立派なお嫁さんが、ゐらつしやるのでございますもの、そんな事が若し聞えでもしたら、大變でございますわ。私は唯愛ちゃんののために、姉さんに歸つて頂き度いと、それだけを願つてゐるんですの。」

さう言つて、幾分きまり悪さうに、宮子は顔色を赤らめるのでした。

神経質には見えませんが、目鼻立ちの整つた美しい、スラリとした宮子の姿を眺めて茂子は今一つの心では、今しがたエブロンを掛けて、裏庭で頻りに張物をしてゐた好枝の面影を思ひ浮べて、様々な幻影を描くのでございました。

## 心の闇

お宮での事があつてから後は、和子の心は一層急激に變化して、好枝を憎み罵るだけでなく、母の茂子も事毎に好枝のする事成す事を非難して、片つ端からやかましく叱言を言ふ様になりましたが、好枝はそれがどういふ理由からだといふ事を、知る筈がありません。心秘かに嫁入りの前の晩に、叔母の道枝からしんみりと聞かせられた話を思ひ出して、今こそ自分はその位置に置かれてあるのだ。

假令ごの様に叱られても憎まれても、自分はそれを情ない仕打ちだなご、最初にもお母様や和子様を怨んではならない。

和子様があんなに言はれるのも、御自身が御不幸になられて、可愛い子供にまで別れさせられたために、その切なさ悲しさのために、遺瀨ない淋しさの餘り、心にもなくあんな風に仰有るのに違ひない。又お母様も御聰明な方であつても、命懸け可愛い一人娘の和子様が、思ひがけなく離縁なごされて、可愛い子供さんと、生木を裂く様に引き分けられて、何時も口惜しがつたり悲しがつたりして、泣いてばかりゐらつし

やるのを御覽になれば、子に引かされる尊い親心から、色々心配はしても、慰める方法もないために、同じ心になつて惱んでお出でになるのだ。

それだから私達夫婦が、和子様を當てつけて親しくする様に見えて、御氣に入らないのかも分らないが、それは御尤もな事で、決してお母様や和子様が悪いのではない。さうかと言つて何の理由もないのに、親切にして下さる夫に對して、無愛想な態度も取れないし、若しそんな事をしたら、夫の機嫌を害ひ、家庭の中でも又會社へ行つても、不愉快な心地でゐらつしやるために、ごんな間違ひが起るかも知らない。假令ごんな間違ひはないにしても、心が不愉快で暗い氣分であらしては、能率の上らないのは分り切つた事だ。

それを思へば妻としての責任上、うちにゐらつしやる間は、成るべく心持を慰め、趣味を生かして、心に明るさと満足と與へて上げなければならぬ。

それがためには、夫の優しい言葉に對して、自分も笑顔で受け答へるといふ事も夫の社會的成功を期するためには、最も大切な内助の務めだと思ふ。けれどもそれが、又餘りに露骨になり過ぎて、殊に今の様に不幸に陥つて、浮世を

儂んで、慨きの生活をして見える、和子様やお母様の感情を害しては、家庭の圓滿といふ事が、全く破れて仕舞ふ。

それでは大變だと思ふ心から、内々俊夫にも自分の立場と、心持を打明けて、「和子様やお母様の手前もございますから、これからは成るべく、お母様や和子様のお出でになる前では、貴方も私には、親切な様に聞える言葉を、おかけにならないで下さいませ。それと又私も、お母様や和子様がお見えになる前では、貴方に對して、餘り親し過ぎる様な言葉や態度は、成るべく慎み度いと思ひますから、若しこれから水臭い態度だと思ひになる様な事がありましたら、私の心からではないといふ事をよく御承知遊しておいて下さいませ。

そして悪くお思ひにならないで下さいませ、私それだけお願いしておきますわ。」

「よし、わかつてる。お前がその位にお母さんや、和子の心持を思ひやつて、注意して呉れる事は、僕も喜んで感謝すべき事だから、僕もこれからは、成るだけ氣をつけるよ。

だがしかし、和子のヒステリーが、大分強くなつた様だから、毎日何でもない事を

お前にも言つて困るだらうと、僕も察してはゐるが、今の所どうしやうもない事だし  
その中には何とかなるだらう。

お母さんも今では、和子可愛さのために心が迷つてゐるから、多少はお前にも厭な  
事を言はれるかも知れないと思ふけど、根が馬鹿じやないんだから、腹の中ではよく  
考へて居られるから、和子の事がきまりがついて、少し迷ひ心が醒めれば、又別人の  
様に優しい、親切なお母さんに、なられるに決つてゐるから、當分の間は随分辛から  
うが、同じ因果な病氣を受けて、一緒に悩むつもりで辛抱して呉れよ。

月夜も十五日、闇夜も十五日だ、ねえ御前。

又直きに明るい楽しい家庭に歸る事が出来るから……。  
と親切に言はれると、好枝は思はず嬉しさの餘りに、袖で涙を拭ふのでした。

それから二人は、出来る限り注意して、茂子や和子の感情を害はない様に致しまし  
たけれども、そんな事位で二人の心は融ける筈も、和ぐ筈もなく、益々暗黒陰険にな  
るばかりでございました。

毎日々々好枝を、仇敵の様にして叱言を言つて、虐げ通しますが、好枝はそれを境

遇から来る、強烈なヒステリーの爲とばかり思ひますので、深くその心持境遇に同情  
して、どんなに言はれても、一切その心にも言葉にも逆はずに、にこ／＼し乍ら真心  
の限りを盡して、和子の氣の向く様に務めようと思はれますが、和子の言葉は一事々々に  
變つて、良い事でも悪い事でも、好枝の言ふ事成す事は、必ず反對に取つて罵らなけ  
れば、蟲が治らないといふ風でございます。好枝はもうどうする事も出来ません。  
それを茂子が工合よく取り做せばいゝのですが、和子がそれ程の我儘を言ひ、無理  
な事を言つても、一度も悪い顔もせず、にこ／＼と立働いてゐる好枝の姿を見ると、  
それをよい方には解釋しないで、却つて好枝が和子の内心を蔑み、侮辱してゐながら  
自分達に對して義理のために、わざと辛抱してゐるのに違ひない。  
それも當前の人間なら、餘りに無理を言へば、三度に一度位は、言葉には出さない  
までも、顔に位は表しさうなものなのに、涙一滴こぼさないで、にこ／＼してゐる所  
を見ると、無神経な愚か者か、それでなければ、性根からの強情で、和子の言ふ事位  
は、木の葉が風に舞ふ程にも、思はないからで、心の中ではせゝら笑つてゐるからに  
違ひない。ごちらにしても従順な心の持主でない。

こんな女を嫁にしておけば、何れは末にどんな酷い目に會ふかも分らない。  
それよりも今の中に、何か難癖をつけて、離縁して終つて、宮子さんを俊夫の嫁に  
貰ふと言へば、先方の親達の心持も和いで、それでは子まである仲だから、和子をも  
ごすといふに定つてゐる。

さう言ふ風にさえずれば、和子も救はれて仕合せになるのだ。

何でもない事に世間の手前、義理人情など考へて、天にも地にも掛け換えのない和  
子を不幸にして泣かせておけるものか。

好枝は離縁したとて交際の廣い叔母さんもあり、在所といふのもあるのだから、何  
とかならない事はないだらう。それにまだ子供もない事だから、始末がつけよいし、  
離縁するならば今が一番よい時である。

子供が出来る、又事が面倒になる。

和子と一緒になつて、はしたなく虐めて見た所で、あんな調子ではこちらの仕打に  
驚いて、自分から逃げ出して行く様な事は、好枝としては絶対にない。

これは考へなければならぬ事だ……考へるなら今だ……。

と茂子は一人で思案すると、或る夜昭博に次の様に話かけて見ました。

「貴方、好枝を一生俊夫の嫁として、うちに置くおつもりですか。」

「お前何を言ふのだ、置くも置かぬもないじやないか。」

あゝして夫婦仲もよく、圓滿にやつてゐるし、俊夫も満足してゐるし、好枝もある  
氣で毎日よく働いてゐるし、そんな事言ふ必要はないじやないか。

今頃何を言ひ出すんだ、お前は……。」

「それだから貴方は分らないんですよ、私はあの子が来てからこちらへ、どの位の智  
慧があつて、どんな働きをする子かと、毎日氣を付けてよく見てゐます。

貴方、あれは決して人間が本當の者ではありません。

少し人並より抜けた所があるのか、さうでなければ、怖ろしい強情で、とても私達  
や俊夫の手で、始末のつく様な女ではありませんよ。」

「どうしてそんな事を言ふのだ。」

「どうしてつて貴方、大概想像がつくでせう。」

あの子が来る早々、和子が歸つて来て、毎日あんな風で何とか彼とか、外で聞いて

ゐても氣に障る程、口汚く好枝に小言を言ひ通すんです。

大概の女なら、一から十まで小言を言はれれば、むつとして三度に一度位は口答へもするし、顔へだつて出すにきまつてゐます。それが好枝にはちつともないんです。馬鹿と言はれても、白痴と言はれても、どんなに言はれても、にこ／＼して笑つてゐるんです。

あゝ言ふ所を見ると、ものゝよい悪いといふ事など、判断がつかないで、腹が立たないで笑つてゐるのか、又分り切つてゐても、和子の様な者は、このうちの猫の尻尾位に思つて、頭から馬鹿にしてゐるかの二つの中です。

好枝が馬鹿でないのなら、和子の言ふ事位數の雀が鳴く位か、又は風が吹く位に思つて、ちつとも心にかけてゐないから、あんなに平氣で笑つてゐられるのです。

和子にだけではありません。私にだつてその通りです、無理な事を言つてやつたら何とか言ふだらうと思つて、何度言つてやつても、ちつとも怒つた様な顔もしやしませんし、何一つ口答へもしないのです。

矢張り私達もその通りに、馬鹿にしてゐるのかと思ふと、私はあの子の性分がおそ

ろしくなつて、あんな氣の知れない女に、年寄つてから面倒を見て貰ふといふ様な事は、どうして出来ません。

ですから私は、今の内に離縁して終ひ度いと思ひますのですが……。」

「馬鹿な事を言ふものじやない、お前は何と言ふ愚かしい事を考へてゐて呉れるんだ。當り前の女では出来ない辛抱をして、どんな無理を言はれても、笑つてすましてゐる所が、人に優れて好枝の偉いところだ。さういふ事は普通の者では出来ない事なのだ。さう言ふのを佛心と言つて、心に大きな慈悲心のある者は、何事も慈眼で見ると、に、どんな事をされても、その者を憎んだり怨んだり、する氣にはなれないから、一方が悪くすればする程、尙更大きな慈悲の心で、それを救はうと思ふから、決してそんな相手になつて怒つたり、恨んだりする様なものではない。

それがあの子にはあるのだ。俺は初めて會つた時に、あの子の眼付を見て、あゝいゝ心の子だわいと思つて、嬉しく思つたんだよ。

俺の目は違つてゐない、今日まであれの行を見てゐても、みんな何も彼も菩提心が働いてゐるから、仕事をした後が、生き／＼としてゐる。

あれと話をしてゐると、暗い心も何時となく、晴れ渡つた様に明るく朗かになる。さうして言ひ知れない喜びを感じて来る。

それはあれの菩提心が、こちらへそのまゝ映るからだ。

あゝ言ふ真心のある嫁を、俊夫につけてさえおけば、一生ごれだけ俊夫が仕合せをするか知れないと思つて、俺は内心喜んでゐるのに、お前の考へ方は全く誤解してゐる、もう一度心を落着けて、あれの行をよく見凝めて見よ。よつく分る筈だ。」

「さういふ貴方こそ買ひ被つてゐらつしやいます。

そんな事を仰有るなら、明日からあの子のする事を、心を落着けて見てゐて御覽なさい、屹度化の皮が剥けて、尻尾を出すに決つてゐますから……。」

「困つたものだね、お前にはあれの心が分らぬのかいなあ。」

「貴方みたいな、氣狂ひの様な人は、そんなに見える様に化しよいんですよ。」

「何が俺が氣狂ひだ。」

「氣狂ひの様なものではありませんか。

天にも地にもかけがえのない、一人娘の和子を憎んで、毎日寄ると觸ると小言ばかり

り言つて、赤の他人の嫁ばかりをやい／＼言つて、来る人毎にうちの嫁が好枝がと言つて、自慢ばかりしてゐる様な氣狂ひじみた舅が何處の世界にあるもんですか。」

「それではそれが悪ければ、ごうしよと言ふんだ。」

「親なら親らしく、少しは和子の事も考へてやつたらごうです。

嫁の様なもの、貫ひ度いと思へばごんないのだから、山程も呉れるのがあるのに、子供はかけがえのないものですよ。和子だつてあんなにして、放つておいたら、終ひには氣狂ひにでもなつて死んで終ふかも分りません。

今のうちならごうでもなるんですのに……。」

「それではごうすればいゝんだ。」

「和子の離縁された原因は、黒瀬の娘の宮子さんを、俊夫の嫁に貫はなかつたゝめに親達が腹を立て、こちらへ當てつけに罪もない和子を離縁してよこしたんですから好枝を實家へ歸して、宮子さんをうちの嫁に貫へば、和子も元の鞘に納まる事が出来て、親も子も仕合せが出来て、双方が圓滿に行くにはありませんか。

三界にかけがえのない程の女なら、惜しいかも知れませんが、私はあんな性根の分

らない、毒を含んだ様な女は、何れにしたとて遅かれ早かれ、離縁をしなければなら  
ない人だから、それ位なら今の中に、早く離縁をしておいて、宮子さんを貰つて、和  
子に向ふへ復縁して貰つた方が、双方が本當に仕合せです。

貴方も眞劍で、よく考へて見て下さい。」

「お前は何といふ愚かな事を言つたり、考へたりしてゐるんだ。

女といふものは、どうしてそんなに智恵が浅いのだらう。

假令好枝を離縁したとて、その後へ黒瀬の娘も來はしないが、又親達が寄越す筈が  
ない。まして和子を今更復縁する位なら、あんな理不盡な事をして、世間の物笑ひの  
種にまでなつて、和子を返す筈がないではないか。

向ふにはよく／＼和子に氣に入らない點があつて、した事に違ひないと思ふ。

だから今になつてから、絶對にもど通り納める筈はない。

又萬一そんな事はないけれども、お前の思ふ様になつたとしても、和子がそんな理  
由で向ふへ行つたとて、末長く幸福には暮されぬ。

又こちらとしても、黒瀬家の娘では納まる筈がないよ。

第一俺は人柄も嫌ひだが、昔から人の嫌ふ丙午ではないか。そんな者をうちの嫁と  
して入れて、若し俊夫の身にどうかといふ事が出來たら、それこそ取り返しがつかな  
い。それよりも俊夫が干支より何より、あの娘の人柄が氣に入らぬから、絶對に厭だ  
と言つてゐるじやないか。

さうして今あれの氣に入つた嫁を貰つて、圓満に暮してゐるのに、それを離縁して  
黒瀬の娘を貰ふと言ひ出して見たとて、俊夫が承知する筈もなし、幸夫だつて反對す  
るに決つてゐる。それこそうちの中は、蜂の巢を叩いた様になつて、治りがつかない  
ではないか。そんな無法な事を考へるより、成るだけ和子に物の道理と因果を説いて  
聞かせて、心を鎮めさせて、黒瀬の事も愛子の事も、早く思ひ切らせて、適當な所が  
あつたら、嫁にやむ様に考へてやるのが、親の慈悲ではないか。

お前も親なら、それ位の事はよく考へて、適當に處置してやらねばいかぬ。

決してさういふ、間違つた事を考へて、和子に教へる様な事をしてはならんぞ。」

「貴方の様な人には、何を話したつて、好枝に迷ひ切つてゐらつしやるから、分りや  
しないんです。もうこれからは、何も言ひません。」

その代り和子がどんなに不幸になつても、それがために死ぬ様な事があつても、私は少しもかまひませんから……。私一人の子じやないんですからね。」

「勝手にせい、幾ら言つて聞かせても、分らぬ奴だ。」

と言つて、何とも後は言ひませんので、茂子は獨り考へ悶え悩みました。

父親に相談する事に絶望を感じた茂子は、又或る時秘かに俊夫を自分の部室へ呼んで、好枝の行を全部並べて、これを極度に非難して、將來見込みがないから、子供も出來てゐない今の中に、迷ひ心を醒して、思ひ切つて離縁して、肉身のたつた一人娘の和子を救ふために、好枝より幾倍も智慧も人格も勝つてゐる宮子を、嫁に迎へて呉れど、泣き乍ら言葉の限りを盡して、勧めましたけれども、俊夫は唯呆れ果て、

「お母さん、それは貴女の大きな心の迷ひです。そんな事の出來るものではありませんし、又好枝がそんな女でない事は、僕は信じて居ります。」

お母様も真心の眼を持つて、よく見直して下されば、好枝の心持がよく分つて頂けると思ひます。

假令又そんな事をしたとて、その後へ黒瀬の娘が來れるものでもなし、向ふが寄越

す様な事もありませんし、又和子を復縁するなんて、夢にもする筈がありません。

萬一そんな事があつたとて、それがために、兩方の家庭が圓滿に行くなんて事は、考へても見られません。第一お父さんが、そんな事承知なさる筈がないと思ひます。

僕も亦、あの娘の陰氣な、はきくしな性格が嫌ひですから、あんな娘と一日一緒にゐたゞけでも、氣がつまつて病氣になりさうな氣がします。

本當に性格が、全然合はないんですから、それを一生苦樂を共にしなくてはならぬ家内に持てとお勧めになるのは、お母さんも少し無理ではありませんか。

和子は今は不幸でも、又屹度幸福が出來るに決つてゐます。

好枝も又今は新しい家庭へ入つたんですから、お母さんの思ふ通りには、何一つ出來ないで齒痒いでせうが、お母さんは好枝を貰はない前も、時々仰有つた様に、眞實の自分の娘の様に思つて、真心から懇ろに家風を教へ、導いてやつて下されば、あれも覺えるつもりで、一生懸命になつてゐるんですから、その中にはお母さんのお氣に入る様に、仕事も出來る様になるでせう。

ですからお母さんも、何事も因果だと思つて、世話をしてやつて下さいませ。



僕からもよろしく願ひします。假令何處から嫁を貰つても、初めての家庭へ來ますれば、皆同じ様なものだと思ひますから……。」

と言つて、どうしても離縁するとは言ひませんので、茂子は愈々腸が煮え返る程の口惜しさで、腹立たしさを感じて、此の上は好枝に一層辛く當つて、好枝が居堪らなくなつて、逃げ出す様に仕向けるより、外に方法はないと感じましたので、今迄より一層叱言を厳しく言つて、折々は好枝を悪魔だと罵り、

「外面女菩薩内心女夜叉といふのは、好枝の様な女の事を言ふのだ。」

と嘲つたり罵つたりして、果は好枝の實家を罵り、叔母の道枝の事まで引つ張り出して、さんく悪口を言ひますので、好枝も餘りの事に辛抱が出来なくなつて、時々便所や自分の部屋に逃げ込んで、ハンカチを口に押し當て、聲を立てない様に泣いた事も、何度あつたか知れません。

かうして日々針の簾の上に座り、蕨の着物に包まれた様な、怖ろしい惱みの中に、夏も行き秋も過ぎて、師走半ばの頃になると、好枝の體は何時とはなしに瘦せ衰えて結婚前の頃の、下ぶくれの肉づきの好かつた顔も、頬の艶もなくなり肉はこけて、見

る影もない程、哀れな姿になつて終ひました。けれども唯の一度も、後夫にはその苦痛も惱みも訴へず、努めて心の平和を粧つて心配させまいと努力しました。

その心遣ひや態度が、實に涙ぐましいまでにいちらしいので、一層父も俊夫も、好枝に深く同情し、又その心根を愛して、何呉となく勞りますために、一層茂子や和子の感情を害して、夫婦親子嫁姑といふ立場から、心の中の争ひばかりでなく、折々は好枝を中心として、言葉でも激しく争ひを起して、うち中が泣き合ひ罵り合ふといふ様な事もありました。或る日好枝に對して、餘り叱言が多過ぎると言つて、病床に臥してゐた昭博が注意した事から、茂子が腹を立て、

「それ程好枝が大事で、私が一寸注意しても悪いといふ位なら、私はこの家にゐても用のない邪魔者で、和子も同じ様に邪魔にしてゐらつしやるんですから、二人共一緒に出て行きます。貴方達は三人で、仲よく今後やつて下さい。」

夫の病床近くに行つて、泣き叫び乍ら罵り、荷造りして和子と共に出て行くと、半ば氣狂ひの様に騒ぎ立てました。

そこへ折よく俊夫が歸つて來て、

「お母さん、何といふ淺間しい事を仰有るのです、もとの様な優しいお母さんになつて頂けないのですか。」

と言つて、母親の首に兩手をかけ、胸に顔を埋めて、おい／＼と男泣きに泣き出して終ひました。好枝も和子の膝に縋りついて、涙び泣き乍ら、

「和子様 私が行き届かない所は、ごんなにして／＼も直しますし、又都合によつては私が、實家へ歸らせて／＼も頂きますから、どうぞお氣を鎮めて下さいませ。」

お母様にもどうぞお願ひして、出て行くなぞ仰有つて頂きませぬ様に、貴女からお止めして下さいませ。」

と言ひ乍ら、幾度も頼むと、今度はよろける様に、父の病床の近くに跪いて、

「お父様、お願ひでございます。どうぞ私にお暇を下さいませ、私がお暇を頂きますのが、當然の道でございます……。」

俊夫に向つても、

「貴方、どうぞこれまでの御因縁と思召して、私を實家へ歸らせて下さいませ。どうぞ、それが何よりのお願ひでございます。」

と言つて、二人に泣き乍ら頼み入るのでした。昭博はむつくりと起き上つて、

「お前はそんな事を言つてはいけない、お前に暇をやる事は出来ないのだ。」

と、はら／＼と落涙し乍ら言ひました。

五人は互に違つた立場から、涙のあるだけ泣續けましたが、聽て好枝は顔を上げて

「お父様、御心配を掛けてすみません。

つい我儘な心から、失禮な事をお願、申しまして、御病氣に觸るといけませんからどうぞお寝み遊して下さいませ。」

と言ひ乍ら寝かしつけて、蒲團をかける時、

「お母様、和子様 私何事も仰有る通りに致しますから、今迄の事はどうぞお許し下さいまし、これから後もどうぞ御面倒を見て下さいませ。」

と丁寧な幾度も和子と母親に、あやまつておいて、お勝手に行つて顔を洗つて、部屋へ歸つて見ますと、俊夫がだまつたま、じつと座つて居ります。

それを見ると好枝は、又涙がこみ上げて来て、

「貴方、私が行届きませんために、皆様にこんなに御心配かけまして、本當にすみ

ません。」

と只管に詫びました。俊夫は思はず好枝の両手を取つて、自分の膝許に引き寄せて、  
「好枝！ 堪忍してお呉れ、決してお前が悪いのではない。」

これは皆悪い運命の悪戯だよ、今このうちへはお前でなく、天女が天降つたにして、  
も、この運命から脱れる事は出来ない。

お前は先刻、僕にもお父さんにも、暇を呉れと言つたね。」

「でも私としては、さうして頂くより外に、道がございませぬもの。」

「それはお前がさう思ふのも、無理ではない、普通の女なら、疾くの昔に逃げ出して  
ゐるのに、お前であればこそ出来ない辛抱を、今日まで命懸けで忍び抜いて呉れたの  
だ。それはお父さんにだつて僕にだつて、よく分つてゐる。」

知つてゐるからこそお前が可愛想だと思つて、毎日感謝し同情して、心で泣いてゐ  
たんだよ。しかしお前が今、このうちを去りさえすれば、後は平和に治ると思つたら  
それは間違つてゐる。

母は今和子可愛さのために、心が闇路に入つて終つてゐるんだ、そして唯々和子が

あんなに離縁されて来たのは、黒瀬の娘を僕が貰はなかつたからだとかばかり思ひつめ  
て、あれさえ嫁にしてゐたら、和子も離縁されて歸りはしなかつたのだとかばかり思つ  
て、お前がこの家を離縁して歸つたら、その後へ黒瀬の宮子を貰つて、和子に向ふへ  
復縁させようと思つてゐる。

それが譯なく、簡単に出来るものと思つてゐるらしいんだ。

それがためにお父さんや僕に、そんな事を相談されたけれども、大きな考へ違ひだ  
と言つて、相手にならないものだから、女心の浅間しさ、お前に無理を言つたら、實  
家へ歸るだらう位に思つて、自分で無理だと承知しながら、叱言をきつと言はれるん  
だ。だけご母だつて、本心には正しい眞心を、人一倍持つてゐるんだから、子に引か  
される迷ひ心と、正義を尊ぶ良心とが戦つて、毎日苦しみ悩んでゐる事が、よく分つ  
てゐる。

お前も近頃は、見違へる程瘦せたけれど、母も昔の佛はない程に、痩せて終つた  
事を見れば、その心持は浅間しいと思つても、憎む氣にはなれない、ねえさうだらう。」

「え、本當にさうでございますわ。」

でもお母様が、そんな事のために御心配遊ばすならば、私を早く實家へ歸して下さ  
いまして、黒瀬様のお嬢様を、貴方お貰ひになつて下さつたら如何でせうか。

さうなりましたらお母様も御納得遊ばしますし、和子様も御満足なさいますし、又  
私も救はれます譯でございませうから、八方圓滿に治る譯ではございませうか。

お父様にしても貴方にしても、多少お氣に入らない所があつても、只今の様に家の  
中が、嵐の吹き荒む様に、波風が立つ、お互が悩み暮して苦しんでゐるより、これ  
だけ仕合せか分りませぬ。

私は假令お暇を頂いて、實家へ歸りましても、決してお母様や和子様を怨んだり、  
貴方の事を忘れたりなご致しません。宮子様と御結婚はなさらないにしても、私が  
ゐなくさえなりますれば、屹度明るい生活を遊ばす事が出来ると信じますから、ごう  
ぞお願いですから、私に今日限りお暇を下さいませ。

「それは出来ないよ、そんな事が出来る位なら、お互にこんな苦勞はしやしない。  
お前が假令この家を去つて、行つて終つたにした所が、後でお母さんがごんなに眞  
劍になつて、黒瀬の宮子を僕に貰ふ様に勧めても、僕はそんな事決して聞き入れ

やしないよ。又僕ばかりでなくお父さんも、絶対に賛成なさらないに決つてゐる。

僕はこの宮子といふ女は、假令死んでも厭なんだから……その結果は外から貰ふ事  
になるだらうが、さうすれば矢張りその妻も、お前と同様に苦しまなければならぬ。

それをよく考へて、人の分まで苦しみを、自分の身に引受ける心で、今暫く辛抱し  
てお呉れ。お父さんも色々考へて、心配して下さるから、屹度お前の身の立つ様に計  
らつて下さるに違ひない。

幾らお前が今この家を去らうとしても、因縁であれば去る譯には行かない。  
お互に夫婦となり親子となるのも、先の世から神佛様の定めて下さつた、因縁だか  
ら、この世に来て備つた因縁なら、水火の中も通らなければならぬ。

それもお前だけ、一人を苦しめはしない、僕も一緒に苦しむから、もう暫くの間辛  
くども、こらへて辛抱してお呉れ。

なだめすかされて、今は何一口言ふ言葉もなく、好枝は遂に俊夫に説き伏せられて  
その夜は機嫌を直して、何時もの様に床に入りましたが、目は益々牙え切つて、熱い  
涙だけが限りなく、はら／＼と流れ落ちて、枕や敷布を濡らしました。

晝の疲れのためか、安らかに規律正しい躰を立て、よく寝入つてゐる夫の寝顔を  
見て、好枝は静かに起き上ると、寝間着を音のしない様に脱ぎ捨て、枕許の衣桁に  
かけてある着物と着替え、襟巻とコートを音のしない様に、窓から表の庭に投げ落し  
ておいて、静かに窓から二階の庇に忍び出て、そこに生えてゐる松の木を傳はつて、  
庭に下りてコートを着、襟巻を巻いて、フェルト草履を手にとって、植込みの中を通  
つて生垣の隙間を表へ忍び出ると、夢中で走り出しました。  
それから三十分もたない中に、俊夫が何かの夢に脅かされて、ふと目を開けて見  
ると、そばに寝てゐた筈の好枝の姿が見當りません。

時計は夜中の一時を指してゐます。邊りを見廻してよく見れば、寝間着はきちんと  
疊んであつて、衣桁にかつてゐた着物がなく、窓の開いてゐるのに気がつきました。  
俊夫は氣も轉倒せんばかりに驚いて、夢中で飛び起きて、寝間着の上にインパネ  
スを引つ掛けて、両親達に氣づかれない様、好枝の後を息せき切つて追ひかけました。

## 片割れ月

大地はかん／＼に固く凍りついて、冷たい風は雪を交へてさつ／＼と吹いて來ます。  
半分以上も缺けた片われ月が、影淋しく中天に冴えてゐます。

俊夫はインパネスの襟を立て、風を防ぎ乍ら夢中で走つて來て、宮崎夫婦の寝間の  
裏口にあたる、雨戸のそばに身を寄せて、中の話聲をじつと、息をこらして聞いて居  
ります。座敷の中では涙ながらに、好枝の話を始めから終りまで、ぢつと聞いてゐた  
春光と道枝は、好枝の言葉が終ると、言ひ合せた様にはつと息をついて、

「今までお前はそんな辛い思ひをして、暮して來たのか。」

こちらへ來た時などの様子を聞いても、そんな事は一口も言はないし、手紙でも何  
も言つて寄越さないから、可愛がつて貰つて、幸福に暮してゐると思つて、喜んでゐ  
たのに……。在所の方でもお前達のお蔭で、いゝ所へ縁付けて貰つて、好枝は仕合せ  
をしたと言つて、つい昨日も喜んで手紙が來たのに、今の様な話を聞いたら、ごんな  
にお母さんやお父さんが吃驚するだらう。

そんな事になつてゐるなら、ごうして私 だけでも内緒に話して呉れなかつたの？  
本當に可愛さうにそんな苦勞をして。」

「でもそんな事を申し上げると、叔母さんが又色々御心配して下さつて、叔父さんにもお話しになつたり、又在所へも知れたりすると、お父さんやお母さんや、おぢいさんやおばあさんまでが、御心配なさるし……ですから私縁があつて置いてさえ頂けば、どんなに悲しくても辛抱して、置いて頂かうと思つてゐましたから、何一つも申上げなかつたのでございます。それにお嫁に行く前の夜にも、叔母さんから色々御注意も受けて居りますから、私が軽卒な事をして、山田家に迷惑な事を出来たり、叔父さんや叔母さんの名を疵つける様な事をしては、申譯ないと思ひまして、忍べるだけ忍んで参りましたのです。

「けれども私がこの上辛抱してゐますと、家の中の治りがつかなかつて、みんなが不幸になりますから、止むを得ずに私歸らせて頂く様に、お願いに参つたのです。叔父さんも叔母さんも、色々に難しく仰有つて頂くと、却つてごちらにも感情を害して終ひますから、唯々私一人の我儘からだと言つて、お話を付けて下さいませ。お願い致します。」

「だつてお前、叔母さんが色々注意したのは、普通の時の事だけを考へたので、お前

の場合は唯單に嫁姑の感情問題だけではなく、譯の分らない問題が家庭の中に介在して、そんな事になつてゐるのでは、幾らお前が眞剣になつて辛抱したとて、貫けるものではない。一日も早くそれを私達に、打明けて呉れ、ばいゝのに……。」

さうすればそんなに苦勞しない中に、話をつけたんだのにねえ……。」

「でも叔母さん、お母様が私を、あのうちに置いて下さらないお考へだと言ふ事は、今日まで氣がつかないで、毎日お叱りを受けるのは、私が至らないためだと思つてゐたのです。」

それが今日俊夫さんから、ほんどうの事情を聞かされて、私吃驚して終ひましたの、寝む様にと言つて、勧められるまゝに床へは入りましたけれども、考へて見れば見るほど、一時でもこの家にゐてはならない自分だと思ふと、ちつとしてゐられなかつたので、二度とあの家には歸らないつもりで、俊夫さんにもうちの人達にも氣づかれない様に、二階の窓を抜け出して、庭木を傳つて下りて、生垣の間をもぐつて出て來ましたの。」

春光は憐れむ様に、好枝を見凝めて、

「好枝！ 大變な所へお前をやつて、可愛さうな目に遭はせて悪かつたなあ、そんな事を知つてゐる代なら、決してやるんではなかつたのに……。」

あちらへお前が行けば、俊夫さんは立派な人だし、親御達も揃つて人格者だし、資産も相當あつて裕福だし、どんな事があつても一生衣食住に不自由をしたり、子供の教育に差支へる様な事はなからうと、いゝ方面ばかり考へて世話したのが悪かつた。矢張りこんなになるのも因縁だから仕方がないが。

お前もさうして、決心して来たものなら、行けと言つても行く氣にもなれまいし、又そんな事を聞いては、お前が行くと言つても、遣る事も出来ない。

だから明日にも在所へ手紙を出して、兄様に來て頂くか、私か道枝かゞ相談に行つて來るかして、きつぱりと片をつけて終ふから、心配をしないでゐて呉れ。

そして嫁入りをしなかつた、昔の心に歸つて、幸福な氣持ちで、當分此處で暮すが良い。又その中にきつと、今を昔の夢と思ふ程、仕合せになる時も來るから……。ねえ道枝、さうじやないか。」

「え、さやうでございませうとも、そんな事情なら、あれこれと言ふだけ無駄でござ

いますから、先方が呆氣なく思ふほど、さつぱりと片付けて終つた方が、好枝の後のためにもよろしうございますから……。好枝お前もその方がいゝだらう。」

「けれどもお父さんは兎に角として、俊夫さんが二つ返事で離縁を、承諾して下さるか知ら？ 叔母さん、その事で私お願ひがありますの。」

「ごういふ事なの？ その事つて？」

「あの私がお暇を頂く事になれば、お母さんと和子さんは一時は吃度喜びなさに決つて居ります。けれどもお父様と俊夫さんは、どんな事があつても、離縁して下さらないといふ事が、私にはよく分つてゐますの。」

「それじや困るね。」

「それでございますから、今も道々一人で考へて參りました。私が當り前の姿で居れば、何處にゐたどて吃度探し出して連れて歸ると仰有るに決つてゐます、それで……。二人はこの言葉にぎよつとして、

「それで……。」

「それでお前は、歸れない姿つて……死に度いごでも言ふのか……。」

好枝は淋しく笑つて

「違ひますわ、私が若しそんな事をすると、叔父さんや叔母さんにも、大變御迷惑をかけるし、お父さんへもお母さんへも不孝になつて、世間に恥を曝しますから私はどんなに悲しくても苦しくても、死んだりなんかは致しませんわ。」

「そんならい、けれど、お前が突然變な事を言ふから、吃驚したんだよ。」

「すみませんでした。私そんな事ではなく、生きてゐても、山田家へ連れて歸られない様な、姿になり度いといふのですわ。」

「それではどうすると言ふんだ。」

「叔母さん、叱らないで下さいね。」

「私今夜の中に髪を下して、尼さんにして頂き度いんですの。」

「何です？ 尼さんに……。」

「馬鹿な事を言つてはいかん、どうしてそんな事が出来るものか。」

叔父と叔母に、兩方からたしなめられて、好枝は俯向いて、唯ほろ／＼と涙を膝の上へ落して泣いてゐました。暫くすると、

「叔父さん叔母さん、お叱りになるのは御尤もと思ひますけれども、俊夫さんは私を可愛がつてゐて下さいますから、普通でお暇を下さいと言つても、決して暇を出しては下さいません。けれども尼になつた者は、決してつれて行く事は出来ません。」

又私が尼になれば、外へ結婚するだらうといふ様に、誤解される事もあります。

假令私がお暇を頂いた後で、お母さんの思ふ様に行かなくて、宮子さんはお嫁に來ないで、外からお嫁さんが來られなくても、お母さんは發心なすつて、私になさつた様な事は、決してそのお嫁さんには、なさらないだらうと思ひます。

お母さんのお心や、和子さんの心を、煩惱の世界からお救ひする事が出来れば、私一人が尼になつた事が、決して無駄にはなりません。

それに私、離縁して歸りましても、當り前の姿でゐれば、又何處かへ結婚しなければ、世間でも色々申しませうし、在所の方でも色々、心配するに決つてゐます。

私はこの先、どんな事があつても、結婚なんかし度くありません。

そんな事したら、俊夫さんにすみませんから……。

私いつまでも、あの人の暖い真心を、そのまゝ胸にちつと抱き守つて、純真な心で



御佛に供養しつゝ、清らかに人生を送り度いと思ひます。叔父さんも叔母さんも、本當に私を可愛いと思つて下さつたら、このお願ひを許して下さいませ。

叔母さん、後生ですから、私を助けると思つて、今すぐに髪を下して下さいな。」

「そんな馬鹿な事が、して上げられるものですか。」

「好枝……考へ違ひをしてはいかん。」

興奮の餘り、輕はずみな事をしては、取返しのかん事になる。後でそんな事は、

どちらへでも出来る事だから、まあ今夜は安心して、落着いてお寢み。」

「叔父さん、そんなに仰有らないで、本當に私のお願ひ、聞入れて下さいませ。」

さうでなければ、私生きてゐられませんもの……。」

と言つて、夢中で立ち上ると、春光と道枝は驚いて、

「何を言ふのだ、お前は……。」

「何も心配する事はない、話は工合よくつけてやるから、安心して落着いてお出でよ、

心を鎮めなければいけません。」

好枝は夢中で鏡を探して来て、髪を切らうとして焦りますので、二人が泣き乍ら止

めやうとして、好枝の手を押へてゐると、その時突然雨戸を開けて、轉がり込む様に俊夫が入つて来ました。そしていきなり、

「好枝！ 堪えて呉れ。」

と言つて、好枝を力一杯そこへ抱きすくめて、呆氣に取られてゐる、春光や道枝の前

もはゞからず、聲を立て、泣き續けました。暫くたつて、

「好枝！ お前が若しもそんな事でも考へて、ゐるのじやないかと思つたので、心配

して後を追つて来て、話は残らず外で聞いてゐた。」

お前がさういふ風に、思ひつめるのも決して無理ではないが、もう一度考へ直して

今夜はうちへ歸つて呉れ。僕の一生の願ひだ。夜があけると事が面倒だ。

結婚した時から、僕は死ぬのも生きるのも、一緒だとお前に誓つてゐる通り、命懸

けでお前を愛してゐるのだから、幾らお前が僕の家庭を救ふために、進んで離縁しや

うと言つても、僕は離縁なんかしやしない。

そればかりではない。お前が僕のうちへ歸らぬために、髪を下したつて僕は決して

諦めない。

それ程までに僕に對して、操を立て、呉れるお前の心を、寧ろ世間に誇りとして、喜んでつれて歸ります。

叔父さん叔母さん。こんな夜中に好枝が突然お邪魔して、恥づかしい内輪の醜い問題まで、お耳に入れて申譯ありません。

これも僕の不徳の結果ですから、お詫ば幾ら申上げてでも盡きません。

今好枝の申上げた事は、残念乍ら醜い事實でございますが、それはほんの一次的の母の迷ひから起つた事で、決して本心ではございませんから、時が來れば決す解決が出来る事ですから、私を信じて好枝を返して下さい。

好枝？ 頼むから今夜だけは、何も言はずに歸つてお呉れ。ねえ歸つてお呉れ。」

それまで呆氣に取られてゐた二人は、始めて落付いて炬燵の前に座ると春光は、

「まあ兎に角、こちらへお入り下さい。貴方のお心持は、よく分つてゐるのですが、段々好枝からお宅の内情を聞いて見ると色々混み入つてゐる様でございますから、後は又何か話をつけるにしても、一時は綺麗に好枝をお返し下さるのが、貴方のためにも又おうちのためにも、一番よい様に思ひますが……。」

道枝も口を添へて

「今貴方が無理に、好枝をつれて行つて下さつた所が、好枝がゐる氣でゐなくて、又おうちでおいて頂くおつもりのないものなら、何もありませんのですから……。」

御尤もです。

しかし實は父も、この間中から色々心配致しまして、當分私達二人は、和子の身の處置がつくまで、別居してゐた方がよからうと、内々で種々手配りして呉れましたので、熱田の僕の會社の社宅へ入れて頂く事になりましたが、今年中は都合が悪いので正月の七日頃に行く事に、僕と父とで大體話がきまつてゐるのです。

好枝は吃驚して、

「まあ、そんな事、何時お決めにになりましたの？」

「お前にはまだ話してなかつたが、お父さんが二三日前に話をつけて下さつて、すっかり手續きもすんでゐるんだよ。それまではお前にも母にも和子にも、知らさないでおいて、突然につれて分家させようと言ふのがお父さんの考へなんだ。

だからそれまでさえ、お前が辛抱して呉れれば、よいと思つてゐたんだよ。

今日は十八日だから、もう二十日間の辛抱だ。今迄の事を思つたら、もう二十日位辛抱して呉れるだらう。

さうすれば一生の幸福が得られるんだし、又お前がさうして辛抱して呉れるのが、家庭も救ひ、母も妹も救つて呉れる事になるんだから、ごうか辛抱してお呉れ。

僕は決してお前を、偽つて言ふのではない。その事はどんな誓ひでも出来るんだから、僕の言葉を信じて、叔父さんも叔母さんも七日までこのまゝ好枝を貸して下さい。それから後は好枝に、そんな苦しみは決してさせませんから、今が大事な〜時な事ですから、今夜の事は全然知らない事にして、好枝を歸らせて下さい。

僕本當にお願ひですから。」

と一生懸命に頼み入るので、春光は暫く考へて、

「私達としては、ごう言つてよいか口の出し様もないが、兎に角貴方の妻として、貰つて頂いた好枝で、ごう言つてよいか口の出し様もないが、兎に角貴方の妻として、貰言ふ事は、りりません。熱田へ行く行かないといふ事も、この場合私達の口の出せない事ですから、聞かない事にさせて頂きませう、なあ道枝。」

「ごうでございませう。」

好枝が今晚無断でこゝへ來たり、貴方が又來て下さつて、そんなお話をなさつた事がお母様に聞いたら、どんな風に疑はれても仕方がありませんから、私達は何も伺はなかつた事にして、貴方のお宅の事は、貴方方のお考へ通りに、して頂けばよいと思ひますから、好枝が貴方と御一緒に、歸るといふつもりになれば私達は、返さないなごうは申しませせん。

好枝！ お前はお父さんや俊夫さんのお心持もよく分つてゐるのだから、よく胸に手を置いて考へて見て、歸つて行つた方がよいと思つたら、ついて行きなさい。

それとも又このまゝこちらにゐて、きまりがつけ度いと思つたら、その様に御相談して上げるけど……。」

「好枝……あんなに叔父さんも叔母さんも、言つてゐらつしやるのだから、お前の決心一つなんだから、今言ふ通りの事情だから、夜が明けてから歸つたんでは、うちの者の目につくから、又事が難しくなると困ると思ふ。

だからこのまゝ急いで歸つて、何事もなかつた様な振をして、機嫌よく年越だけし

やうじやないか。」

と否應なしにせき立てられて、遂好枝も歸る氣になり、

「それでは私、今夜は歸らせて頂きますわ。叔父さんも叔母さんも、御心配をかけて申譯もありませんでした。御機嫌ようお寢み下さい。」

「それではお前、歸つて行くか。」

「はいあんなに仰有いますから……。」

「それがよい。折角心配して、伴れに来て下さつたんだから……」

何事も因縁だからねえ。

俊夫さん、何も彼も貴方を信賴してゐますから、よろしくお願ひ致します。」

「はい、色々御心配かけてすみません。好枝を伴れて歸りましても、決して間違ひはし出来しませんから、御安心なすつて下さい。」

何れ又お正月に改めて、お伺ひ致しますが、舊年中は失禮するかも分りませんから随分御機嫌よろしう。」

「はあ、私の方も失禮致しますかも分りませんが、ごうぞよろしく……。」

「では失禮致します、お寢みなさい。」

と俊夫は好枝をつれて、表へ出ると、冷い風が吹いてゐるので、好枝をインバネスの右袖の下に入れて、庇ひながら、足音も軽くコツ／＼と、急ぎ足に歸つて行くのでした。その後姿を見送つて、春光と道枝は、何時までも椽側に立つてゐました。

## 年 頭

「和子！ 和子！」

と聲高く續けざまに呼ばれて、座敷へ入つて来た和子に昭博が、

「おい和子！ 早く茶碗蒸でも造つて持つて来ないか。そしてお母さんに、早く御挨拶に来る様にさう言つてお呉れ、お母さんは何してゐるんだ。」

「お勝手を手傳つてゐて下さいますわ。」

「何だ、大勢女があるじやないか、お母さんが手傳はなくつたつて、茶碗蒸し位出来る筈だ。早く座敷の方へ行つて下さいと言つて呉れ。」

「はい……。」

と和子は大きく返事をしながら、春光や道枝を流し目に見て、足音荒くお勝手の方へ入つて行く後姿を見ると、道枝は言ひ知れない不快な感じがして、一刻も座敷に長居をし度くないと思ひましたが、餘りに昭博と俊夫が真心から引止めてもてなし、家傳來の書畫や刀劍等を持出して、春光や道枝に見せるので、それを呆氣なく斷つて歸るのも、禮儀に缺けると思つて、春光は内心早く歸り度く思ひ乍らも、説明される度毎に、口では賞めて見てゐるのでした。

その心持を察すると、道枝も氣の毒になつて、早く切上げようと言ひ兼ねて、ちつと一緒に座つて拜見して居りました。

さうして心で焦れば焦る程、尙も次から次へと色々な物を運び出して來ますので、道枝は堪らなくなつて、そつと座を外して表庭へ出て、そつと西へ廻つてお勝手元に近い、裏庭の泉水のほとりに來て、池の鯉を見て居りましたが、その心の中では、好枝がお勝手に何をしてゐるのか、一寸でもその様子を見度いと思つて、お勝手の方の様子に耳を傾けてゐますと、そんな所に道枝があるとは、知る筈のない和子は、

「お母さん、お父さんが茶碗蒸を早く拵へて、持つて來いと言つて、喧ましく言つて

ゐるんですよ。そしてお母さんに、すぐ座敷の方へ、出て來る様に言へつて……。」

「あの人は一體何と思つてゐるんだらう。」

好枝の叔父さんや叔母さんが、天にも地にもない家の一番大切な、お客様だとしても思つてゐるのだらうか。」

「そりやさうともお母さん。」

それだからこそ、一番の奥座敷へ案内して、上座へ廻して、うち中の寶物をみんな出して、頼み奉つて見て貰つてゐます。

一體姉さんの叔父さんや叔母さん達には、書畫や骨董品の價值が分るのか知らず？

何でも矢鱈に結構だ〜つてお世辭ばかり言つてゐるわ。

お父さんは又それをいゝ氣になつて、限りもなく出して來て、見せるものだから、座敷つたら足も立たない位、一杯擴げてゐるんですよ。

まあお母さん、一度行つて見ていらつしやい。」

一本當に馬鹿にしてゐるよ、あの人は一體何と思つてゐるんだ？

又好枝の叔父さんや叔母さんといふ人は、ごういふ氣の人だらう。

二人も揃つて年頭に來て……、年頭なら年頭らしく、玄關からでも歸ればいゝに、奥座敷まで上り込んで、何時までもく長居をして……。人に厄介かける事を、何とも思つてやしない。

幾ら禮儀を知らないつても、程があるじやないか。

あれで教育者だなんて顔をしてるんだから、本當に呆れて物が言へないよ。

教育者なら教育者らしく、物の道理や禮儀位、辨えてゐさうなものじやないか。

私なんかお前が黒瀬へ行つてゐる時など、時の御挨拶に行つても、ほんの玄關の入口だけで、お茶を一つ貰つて飲む位の事がやつとで、山々の叱言を言はれては、不東

な子供をお世話になつて、真にすみませんと言つて、頭を幾つ下げさせられたか分り

やしない。黒瀬へ行くと言へば、大概時節のつけ届け物に行くばかりで、お客らしい

顔をして行つた様な事は、一度だつてありやしない。

それに好枝の叔父さんや叔母さんは、好枝の在所の代りを勤めますなんて、氣のき

いた事を言ひ乍ら、中元や歳暮の品物さえ、満足に届ける道も知らないで、正月にな

つたからと言つて、紋付袴で二人も揃つてやつて來るなんて、本當に揃ひも揃つて譯

の分らない、氣狂ひじみた人達ではないか。

そんな人の所へ、眞面目な顔をして、挨拶に行くななんて事が、阿呆らしくて出來る

か、よく考へて見るがいゝ。そんなに茶碗蒸の好きな人達なら、好枝！ お前一生懸

命で拵へて出して上げてたらいゝじやないか。

専門學校を出て、家事の中等教員の免狀を貰つた程のお前だから、ごんな立派なお

料理だつて出來る筈だ。私や和子が我流で作つた様なものより、お前が學理的の腕を

振つて、拵へたものゝ方が、ごんなに叔父さんや叔母さんが喜ぶか分りやしない。

又お父さんや俊夫も、その方が屹度満足するに決つてゐる。さあ、好枝！ 自分で

造つてお上げ。

和子はこんなお勝手になんか、くすぶつてゐないで、お湯へでも入つて、名古屋へ

でも行つて遊んでお出でよ。」

「行つてもいゝの？ お母さん。」

「行つてもいゝとも、お客さんは好枝がもてなせば結構じやないか。お前なんか手を

出すと、又御機嫌をそこねるかも分らないから、手を出さないでお置き。」

— 311 —

好枝！ そんな所にぼんやりしてゐないで、早く茶碗蒸しを作つてお上げと言つたら、本當に強情な人ねえ。」

「でもお母様、もうすぐ歸りますから、茶碗蒸しなごして出さなくても、結構だと思ひます。」

「そんな事あるものか、お父さんがさつきから、出せ〜つて座敷で、怒鳴つて見えるじやないか。」

お前の叔父さんや叔母さんは、このうちの一番大切なお客様なんだから、命懸けでもてなさなければならぬんだからね、事によつたら、今晚は泊つて行くと言ひ出すかも知れないよ。そのつもりで用意しなくちやならない、それよりも早く、茶碗蒸しをする支度をしなさいよ。」

「ではお母様、種には何を使つたらよろしうございませう。」

「そんな事、私に聞いたつて分るものかね、これでなければならぬと、決つてゐる譯じやないのだから。」

何でもお前の氣に入つたものを使つて、拵へたらいいじやないか。」

さう言つて痾高い聲で半ば叱りつける様に言つたと思ふと、後は何の音もしませんので、道枝は太い棒でも呑み込んだ様な苦しい思ひで、其處を靜かに立上つて、足音を忍ばせて西口の方へ廻らうとして、何心なく後を振向くと、好枝が裏口から顔を出したのと、ばつたりと見合せました。

好枝は下駄を脱いで裸足になつて、飛んで来て道枝に縋りつくど、

「叔母さん、こんな事を言つてすみませんが、叔父さんにお願ひして、すぐに歸つて下さい。後で又お詫びには參りますから……。」

「よし〜分つた〜、心配しなくてもいいよ、今すぐに歸るから……、見付けられてはいけないから、涙を拭いて早くあちらへお出で。」

と言つて、自分の胸から好枝を突離す様にして、お勝手の方へ押しやると、逃げる様にして奥座敷へ歸つて行つて、何喰はぬ顔をして座につきました。

少ししたつてから道枝は、

「貴方 一寸。」

と言つて、春光を椽側までつれて行つて、何事か囁くと、春光はうなづいて

「うん、よし／＼、さうだつた。」

「えらい事を忘れてゐた。それではすぐに失禮して歸らう。」

「ねえ貴方、折角色々見せて頂いて、本當にすみませんが、今日伺はないと又後で義理が悪いと思ひますから、本當に失禮ですが、お暇させて頂きませう。」

と言ひ乍ら座敷へ入ると、春光は

「結構な物を色々と拜見致しかけて、中座致しましては眞に失禮ですが、うつかり忘れて居りましたが、今日伺ふ筈になつて、待つてゐて下さる所がありますので、何でも彼でもこれから伺はねばなりませんから、これで失禮させて頂き度うございます。それに續いて道枝も、

「本當に失禮でございますけれども、お暇させて頂きます。」

「それにしてもまだ今日はお早うございますから、もう少し御ゆつくりして下さいまして、兎に角御飯だけ召上つてお歸り下さい。」

「叔父さん、どうぞさうして下さい、叔母さんどうぞ叔父さんに、御ゆつくりして頂く様に申上げて下さい、もうお勝手に仕度が出来てゐるのですから……。」

「折角して頂きましたのに、頂いて歸らなければ失禮でございますが、十二時までに伺ふと言つて、約束してある所がございますので、失禮させて頂きます。」

と挨拶してから、

「一寸お母様にお目にかゝつて、色々願ひ申して行き度いと存じますが……。」

「俊夫すぐ来る様にと言つて、呼んで来て呉れ。」

「はい、一寸お待ち下さい。」

と俊夫が立つて行く間もなく、茂子は俊夫の後に續いて入つて參りました。

一通りの挨拶がすむと茂子は、かたちを改めて、

「あの色々御都合もおありになる事とは存じますが、でもまあもう暫くお遊びになつて下さいませ。若い者ばかりでは、お勝手に間に合ひませぬものでございますから今迄世話をやいて居りまして、御挨拶にも出ませず、失禮致しました。」

もうすつかり支度が出来まして、私の手も空きましたから、これからゆつくりお話をさせて頂かうと思つてゐた處ですから、もう少し御ゆつくり遊して下さい。」

「はい有りがたうございます。」



本當にもう少しゆつくりさせて頂くと、よろしいのでございますが、是非十二時までに伺はなければならぬ所がございますので、今日はこれで失禮させて頂き度う存じます、又後日改めてお伺ひさせて頂く事に致しまして……。」

「貴方がお急ぎになる所を、お引止めしてこんな事申上げては、眞に失禮ですが、私も近い中に實は一度、貴方の所へお伺ひして、色々御相談致し度いと思つておりましたのですが、今日は幸ひお出で下さいましたから、お正月早々こんな事を申上るのも失禮な事か分りませんが、貴方の本當のお心持を聞かせて頂き度いのでございますが……。」

道枝は如何にも訝しうな顔をして、

「何か私に、お尋ね下さいます事が、おありになるのでございますか。」

「はい、さうでございませぬ、それは外でございませぬ。貴方は好枝を此のうちの嫁として、何時までもお置き下さるつもりですか。」

「はい、それはもうあんな行届きませぬ者でも、お宅様でおいて頂けさえすれば是非末永く御厄介になり度いと、存じて居りますのでございませぬが……。」

「それなら私は改めてお伺ひしなければなりません、貴女はあの子を五年近くも、

手元において御教育をなすつたといふのは、どんな御教育だつたのでせうか。」

道枝は餘りの言ひ方に、はつとして返事が出来なくなりました。

昭博は聞き兼ねて、

「お前はまあ、何といふ失禮な事を言ふんだ。」

「失禮な事じやありません、大事な事を伺つてゐるんです。」

俊夫は言ひ悪くさうに、

「お母さん、今日は他の時と違つて、お年頭に來て下さつたのですから、今日はそんな事言はないで、辛抱して下さい。そんな事は伺ひ度ければ、又何時でも叔母さんに來て頂けばいいし、お母さんがお出かけになつても、いゝではありませんか。」

「さうじやないよ、大事な話がかういふ改つた時に、話をするのが却つていゝのです。私は何も間違つた事を言つて、叔母さんに伺ふ譯じやないんだから。」

「それにしても今日は、お願ひですから止めて下さい。」

「お前は今日はどうしたつて言ふのだ、そんな分らない事を言つて……時日も考へずにそんな事を申上て失禮じやないか。」

「時も日も考へては居られませんが。」

此の家に取つて、重大な事ですから、私は叔父さんや叔母さんに、一度好枝の日頃の行を、よく聞いて頂き度いと思ふのです。」

「左様でございませうか、どうぞ仰有つて下さいませ。」

漸く道枝も心から落着いて、笑顔を以て坐り直すど、

「先づ一通り好枝の日頃の行を、よくお聞き下さい。」

始め川村さんからお話のあつた時は、女學校を始終優等で卒業して、専門學校へ行つてからは家事科を専攻して見えるから、家事の方なら女學校の先生になる免状も、卒業すれば貰へる位だから、家事上の事についての知識は申分はない。

お料理なんかは世界中のお料理が、自由に出来る腕前があるとの事でした。

その他読み書き裁縫、生花、琴等の遊藝も、人並優れて出来る、申分のない娘だと言つて、一生懸命賞めて見えたので、そんなに何も彼もよく出来る人なら、うちの嫁に貰ふのは勿體ないと思つた位でした。

それなのに實際の好枝は、うちへ来てからの様子を見ますと、御飯一つも満足に炊

けるじやなし、お味噌汁さえろくな物は出来やしません。

洗濯物にしても、ろくに垢も落してないし、お掃除だつてはほんのお役目にするだけで、ちつとも行届いて居りません。

お裁縫をさせれば袋の様な物を縫つて、人前に着て出られる様な仕事は出来やしませんし、お茶だつて花だつて、人前で出来る様な事は、何一つもございせん。

それでゐてこちらで親切に教へようと、色々言つて聞かせても、頭から馬鹿にして終つて、鼻の先であしらつてゐて、ちつとも覚えようなんて氣はありません。

何遍言つたつて、糠に釘でちつとも受け答へがないのです。

それでもお父さんや俊夫の機嫌を取る事だけは、人並以上に上手ですから、二人からは明けても暮れても、好枝々々と言つて重寶がられるものですから、此處のうちではお父さんと俊夫の氣にさへ入れば、私や和子の様な者は、どうでもいゝと思つてゐるのでせう。馬鹿にし切つて終つてゐるのです。

けれども私も昔この家に貰はれて来て、死んだお父様やお母様の信用を受けて、面倒を見て来たんですから、この家の主婦であり、愚ながら俊夫の母でございませう。

それに嫁に来て一年もたぬ中から、家一杯になつて、親を蔑にして扱ふといふのは、餘り好枝も蟲がよすぎます。

今では何も彼も世が逆さになつたから、昔と違つて嫁の方が、姑よりも偉くなり、嫁が指圖をして、姑が従はねばならぬ様に、時勢が變つて來たのでせうか。

貴女は立派な教育者ですから、さういふ事はよく研究してゐらつしやるでせう。此の頃の教育は、さういふ風になつたのでせうか。

「お母様の、さういふお言葉に對しましては、私と致しましては、一言の御挨拶も出ない譯でございしますが世の中が開けても、矢張り道徳に變りはございせん。嫁は必ずお母様に従つて、何も彼も教へて頂いて、家風を覚えなければならぬ事は、昔も今も何の變りはないと思ひます。」

「それではうちの好枝は、一體何處であゝいふ教育を、受けたものでございませう。私達は一から十まで、此の先あの通りの行をされましては、とても嫁姑といつて平和に暮て行く事は出来ないと申しますから、貴女のお智慧をお借り致し度いと思ひます。」

「それはどう言ふ意味で仰有つて頂きますのか分りませんが、行き届きませんといふ

事は最初から、萬々お断り申上げました通りでございまして、川村さんがどういふ風に仰有つて下さつたか、それは私存じませんが、兎に角あの子は私と同じ事、根が田舎生れでございまして、教育を受けたと申しましても、それはほんの僅かの間、形式的に、物の理窟を習ひましただけで、實際の事となりますと、全く赤坊同様の智慧しかございません。

そこを本人もよく辨へて、こちらへ伺つても我流を出さずに、一事が萬端お母様の御指導を受けて、よく家風を見習ふ様に、諄いと思ふ程言ひ聞かせて、おきましたつもりでございしますが、矢張り愚かな子供でございしますから、そんな風に少しもお母様の御心に叶ふ様な仕事を、よう致さずにお済ませます。

その點は眞に申譯のない事でございしますから、私からも幾重にもお詫び申上ります。尙此の先お母様が御指導下さいましても、全然見込みがないと思召す様でございしましたら、止むを得ぬ事でございしますから、お暇でも頂く事になるより、外には道のない事と存じます。」

「それが一番よい方法だと、貴女に御氣がついたら、遠慮なく早くお引き上げ下さい

ませ。」

「別にそれがいゝ方法だなどゝは、決して思ひませんのでございますが、ごうしてもお母様のお氣に入つて頂けない様な場合には、それも止むを得ない事だと、申上げたゞけでございます。」

「私だつて、一生懸命教へようと骨を折るのですが、全然覺えようとしないのですから、手のつけようがなくて、困つてゐるのです。」

間に合はぬものと御氣がついたら、引取つて頂くのが一番いゝかも分りません。」

「お母様が、本當にそんなお心で仰有いますのなら、引き取らせて頂いてもよろしうございます。」

「さうですか、それならさういふ話に、成るだけ早くきまりをつけた方が、よろしうございますから、明日明後日といふよりも、今すぐにでも本人をつれて、お歸りになつて下さい。」

「つれて行くと仰有れば、止むを得ませんから、つれて歸りませう。」  
この二人の争ひを聞いてゐた昭博は、顔色を變へ體をふるはせて、

「こらく。何を途方もない事を言ひ出すのだ。控へよ 馬鹿者奴。」

叔母さんも何ですか、少しお口が過ぎはしませんか。

好枝は仲人があつて、親戚や近所の人達も招待して、立派に俊夫の嫁だと披露をして、入籍の手續きまで、立派に濟ませてある、正當な俊夫の妻ではありませんか。

それを世に有りふれた、女ごもの小言を本氣に受けて、現在御主人が前にお出でになるのに、それを差おき在所許の兩親にも一言も斷りなく、仲人をも出し抜いて、伴れて行くの行かんのといふ様な事が、理窟上に於ても徳義上においても、出来るものか出来ぬものか、通るものなら通して御覽なさい。

茂子も自分の我儘を棚に上げて、罪もない好枝の事を、ある事ない事散々悪口を言ひ散らして、その上に年頭に来て頂いた叔母さんに伴れて行けなんて、そんな事がお前の了見一つで、出来るものならやつて見よ。

若しそんな事が假にも世間へ知れたら、世間の人はお前を氣違ひだと言ふだらう。

さうすればお前はこの先、どちらを向いても人間扱ひにはされなくなる。

それにお前は氣がつかぬのか。宮崎さん、さうじやありませんか、女と言ふものは

平常は賢い様な事を言つてゐても、愚かしい所がありますな。

「こう言ふと貴方の奥様にも、悪く言ふ様でゐらい失禮ですが、全くさうではありませんか。あはゝゝゝゝ。」

宮崎も無理に笑つて

「全く仰せの通りで、うちの家内が悪いのでございます。」

「いや さうではありません、わたしの家内は實に分らぬ奴ですから、かういふ失禮な事を言ひ出したのです。何でもない事でございませよ、こんな事は。」

家内はあんなに言ひますが、眞に好枝は心立てが優しく、何も彼も辨えてゐても顔へも口へも出さずに、何時でもはい／＼と言つて、ニコ／＼してゐて呉れますから見ようによれば、家内の言ふ様に強情らしく見えるかも知れませんが、さうじやないまことに堪忍強い、伶俐な優しい奴ですから、眞によい嫁だと言つて、私共は喜んで居ります、何をさせても仕事ができまりよくて、ハキ／＼とやつて呉れますから、一つも叱言なごいふ所はありません。」

「どうぞ致しまして、そんな事仰有つて頂くどころじやございません。」

道枝、お母様だつて決して、好枝を心から離縁なさらうといふ様なお考へではなく、そんなのなら仲人の川村さんにもお話があるのが當り前なのに、おいて頂ける思召があればこそ、力が入り過ぎて今の様に仰有つて下さるのだ。

さう思へば本當に感謝すべきではないか。それにお前が考へ違ひをして、失禮な事を申上げたのは重々悪いのだから、よくこゝでお詫びをして、好枝のこの先の事もよくお願ひしておいて、失禮させて頂かうじやないか。」

道枝は宮崎の心持も、昭博の心持もよく呑み込めたので、自分の言葉の過ぎた事を悟つて、急に容を改め、顔色を柔げて、

「本當に私……どうぞいふ氣になつて、あんな失禮な事を申上げましたのか、自分でも分らなくなりました。」

「どうかお母様、今申上げました事は、どうぞ水にお流し下さしまして、許して頂きます様、あゝ言ふ行届きません者をお願ひ致しまして、眞に申譯もございませんが、どうぞ此の上も、御面倒乍らお願ひ申上げます。」

お父様、本當に失禮な事を申上げましたが、お許し下さいませ。」

俊夫さんもごうか御立腹遊しませぬ様に、愚かな私をお許し下さいませ。」

道枝は一生懸命丁寧に、真心を盡して只管詫び入りましたので、茂子も今は言ふべき言葉もなく、火鉢の灰を矢鱈に掻き廻して、

「私は昔から、真直な事が好きで、腹にないお世辭なんか言つた事は、一度もありませんので、思つた事をそのまゝ申し上げたに過ぎませんが、貴女がお腹をお立てになつて、伴れて歸ると仰有るから、さうお思ひになればおつれ下さつてもかまひませんと賣言葉に買言葉で、申し上げましたが、おいて行くお仰有れば、強つてつれて行つて下さいと、申す譯ではないのです。」

と物凄く眼で道枝を見凝め、懸て座敷の隅に袖に顔を包んで泣いてゐる、好枝の方を向いて、物凄く睨みつけるのでした。

春光はその様子を見ると、思はず脊中に冷水を注がれた様な感じを覚えて、見て見ぬ振をして、道枝を促し立て、表面は何氣ない態度で、上機嫌で挨拶して歸りかけました。それでも昭博や俊夫と共に、玄關まで送つて出て、體をふるはせ乍ら、泣き顔を隠す様にして、二人を見送る好枝の哀れな姿を見ると、胸も破れる様な思ひを、じ

つと休えて門の外まで出ましたが、二三間も行かない中に道枝は、思ひ餘つて

「わつ」

と聲を立て、泣き出して終ひました。春光はあはて、

「大事な時だ、泣いたりしちやいけない、こらへて行け、山田さんの所へきこへると悪いから……好枝の事は大丈夫だよ。」

と言ひ乍らも、自分でもハンカチで眼を押へて、溢れ出る涙を押し拭ふのでした。

その夜から道枝は、どれ程無理に床に就いて、眠らうとしても、胸が騒いで眠られぬまゝに、家内中の者が寢静まるのを待つて、夜の道を山田家へ忍んで行つて、山田家の裏の大榎の下に、身を静座合掌して、陰乍ら好枝の身に、過ちのない様に神佛に祈り續けました。

## 父の情

松の内も今日限りといふ、七日の朝になると昭博は、突然「今度俊夫が人事課の方へ變つたので、面會人も多く出勤時間も早くなつて、

會社の退けも遅くなるので、家からは通はれぬ様になるから、會社の近くの社宅の方へ入れる様にと、重役から話があつたから、折角會社へ入れて貰つて、今大事な時だから、會社の方で言ふ通りにおかないと、都合の悪い事があるからと思つて、社宅へ入れて貰ふ様に頼んでおいた。

そしたら七日が丁度日がいゝから、是非來る様にと今手紙が來たから、今日社宅の方へ移らせ様と思ふんだが。」

「貴方、そんな事を今突然仰有るなんて、餘程貴方も變じやありませんか。それにしても俊夫一人行くんですか。」

「馬鹿な事を言ひなさい、俊夫一人で行つて、何が出来る。」

男一人では食事の事も、身の廻りの事も洗濯一つも出来やしない。

「好枝がついて行くのは、當り前の事じやないか。」

好枝をつけてやるんですつて？」

「そりやさうさ、つけてやるのが當然じやないか。」

「何が當然ですか、貴方といふ人は一體どういふ分らない人でせう。」

好枝は家にゐて、私がついてゐて、一から十まで細かく教へてさえ、何一つ満足に出來ぬ女じやありませんか。

そんな者を俊夫につけてやつて、どうなるとお思ひになりますか。

他の方の奥さん方は、何も彼も如才なく出来る、立派な方ばかりの中へ、あんな者を連れて行つたら、人様の笑ひ草になつて、俊夫の頭の上りつこはありません。お父さんは何と仰有るにしてもお前はまさか、好枝なんかつれて行く氣じやあるまいね。」

「だつてお母さん、僕が行けば好枝も行かなけりや、どうにもならないじやありませんか。」

「そんな事を言つて、お前まであんな者をつれて行く氣なのかえ、まあ呆れた人達だね、だけごわたしは、そんな事には賛成出來ないよ。」

「それではお母さん、どうしたらよろしいのです。」

會社の方では何でも彼でも、社宅へ入つて呉れなくちや、いけないと言ふんですから、僕一人で行つたんじや、困つて終ひます。」

「困るなら和子を當分連れてお出で。」

和子をですか、お母さん、そんな事をしたら變じやありませんか。

年頃から言ふと、丁度夫婦の様に見えますから、人が誤解して家内だと思ふに決つてゐます。それじや僕も困るし、和子だつて困るでせう。

そんな事をしなくつても、好枝をつれて行けば、間に合ふんですから……。

そりや好枝は、まだ家庭になれないから、何も彼も行届きませんけれども、却つて自分で責任を持つて、やつて見れば、幾度か失敗する中には、本當の仕事が出来る様になるかも知れません。餘りお母さんや和子に凭れ過ぎてゐるより、却つて身に浸みて、總べての事がよく覺えられるか分りません。

僕も亦充分注意をしますし、お母さんも時々來て、教へてやつて下さればいゝと思ひます。又何彼の時にはうちへ寄越しますから、その時細かく教へてやつて下さればいゝと思ひますから、兎に角當分の間だけ、一緒にやつて下さい。」

「そんな事は絶対にいけません。」

本當に分らない人です、好枝はこの先の家の嫁として、相續する人なんだからこの家の總べての家風を、十分覺えて貰はなければなりません。

だからまだ一年や二年はこゝにゐて、命がけで私と一緒に働いて貰はなければならぬんだよ。和子は今は家にゐたつて、何時他所へ行かなければならぬか分らないし幾ら間に合つても、當てになるものではありません。」

「だつてお母さん。貴女でも若い時は、お父さんと御一緒に何處も彼も、ついてお出でになつたでせう。僕も弟も和子も、別々の處で生れ、學校も三遍づゝも變つてゐます。その間おちいさんやおばあさんは、卯助や女中のときと四人だけで、十五年以上も留守居をしてゐて下さつて、たまの休みに僕達が歸ると、大變喜んで下さつた事を僕はよく覺えてゐます。家風を覺える事も大切ですが、夫婦として見れば、夫の現在の職業程大切なものはありません。」

妻が夫と離れてゐて、不自由な思ひをさせたりしたならば、ごれだけ交際上や又能率に關係するか分りません。僕、幾ら間に合はない好枝でも、充分注意してさせたら人並の事位は出来ない事もなからうと思ひますから、そんな御心配はして下さらないで、當分の間だけでも一緒にやらせて下さい。」

「兄さん、そんな事を言つて、二人で行つて終つて、お父さんやお母さんは誰がお世



話をするんですの？」

「それは幸ひ今お前がうちにゐて呉れるんだから、當分お傍で面倒を見て呉れ。別に用事のある家ではないんだから、唯心委せに話相手になつて、御相手をしていて呉れ、ばい、んだ。」

掃除だつてお勝手だつて、當り前の事はお君で出来るんだから、お前は唯お父さんやお母さんの、お相手さえしてゐて呉れ、ばい、んだから……。」

「いやですよ、そんな事、兄さん、私はお父さんやお母さんの、世話をするべき人間じゃないんですよ。お父さんやお母さんの世話をするのは、兄さんや姉さんの責任じやありませんか。その人達が他所へ行つて、我儘勝手な生活をするのに、私が世話をしなければならぬなんて、そんな馬鹿らしい事私はようしませんわ。」

餘り蟲のよすぎる話じやないんですかそんな事、兄さん達がそんな事をするなら、私も勝手に何處へでも出て行つて、暮すからい、んだです。」

和子が飽迄強硬に、抵抗してさういふ様子を見せると、昭博は忽ち雷が落ちたかと思ふ程大きな聲を出して、

「こら、和子、お前なんかの知つた事じやない。」

俊夫お母さんが何と言はうが、和子がごんな文句を並べようが、わしは一旦重役と約束した手前、止めさせる事は出来んから、すぐに好枝をつれて熱田へ行け。

好枝！ すぐに支度をして俊夫について行け。妻は夫につきものだから、一日だつて半日だつて、理由なく別れて暮すといふ法はない。遠慮せんでもい、から、さつさとついて行け。」

とせき立てられて、好枝は困つて終つて、

「でも私、もう暫くお母様のお側に、おいて頂いた方がよいかと思ひます。」

「馬鹿な事を言ふな、お前は何しに此家へ来たんだ。」

俊夫の嫁に来たんだらう。その嫁が夫の傍についてゐて、萬事の世話をしない位なら、家内なんてものは無くていい譯だ。

妻は夫に一日もなくてはならぬ大事な道具なんだ、一日でも二日でも離しておく事は出来ぬ。お前が何と言はうと、ついて行かねばわしが承知せんぞ。

俊夫も外の事には違つて、男子の面目にもか、はり、信用にも關する事だから、す

ぐにつれて行け。若しも好枝が愚圖々々言つてゐて、行かないと言へば川村さんにも来て貰ひ、叔父さんや叔母さんにも来て貰つて、よく物の道理を聞いて貰つて、意見して頂くがどうじや。

それでも行かぬといふか、行くか行かぬか、どうじや。」

と矢鱈に急ぎ立てられて、どうしてよいのか譯が分らず、うろくし乍ら俊夫の顔を見るとき俊夫は好枝の顔をぢつと見て眼に物を言はせ乍ら、早く支度をする様に勧めるのでした。昭博は重ねて

「さあさあ、早く支度をせよ、今度の汽車で行かぬと、又遅れて終ふ。

わしも一緒に送つて行つてやる。

俊夫、早く支度して、好枝も頭も顔もかまふ必要はない。

そのまゝでいゝから一寸着物だけ換えて、すぐ行ける様に支度をせよ。」

と矢鱈早にせき立てられて、俊夫は好枝を無理に促して部屋へ歸ると、

「好枝！ 好枝！ お父さんの心持はよく分るだらう。」

愚圖々々としてゐては駄目だ、この機會に家を出ないと、又どんな事が起つて、行

けなくなるかも知れない。早く着物を着替えるんだ。早く、早く。

と手早く、自分も洋服にかへると、好枝もせき立てられるまゝに、髪を梳きつける間もなく、ダンスから他所行きに着物を出して手早く着ると、俊夫は

「後から色々の荷物は取りに来ればよいから、當分必要な物だけこゝへ出すんだ、鞆へつめて持つて行く様にするから……。」

と好枝が二三枚の着替えや、身の廻りの必需品だけ取り出すのを、手早くトランクの中へ入れました。

さうして瞬く間に支度をする時、好枝を押し出す様にして、下へ下りて来て見ますと早や昭博は支度をして、ステッキを持つて玄關に立つてゐます。

「もう支度が出来たか、よし早かつた、もうすぐ自動車が来るから。」

「お父さん言ひつけて下さつてあるのですか。」

「うん、昨日の中にもちやんと言つてあるんだよ。」

「あゝ、さうですか、それはどうも……。」

好枝！ お前一寸行つて、お母さんや和子に挨拶してお出で。」

言はれて好枝は怖々乍ら、茶の間へ入つて行つて見ると、茂子と和子は物凄い眼をして好枝を睨んでゐますので、ふるへる體をじつと泳え乍ら  
「お母様、お言葉に背きました。誠に申譯ございませんが、お父様があんなに仰有いますので、一寸だけやらせて頂きます。」

和子様、それではどうぞよろしく願ひ致します。」

「好枝！ お前そんな事を言つて、本當に行くつもりかい。」

早やそんなに支度をして……、ほんにお前は何といふ怖ろしい女だらう。

表面は蟲も殺さぬ様な體裁のよい顔をして、陰へ廻つてはお父さんや俊夫を欺して熱田へ行く様に運びをつけておいたりして、今日になつてもまだ自分は知らん顔をしてゐて、そしてお父さんや俊夫に責任を被せて、自分一人がいゝ者になつて、熱田へ行つて存分の我儘をしようなんて、ほんとにごこまで太々しい見なんだらう、お前がそんな了見なら、わしにもちやんと考へがある。

二度と再びこの家の敷居を跨いで、お母さんなごゝ呼ばないといふ事を、はつきりごこゝで誓つてから出ておいで。」

「お母さん、これも姉さん一人の智恵じやないのです。」

あの悪賢い叔母さんが、何も彼も入れ智恵して、お父さんや兄さんを唆かして、こんな事にしたのに違ひありません。お母さん、すぐに名古屋へ使をやつて、叔母さんと呼びつけて 談判してやつたらどうです。」

「あの人の入智恵といふ事は、ちやんと分つてゐるんだけど、あんな人を呼びつけて物の道理を言つて聞かせたつて、分る様なものじやない。」

それより好枝に、こゝではつきり嫁姑の縁を切つて貰つて、そして行つて貰へばそれでいゝんだよ。好枝！ わたしの前ではつきりと、その事を誓つてお呉れ。

さうでなければこゝを動かしませんよ。」

好枝は何と言つてよいか分らず、おご／＼し乍らうつむいてゐると、昭博がつかつかと入つて来て、

「これ／＼好枝！ 何といふ長い挨拶をしてゐるんだ。」

時間が来て終ふじやないか。

又用があれば何時でも歸れる、一時間もかゝらずに往復が出来るんだから、さあさ

あ早く／＼出かけるのじや、自動車がさつき来て、待つてゐるじやないか。」  
と手を取つて引かんばかりに、せき立てられ、好枝はうろ／＼し乍ら無意識に下駄を穿くと、俊夫と昭博との真中にかけてさせられて、無我夢中の中に自動車は走り出して終ひました。

## 雲間の月

道枝が七日の晝少し過ぎに、好枝の事はどうなつたかと思ひ煩つてゐると、熱田から電話がかゝりました。

道枝が出て見ると、はつきりした俊夫の聲で

「もし／＼ 叔母さんですか、先日は色々ご心配かけましたが、父の厚意で兎に角今日こちらへ参りました。

出る事は却々うちも難しかつたのですけれど、先づ漸く脱れ出た形です。

あは／＼／＼、勿論好枝も一緒につれて来まし。それでお願いですがね叔母さん。来た事はいゝが家さえ出ればいゝと思つたものですから、何も持たないで来たもので

すから、二人共丸裸同様です。

生活して行く道具なんて、何もありませんから、家の中は空っぽなんです。

お父さんが金はおいて行つて呉れましたが、僕達だけでは買ひ揃へるのに、一寸見當がつきませんから、すぐに手傳ひに来て頂けませんか。

好枝に買つて来る様に言つても、きまり悪がつてよう買ひに行かぬのです。

すみませんが叔母さん、今からすぐに来て應援してやつて下さいませんか。」

と俊夫の聲は矢鱈に嬉しさうに聞えます。道枝も今迄曇つてゐた心が、一時にぱつと晴れた様な心持になり、思はず聲をはづませて、

「ではすぐにこれから参りませう。」

と住所番地を聞き取つて、春光にもその事を話して、自分の手許にあるだけのお金を懐に入れて、タクシーで一目散に熱田へ走りしました。

それから三十分もたない中に、道枝の嬉しさうな顔は、二階建の社宅の三號に見えました。三人は始めて朗かに笑ひ乍ら、色々語り合つて、

「叔母さん、出かけに母と和子が、猛烈に反對したものですから、好枝が又うろ／＼

になつて終つたんです。

それだからお父さんが氣を利かして、心にもない雷の様な聲を出して、怒鳴り立て、まるで好枝を掴み出す様にして、自動車へ乗せてこゝへつれて來たのです。

實際血を分けた親子の間柄でも、この位感情がもつれては問題になりませんね。

こちらは何とも思つちやゐないんですが……。

お母さんが和子のために、全く迷ひ切つて終つてゐるものですから、自分乍ら恐ろしい様な心持になつてゐますから、僕も全く閉口しましたよ。」

「本當にあんな御聰明な方が、そんなお心になられるのも、和子様がお可愛いからばかりですわ。それを思へば本當にお氣の毒でなりません。」

「勿論和子も可愛さうだし、母の氣持にも充分同情はしてゐるのですが、和子の不幸を僕達のわざの様に、好枝を犠牲にしやうなんていふのは、全く残酷極まる話です。幾ら血肉を分けた親でも、そんな事に同意する事は、目の前で死んでやると言はれても、自分が先に死ぬかつても、出来る事じやありません。

今の場合としては假令僕等は、自らを救ふのには、又母や和子を救ふためにも、か

うするより外に、ごう考へても道はないのですから、致し方がないのです。

今度の事についても、父は随分心配して呉れたんですが、此の先も随分苦勞をされるのだと思ふと、全く氣の毒でなりません。

しかしこんな事も長い事じやない。應ては解決がついて、氷が解けた様になると思ひます。

時期が來るまでは、自然の成行のまゝに、まかせ切つて行かうと思ひます。

叔父さんや叔母さんにも、大變御心配をかけたりましたが、これからはそんなに心配して頂く必要はないと思ひますから、ごうぞ安心して下さい。

僕等も折々お邪魔に上りますから、叔母さん達もお暇があつたら、時々出かけてお出で下さい。そして好枝に色々、家庭上の事について、教へてやつて下さい。」

「私で出来るだけの事は、又これから何でも教へますよ。」

「さあそれでは、こんな空の家ではごうにもならないから、少し道具を買つて頂きませうか。」

「お父さんがねえ 叔母さん。又追々必要な物は家から持つて來てやるから、當座の

必要な物だけ買ふ様にと仰有いましたわ。」

「叔母さん、そして百圓をいて行つて呉れたのですが、これで一通りの道具が買えませうかね。」

「おほ、、、。それは貴方、品物によりけりですよ。」

茶棚一つでも五十圓のもあれば、五圓のもあるのですもの。

お父様が百圓下さつたら、私も新宅祝ひに百圓寄附しませうか。」

「それはすみません、又僕もお金を澤山儲ける様になつたら、利息をつけて返します。」

「それは有りがたうございます、利息を十倍もつけて返して下さいね。」

なご、冗談を言ひ乍ら、三人で町を歩いて、世帯道具の一切、食料品を買ひ集め夫々の店から届けさせ、道具を置く位置を決めて、配置して見て、

「さあ、これでどうやら人間の住居らしくなりました。」

「ほ、、、。貧弱な世帯ですねえ。ダンスもなし鏡臺もなし、それよりか俊夫さん！ お蒲團がないじやありませんか。裸でお寝みになるの？ 今夜から……。」

「さうだつた、おい好枝！ 蒲團がないぞ。お前どうする。裸でお寝るつもりかい。」

「貴方はどうなさるおつもりですか？」

「僕か！ 僕は困るなあ、でもお前が裸で寝ると言へば、僕だつて裸で寝るさ。」

「おほほ、、、。何も修業のつもりで、二日三日裸で寝て見たらどうですか、丁度寒に入つたから、修業甲斐がありますよ。」

「困つたなあ好枝！ その事はお父さんも、気がつかなくなつたらしいね。」

「まあ、そんなに本氣に心配しなくても大丈夫よ、私がうちから持たせてよこしますから。おほ、、、……。」

「本當ですか、叔母さん。」

貸して下さるんですか、寄附して呉れるんですか。」

「返す事が厭なら、寄附して上げますよ、絹布の上等のお布團でも出来て、邪魔になつたら、返すと言へば受取つても上げますよ。」

「そりや有り難い、好枝 裸で寝なくてもい、ぞ、ちつと落着いて、お風呂へでも行つて来い、好枝が瘦我慢を張り通したものだから、骨と皮ばかりになつて、顔が青瓢單の様になり、折角の美しさが何處へか逃げて行つて終つたかち、當分の中は滋養物

でも食べさせて、もこの様に肥やして、艶を出さなくちや、仕方ありません。  
差當り叔母さん、ごんな物を食べたら、直きに肥えるでせうか。」

「さうですね、豚肉でも食べたら、肥えるでせうよおほ、おほ。」

「叔母さんの言ふ事は、その位の事だらうと思つてゐましたよ。」

矢鱈に豚なんか食べさせて、豚肥になつてしまつたら、又困るしなあ、は、は、は。」  
と今迄とは打つて變つて、俊夫は天真爛漫な心持で、道枝や好枝に話かけるのでした。  
そして道枝が手傳つて、初めてその家で御飯を炊いて、三人が新しい茶臺の上で夕食をすますと、道枝が春光に電話で頼んで、出して貰つて小使に持たせて寄越した布圍が届きました。それを三人で座敷に運び入れて床を敷き、炬燵に火を入れて温めておいて、二人は道枝と共に自動車で、春光の所へ挨拶に行き、又一頻り賑やかに話して、九時過ぎに二人睦じく歸つて行きました。

その後道枝は、肩の重荷をすつかりと下した様な、軽い氣持になつて、言ひ知れない喜びを感じました。

その晩道枝は、幸福な夢を見乍ら、朝までぐつすり眠る事が出来ました。

それから後は、折々好枝が一人で訪ねて来たり、道枝が二人を訪れたり、又二人で道枝の所へ遊びに行つたりして、絶えず道枝は世話をして居りました。

かくて十日二十日と夢の様に過ぎる中に、俊夫の言つた通り、好枝は段々と肉づきもよくなつて、昔の通りの顔の色艶も出て、腫の色も幸福に輝く様になりました。

その間にも昭博は屢々訪ねて来て、色々世話をして呉れますので、その度毎に好枝は、あらん限りの真心を盡して、父の心を慰める事に努めるのでした。

又一方快く思はれぬ事は知り乍らも、母と和子の心を少しでも柔げるために、時折珍らしいものを買つて送つたり、手紙を出したりしましたが、それに對して一度も返事は来ませんでした。何不自由のない生活の中にも、その話になると二人の心は、すぐに淋しくなつて行くのは、止むを得ない事でありました。

好枝は晚俊夫を送り出して終ふと、一日中これといふ仕事もありませんので、毛糸屋から仕事を預つて来て、楽しみ半分にチョッキ・襟巻・靴下・子供のデンチ等を編むのでした。大變手際よく仕上るので、後からくと頼まれて、根氣よく編物をするのでした。こんな平和な日ばかりが続くものなら、人の世に悩みや苦勞はない筈です。

けれども月に村雲花に嵐の譬への通り、天は何時までもこの二人に、絶對的の幸福を獨占させてはおかないのみか、その一切を奪ひ去る様な、慘酷な運命の手が二人の上に伸びて参りました。

### 悪魔の手は伸びて

それは二月の五日の朝、何時もの通り機嫌よく、會社へ出勤した俊夫が、午後の二時頃になると、眞蒼な顔をして歸つて來ました。好枝は驚いて、

「貴方どうなさいましたの？」

と心配さうに尋ねると、俊夫はそれに答へるのにも辛さうに、

「好枝！ 床を敷いて呉れ、頭が痛い。」

とすぐに寢込んで終ひました。

好枝は急いで風邪薬を服ませ、頭を冷しましたが、却々治りません。

心配の餘り道枝に來て貰はうと思つて、電話をかけましたが、生憎道枝は上京中で七日でなければ歸らないこの事でした。

仕方なしに近所の醫者を頼んで、診察して貰ふと

「これは急性肺炎です。しかも餘程重くなつてゐますから、こんな所においては駄目です。奥さん、すぐに大學病院へ入院して、充分の手當をしなければ、取返しのない事になります。私からも電話をかけて上げますから、貴女も早く支度をして、一刻も早くお入りにならないければいけません。」

と言つておいて歸ると、すぐに臨時手當のため、看護婦に色々の道具を持たせて、寄越して呉れました。看護婦はすぐに、胸を濕布するやら火鉢に火を起させて、お湯をかけて湯氣を立てるやら、一生懸命の手當をして呉れました。

その間に好枝は、稻澤の實家へ使ひを立てると、間もなく昭博が顔色を變へて駆けつけて参りました。すぐに自動車で大學病院へ入院させましたが、幸に昭博は院長の藤田博士と懇意でしたので、百方手を盡して世話をして呉れまして、看護婦も一番經驗もあり親切なものを、二人廻して呉れましたので、好枝は二人の看護婦と協力して命懸けで世話をして居りましたが、病は一刻一刻と悪くなるばかりで、その翌日の夜になると、全く危篤に陥つて終ひましたので、昭博は吃驚してうちへ使を出して、すぐ



に茂子と和子を呼び寄せ、東京の大學にゐる幸夫の所へも、電報を打ち、主なる親戚へも通知致しましたので、皆あはてゝ駆けつけました。

春光も朝から行つて、付き切つて居りましたが、手のつけようもありません。

丁度十時頃主治醫の博士が来て、診察しやうとした所へ、氣狂ひの様になつて駆け込んで来た茂子と和子は、息せき切つて病室へ入ると、俊夫のこの有様を見て、周圍に人のゐる事も氣づかないものゝ様に、病人に縋りついて、

「俊夫！ 俊夫！ しつかりしてお呉れ。」

お前はまあどうして、こんなひどい病氣になつて呉れたのだ。」

「兄さん、しつかりして下さい、私和子ですわ。」

と両方からしがみついて、おい／＼と泣き出して終ひました。

博士はそれを押退ける様にして、

「貴方達は誰方です。」

昭博は

「家内と娘です。」

「あゝさうですか、それでは御尤もですが、騒いで頂いては却つていけませんから、成るべく静かにしてゐて下さい。一寸診察しますから。」

と言つて、丁寧に胸を調べて脈を取り、熱を見て一寸首をかしげて、看護婦に四十と小さくさゝやいて、心配さうにじつと病人の顔を見凝めました。

それをじつと見てゐた茂子は、

「先生、大丈夫でございますか。」

「さあ……、今の所ではもう、非常な重態ですから、何ともお答へは出来ません。」

「では先生、駄目なんでしょうか。」

「いや、さうとも決りません。この病氣はかういふ熱が、暫く続きますからね。今晚の一時頃までに假令一分でも下ると、大分工合がいののですが、このまゝ明朝まで下らぬと、どうかと思ひますが、兎に角充分お手當をして頂かなければなりません。」

奥さんがゐらつしやいますから、御如才はないんですが……。」

と言ふのを見て、ふと傍を振り返つて、好枝が顔色まで變へて泣いてゐるのを見付けると、茂子は急に狂暴になつて、

「お、好枝、お前はそこにゐたのか。」

わたしやお前によく／＼お禮を言ふよ、好枝、お前はようもわたしの手から俊夫を奪ひ取つて、こんな病氣に罹らせて呉れたね。

うちを出る時も私に、煮湯を吞ませる様な思ひをさせて苦しめておいて、それで飽き足らずに今度は、俊夫の命まで取つて終ふつもりかい。

大方こんな事になるのが關の山だと思つて、私があれば程あの時反對したのに、俊夫を唆かしてつれ出して、こんな怖ろしい病氣にして終つて……。

お前は何といふ怖ろしい女だえ。お前が泣くといふ理由が何處にある、俊夫をたつた今こゝで、元の體にして返してお呉れ。

わたしはお前の様に、一年や半年の夫婦生活とは違つて、腹を痛めて生んで、小さい時から命懸けで、育て上げて來たんだよ。

一時だつて俊夫の事を忘れた事はない、蚤や蚊にも滅多に刺させまいと、大切に育て、來た俊夫です。たつた今元の體にして返してお呉れ、若し俊夫が元の體にならなかつたら、お前だつて、そのまゝにしてはおかないよ。」

と氣狂ひの様になつて、好枝に喰つて掛つて罵りました。

好枝は餘りの怖ろしさに、

「お母様、どうぞおゆるし下さいませ、何事も私が悪うございました。」

「今更詫びたつて戻る事じやない、さあ俊夫を、元の體にして返してお呉れ。」

と猛り立つのでみんなは吃驚して終ひました、博士が、

「まあ／＼奥さん、貴女の仰有るのも無理ではありませんが、これは別に若奥さんのわざじやありませんから、そんな事を仰有つて騒れると、病人に障りますから、お氣を鎮めて静かにして下さい。」

と注意すると、

「先生、この子が病氣になつたのも、皆これがしたのです。」

好枝！ お前なんかに大事な俊夫を、まかせてはおけないから、早くあつちへ行つてお呉れ、早くこゝから出て行つてお呉れ。」

と顔を眞蒼にして、怒鳴り立てるので、みんなが

「まあ／＼お静かに／＼。」

と言つて止めるのも聞かずに、好枝の衿髪を掴んで、する／＼と病室の入口の方へ引つ張つて行つて、廊下の外に力限り突き飛ばしました。

二人の看護婦は餘りの権幕に、呆氣に取られて見てゐましたが、聽て言ひ合せた様に二人は好枝の傍に走り寄つて、打伏して泣いてゐる好枝を抱き起すと、

「奥さん。奥さん。しつかりして下さい。何といふ怖ろしいお姑さんでせう。」と言つて、慰めるのでした。

室の中では昭博が堪り兼ねて、茂子を相手に争つてゐるのが聞え、その中へ入つて和子が泣き叫び、それをみんなでなだめてゐるのが聞えます。

宮崎は居堪らなくなつて、病室を出ると一人廊下の隅へ来て、聲を忍んで泣いてゐます。博士は見るに見兼ねて、早々出て行つて終ひました。

一人の看護婦はすぐに中へ入つて来て、病人の傍に近づいて、吸入の世話などをしてゐます。今一人の看護婦は、漸く好枝をなだめ起して、廊下の行き詰りの中庭の所まで誘つて行つて、

「奥さん、しつかり遊して下さい。」

貴女が今そんなに力を落して、氣を弱くなすつては大變です。

假令お母様がどんな事を仰つたとして、貴女の眞心はよく神様が御存じで、ごいまます、こんな場合にそんな事位を氣にかけてお出でにならないで、唯一生懸命で旦那様の御介抱を遊ばして頂かないと駄目でございます。

人の眞心は天にも通じると申しますから、必ず御病人に通じて、貴女が眞心こめて御介抱遊ばせば、屹度御全快になります。さうすれば貴女の御勝利です、ですからしつかりして、一生懸命御看病遊ばさなければいけません。」

と眞心から力をつけて言ひますと、漸く好枝は我に復つて、

「吉澤さん、有りがたうございます。」

本當に貴女の仰有つて下さる通り、誰が何と仰有つて下さつても、神様は私の心を知つてゐて下さいます。お母様があんなに仰有るのも、旦那様がお可愛いさの餘り、助け度い一杯で無我夢中で仰有るのでございます。

私はお母様があんなに仰有つても、少しも御無理とは思ひません。

旦那様をお助けして、喜んで頂き度いと思ひますけれど、私にはそんな力はあり

ませんから、どんな力でもお持ちになる神様にお願ひして、救つて頂くより外に道はありません。

吉澤さん、お願ひでございませうから、私と一緒に神様にお祈りして下さいませ。」  
と言ひ乍ら、好枝は手を固く組み合せて、體をふるはせ乍ら、空に向つて、何事か一心に祈り續けました。

看護婦も好枝と共に一心に祈つてゐましたが、聽て好枝は別人の様に、からりと態度が快活に變ると、看護婦を自分からせき立てる様にして病室へ歸つて參りました。

そしてまだ興奮して、父と争つてゐる母親を見ると、轉ぶ様にしてかけよつて、母の兩手をしつかり掴つて、

「お母様、どうぞ御心配なさいで下さいませ。」

旦那様の御病氣は、屹度々々私の一念でゞもお治し致します、私の命に代へましてゞも……。」

と言つて、思ひ餘つて後は言葉もなく俯伏して終ひました。

半ば狂氣の如く興奮してゐた茂子も、この思ひかけぬ好枝の舉動に、呆氣に取られ

てゐると昭博は、

「好枝！ そんなにお前まで興奮してはいかん。」

俊夫に萬一の事があつても、それは決してお前の罪ではない、皆これが運命なんだ。眞心の限りを盡して、あれの命を取り止める事が出来ねば、その時こそは諦めなければならぬ、今は色々と言つて、騒ぐべき時ではない。

そんな事を言つてゐる中も忽には出来ない、一生懸命外の事を思はないで、介抱してやつてお呉れ。

お前が側にゐないと、俊夫も淋しからうから、そばを離れない様にしてな。」  
と注意されると、好枝は

「はい 有りがたうございます。」

寢臺の傍に近よつて、ちつと俊夫の顔を眺め乍ら、其目からは玉の涙がはらくと床の上に落ちました。それから一時間後に、再び主治醫は診察に来て、檢温すると如何にも嬉しさを表情をして

「やあ一度下りましたよ。」

これは有難い、この分ならば大丈夫ですよ。」  
と言つて、丁寧ていねいに診察しんさつしておいて歸かへりました。

この言葉を聞くと、一同どうは思はずほつとして、愁眉しゅうびを開ひらきました。

丁度てうどその時、東京とうきやうから電報でんぱうによつて、俊夫としをの急病きふびやうを聞き、最大急行さいだいきふかうで歸かへつて來て、旅装りよさうも解とかないで駈かけつけた道枝みちえが、慌あはたしく病室びやうしつへ入はいつて參まゐりました。

これを見た好枝よしえは、思はず叔母おははに取り繼つり、

「叔母さん！」

「好枝！」

と言つたまゝ、後あとは言葉ことばも出でないで、暫しばらくく聲こゑを忍しのんで泣なき續つけました。

## 愛の力

俊夫としをの病氣びやうきは最も怖おそるべき、危険状態きけんじやうたいから免まぬがれて、漸やうやく幾分いくぶんかづ、熱ねつは下さり初はじめましたが、まだく絶對安心ぜつたいあんしんの出來る容態ようたいではありませんので、二三日にちは近親きんしんの者ものは皆みな病院びやういんに詰つめかけて、懇切こんせつの限かぎりを盡つくして看護かんごに努つとめました。

四日か目めになりますと、驚おどろく程容態ほどようたいがよくなりまして、病人びやうにん自みづからも周圍しうみの人々ひとびとの區別くべつも出來、顔かほも見分みわける様やうになり、色々いろくの用事ようじも訴うったへる事ことが出來る様やうになりました。

この日主治醫ひしゆぢいは初はじめて安心あんしんしたらしく、

「これはいゝ鹽梅あんばいです、大變熱たいへんねつも取とれましたし、病氣びやうきの勢いきほひも衰おとろえました。

もう大丈夫だいじやうぶですから、皆みなさん御安心ごあんしん下さい。」

と言いつて、喜よろこんで歸かへつて行いかれました。それを聞くと一同どうは安心あんしんして、

「まあ、それでもよろしうございました、一時じはごうなる事ことかと心配しんぱいしましたが……。」

「本當ほんたうにさうです、餘あまり突然とつぜんの事ことでしたので、吃驚びっくり致いたしました。」

昭博あきひろも嬉うれしさに堪たえ兼ねた様やうに、

「全くまったくごうも、皆みな様に大變御心配たいへんごしんぱいをかけまして、眞まことに申譯まうしわけもありませんでした。

私わたくしも實じつは驚おどろきまして、金錢上きんせんじやうの慾得よくとくで言いふのじやありませんが、小ちひさい時ときからこ  
れは随分心配ずぶんしんぱいして育そだてましたので、學校がくかうの方もごうやら大學だいがくを卒業そつげふさせて、やつと會かい  
社しゃへも入いれて頂いたいで、これで一安心あんしんと思おもつて肩かたの重荷おもにを下おろした所ところへ、突然とつぜんこんな病氣びやうき  
になつたものですから、若もしこのまゝ命いのちを終おつたらなご、思おもふと、本當ほんたうにちつとして

あられない程心配致しましたが、まあお蔭様で治つてさえ呉れれば、本當に有りがたいと思ひます。」

茂子も側から、

「私が此處へ来てこの様子を見ました時は、これはもう駄目かと思ひまして、自分に生きてゐる様な氣持もしない程、驚いて終ひました。」

でもまあかうして、よい方へ向つて呉れましたからいゝんですけれど、若しあのまゝ亡くなつてども終つて呉れたら、私はまあどうしやうと思つて、身も世もない程心配致しました。」

「さうだ、お前は餘り吃驚し過ぎたためか、のぼせ上つて終つて、罪もない好枝にまで食つてかゝつて、却々素晴らしい勢だつたよ。」

「貴方そんな事仰有るけれども、俊夫程小さい時から、健康で風邪一つ引いた事のない様な者が、こんな急に病氣になるんですもの。」

少しは愚痴も言ひ度くなるじやありませんか、うちにゐて病氣になつたのならまだそこにもありますけど、私達があれ程反對したのに、貴方や好枝が勝手に熱田邊りま

でつれ出して、こんな病氣にしたのですもの。」

「まあ、いゝゝ、そんな事は今日は言はないでお呉れ。」

「だつて私は、丁度親戚の皆さんも来てゐて下さるのだから、一通りの事情を聞いておいて頂き度いと思ふのです。」

「まあそんな事は、止めよと言つたら止めよ。そんな事はこんな所で言ふべき事じやない、俊夫もまだ重態なんだから、絶対安静にしなければならぬ。」

それをそんな事を言ひ出して、心配させてはいかんから、又言ひ度い事があつたら全快して終つてから、後でも何時でも話は出来る。」

「そんな事を仰有るけれど、貴方があんまり分らない事をなさるから、こんな事になつたんじやありませんか、それを皆さんに聞いて頂かうと言ふんですよ。」

「そんな馬鹿な事があるか、人間の體は四百四病の器と言ふから、どんな高貴なお方にでも、御病氣になられる事もあるし、又あらゆる名醫を招いて、名薬を吞ませて手當の限りを受けられても、壽命が盡きれば亡くなるのだから、人間が病氣をするのも亡なるのも、皆これ天命なんだ。」

それを人間の力で、ごうする事も出来るもんじやない。

それを彼此言ふのは、愚痴と言ふものだ、俊夫が假令家にゐたとして、病氣になる時期が来てゐれば、病氣になつたに違ひない。それを、人の業の様にあれこれと言ふのは、眞によくない事だから、慎まなくちやいかん。」

「そりや さういふ風に言つて終へば、貴方は都合がよいでせうけれど、さうは行きません。病氣にならずに済むものを、不衛生な事をして病氣になつて、自分にも苦しい思ひをするばかりでなく、身内や親戚にまで心配をかけ、そして澤山な費用を使つたりするのですもの。こんなつまらない事があるものですか。

うちから通つてゐるのだつたら、決してこんな病氣になんか罹らせやしません。」

「そんな事はない、ごこにゐたつて罹る時は罹るんだ。」

「違ひます、不養生な事を好枝がさせたから、それでこんなになつたんです。」

二人のこの争ひを、見るに見兼ねて親戚の人達は、

「まあ、そんな事をお互に仰つたつて、ごうにもなる事じやありません。

山田さんも奥さんも、まあお止めなさい。」

それよりも一生懸命お世話をして、一日も早く全快して頂かなければなりません。」

「さうです。病人でも出来ること、お互に愚痴も言ひ度くなりますが、愚痴を言つて見たとて、ごうにもなる事じやありませんから、皆で心を合せて、一生懸命で、お世話をして、一日も早く快くなつて頂くに限りません。」

親戚の人々にさう言はれると、二人は争ふ事は止めたが、茂子は暫くすると、

「貴方、これでお医者様も大丈夫だと仰有つて下さるんですから、親戚の方々も色々御用もお有りの事でせうから、一時引取つて頂いた方がよいと思ひます。」

俊夫の看護の事については、ごういふ風に致しませう。」

「ごういふ風にとは？」

「俊夫にすつと附添つて、世話をする者を決めておかなければなりません。」

「そりやお前、好枝がついてゐるんだから、それで充分じやないか。」

それに相當によくなくなるまでは看護婦さんもついてゐて下さるんだから、お前やわしや和子は、來れる時だけ來て、面倒を見る事にすれば、それでいゝじやないか。」

「それはいけません。」

好枝をつけておいて安心な位なら私何もこんな事を、貴方に御相談しやしません。」

「そんならお前は、好枝をつけておかないつもりか。」

「さうですとも、俊夫は私達のために、命にも代えられぬ程の、大事な子なんですから、豆でびんくしてゐる時でさえ、心配した位なんですもの。」

「こんな重病人を他人の好枝に、まかせておくなんて事は、絶対に出来ません。」

「何を言ふんだ お前は、他人といふ事があるか。」

好枝は俊夫の嫁じやないか。」

「嫁には違ひありませんけれど、根が他人ですから、豆な時には何の彼のと世話を焼いても、こんな手足も動かぬ様な病人になつてゐると、肉親程の力は入りませんから、ごんなにして終ふか分りやしません。」

「何といふ事を言ふのだ。夫婦といふものは親子以上のもので、お互に夫婦となれば一方病氣をすれば、一方は自分の體も病む思ひで、心にも體にも苦痛を受け乍ら、世話をするものじやないか。そんな薄情なものじやないよ。」

「貴方、人前だと思つて、そんな體裁のよい事を仰有るけれど、自分の胸に手をおい

て、よく物の道理を考へて御覽なさいませ。

いくら睦じいとか、仲のよい夫婦に見えても、元は赤の他人ですもの。

夫婦と言つて親しみ合ふのは、一緒にゐる中の事で、一つ話が間違つて、別れて終へば、又元の赤の他人になつて終つて、道で擦り違つても、顔も合せないが、物も言はないといふ様なものじやありませんか。

それから考へたつて、夫婦の愛情なんて本當に信じられるものじやありません。

親子や兄弟は切るに切れない肉親ですから、平常の時は兎も角も、いざとなれば親兄弟でなければ、眞剣な世話は出来るものじやありません。

私は俊夫が大事だから、好枝には絶対に、よう委せてはおきません。

和子と私とでこれからつき切つて、全快するまで看護しますから、貴方は好枝をうちへつれて歸つて、家の事をさせて下さいませ。」

「そんな事が出来るものか、好枝をつれて行くなんて……。」

「それでは私や和子が看護しては、いけないと仰有るのですか。」

「いかんといふのじやないけど、そんなに多勢もなくとも、好枝の役だから、始終つ



けておいて、お前達は代る／＼世話に來た方がよいんだ。」

「それは出來ません。それだけは貴方が何と仰有つても、私は承知出來ませんから、好枝をどうしてもつれて行く事が出來ぬと仰有れば、私も和子もこゝにゐて、三人で世話をします。誰が一番俊夫の看護に懇ろか、俊夫が本當に人の真心を知る事が出來て、眼が覺めるでせう。」

「お前にも困つたもんだなあ。」

物事をそんな風に考へる事は、よくない事だぞ、何事でもよい方へ／＼と考へて行けば、物事は圓滿に行くんだが、悪い方へ／＼と考へると、よい者でも悪く見えたりして、大きな罪を造る事になる。」

「貴方こそ、私達の言ふ事を、悪い方へばかりに取つて、自分で勝手に罪を造つてゐらつしやるじやありませんか。何と云へば自分ばかり偉がつて、獨りいゝ人間にならうとばかり、思つてゐらつしやる。」

その席には好枝の父の正雄も、道枝も居りましたが、餘り茂子が露骨に、しかも拗こく好枝を非難するのを聞くと、何とも言葉の出しようもなく、唯額から汗を流して

俯向いて聞いてゐました。

病室の方では好枝が、次の間の両親の争ひを耳にしながらも、成るべくそれを聞かない風に装つて、俊夫の枕邊に附添つて、吸入をかけてゐます。

二人の看護婦は時々顔を見合せては、如何にも氣の毒さうに好枝の顔を眺めて、無言の中に慰めの意を表はすのでした。かくして茂子は主張をどうしても枉げませんので、昭博もどう／＼兜を脱いで、茂子も和子も附添ふ事を許しました。

他の者はこれに對して、一言も反對を唱へる權利も理由もありませんので、お互の心の中では茂子の主張を非難し乍らも、口では

「お嫁さんも附添つて居られ、その上お母さんや妹さんもついてゐらつしやれば、それこそ至れり盡せりだから、そんな結構な事はありません。」

「本當に、それ以上の御介抱はありません。」

と一同口を揃へて言へば、初めて正雄も

「好枝の様な行届かない者が、この様な大病な方をお預りするのには、眞に心配でございますから、お母様や和子 についてゐて頂いて、色々お指圖をして頂かなければな

りません。私どもも、さうして頂けば、眞に安心で御座います。」

と言つて喜びました。そして段々親戚の人達も引き取つてしまひましたので、正雄も道枝も一時宮崎家へ引取つて、毎日病院へ見舞に行く事に致しました。

病院には茂子と和子と好枝の三人が、付き添つて居り、それに二人の看護婦が交替で手當てを致しますので、それこそ水も洩らさぬ程の細かい注意を致しますので、行届いた看護が出来るのであります。

けれども和子と茂子は、事毎に好枝のする事を非難して、俊夫の身邊から好枝を、遠ざけよう／＼と致しますが、それと反對に俊夫は、何につけてもすぐに

「好枝は居らぬのか、好枝！ 好枝！」

と呼んで、一寸體を動かすのにも、食事の事でも用便の事でも、好枝でないと思ひ嫌がわるいので、茂子は可愛い我子の愛を、他人の好枝に奪はれる事を、心から怖れ憎んで好枝に辛く當ります。それが唯三人だけならば、思ふまゝに罵る事も出来ますが、交替で看護婦がついてゐるので、その手前餘り道理に叶はぬ、理不盡な事は言はれないので、茂子も和子もそれをもごかしく思つてゐました。

けれども何とかして、此の間に好枝の落度を見つけて、俊夫と引き離して終はねば全快してからでは、どうする事も出来ないと思ふと、今では二人の間を裂くためにはどんな手段を選んでもとまでに、心の中では好枝に對して、怖ろしい敵意を持つてゐる二人でありました。そのたゞならぬ二人の態度や、形勢を見てゐますと、本人の好枝より看護婦の方がその心持を極度に恐れて、好枝を保護しなければといふ心持で、蔭に廻つては好枝の心を慰さめ、勵まして呉れるのでございました。

これ程陰險な空氣が、病室の中に満ちて居りましても、不思議な事には本人の好枝は、茂子がこれ程世間の噂話や、譬話にかこつけて、好枝の胸を鋭い刃物でえぐる様な事を言ひましても、全く自分にはかゝり合ひのない様な様子で、朝から晩までにこ／＼として、病人の世話に眞心を盡して、何事も顧みませんので、幾ら好枝を非難しやうと思つても、その種が見出せず、俊夫から取り除かうとしてもその理由が立ちません。二人は益々心を苛立たせるばかりで、何とも致し方がありません。

それを見ると看護婦は、言ひ知れない心地よさを感じて、胸がすく様に思ふのでした、そして又好枝の餘りにも無關心な態度にも、言ひ知れない不思議を感じない譯に

は参りません。二人集つては時々、

「あの奥さんは、本當に私には分らない、本當に飛び抜けて賢いのか、悪く言へば神經がぶくて、何と言はれても腹が立つといふ事がないのか、兎に角ごちらにしても普通の者では眞似の出来ない事なんだもの、本當に驚いて終ふわ。」

「貴女もさう思ふの？私もさう思つて驚いてゐますのよ。」

「だけど幾ら蟲のよい人だつて、あれだけの事を言はれたら、少し位は顔に出さうなものですのに、何と言はれても少しも氣にかけなくて、にこ／＼として見えるのだから、餘計に一方が苛々して、あれこれと口汚く言ふんですわ。」

「さうだけどあの人達は、親子揃つてごうしたと言ふんでせう。」

嫁を憎み虐めるといふ事は、世間に幾らでもある事だけど、全然無教育な者なら、そこにもありますが、お母さんだつて娘さんだつて、あれだけの教育もあり、見識も優れてゐながら、あの日々の有様はどうでせう。

まるでそこら邊りの裏長屋の、無教育な者ばかりが集つて、出来た家庭の人々か何かの様に、幾ら奥さんが他人だからつて、朝から晩までする事なす事を、あれ程意地

悪くガミ／＼と、よく叱言が言へるじやありませんか。

「私はあゝ言ふ所を見ると、心の底から結婚なんてする事が、厭になつて終ひます。」

「それなら親や小姑のない所へ行つたらいゝでせう。」

「でも親や兄弟のない處へ行けば、屹度それだけの苦しみがあるんですから、ごちらにしても同じ事ですわ。それに親のない人なんて言ふのはないんですもの。」

「親のない所なんて言ふのは、間違つてゐるんだけど、あれだけ嫁を憎まれては私はい日も辛抱出来ないから駄目ですわ。」

「あれ程お母さんや妹さんが憎んでゐらつしやるのに、旦那様ご来たら又とても奥さんを、可愛がつてゐらつしやるんですね。一寸用事にお出かけになつても、好枝！

好枝つて、呼んでばかりゐらつしやるのですから、本當に笑可しくなる位ですわ。あれだけ奥さんに焦れる御主人も、又少しもんですわね。」

「それだから餘計に、お母さんや妹さんが、腹を立てるんですよ。」

「それだから難かしいんですわね。御夫婦仲がいゝから奥さんが離縁して、出て行かうとなすつても、旦那様が暇をお出しにならないでせうから……。」

「あのおうちは餘程前から、家庭が揉めてゐたらしいんですね。

それだから、うちを圓く治めるために、若夫婦で熱田へ別居しなすつたら、こんな事になつたので、奥さんが運が悪いんですね。

だから可愛いさうなのよ、あの奥さんは……。」

「本當にお氣の毒ですわ。」

あの娘さんたら、何といふ意地の悪い人でせう、あれじやごんな人だつてやり切れませんわ。兄嫁を虐めるだけではなく、私達を女中か何かの様に考へて、遠慮もなく自分の用事まで言ひつけるじやありませんか。

そして自分では一日に二度もお湯に入つて、お化粧ばかりしてゐて、自分の身づくろひをした暇には、すぐに看護法の説明みたいな事を言つて、私達に聞かせようつて言ふんですもの。本當にあの傲慢な態度つたら、ありやしませんわ。」

「本當にさうですわ、何かにつけて色んな事を言ひますが、あれは貴女御存じかも分らないけど、四年もお醫者のうちへお嫁に行つてゐたんですつて……。だから生嚼りに少し位知つてゐるのは當りまへですわ。」

「あらさうなんですか、それで分りました。

だからあんな事をよく言ふんですわね。」

「さうですよ、だけご何も理窟に合つた事は、分つてやしないんですから、駄目なんです、でも自分では、一かごの看護法や、一通りの醫學を知つてゐるつもりでゐるんですから、おかしいじやありませんか。」

看護婦達が或る日の午後、お湯に入つて二人で、こんな話を夢中でしてゐるのを、和子が何氣なく湯殿へ行つて、戸の外からそれを濡れ聞いたので、火の様に怒つて母に告げましたので、茂子も大變に腹を立て、看護婦が何食はぬ顔をして、歸つて來たのを待ち受けてゐて、

「貴女達は俊夫の看護をして貰ふために、高いお給金を出して頼んであるのに、病人を捨て、おいて、何處へ行つてゐらしたのです。」

看護婦はその唯ならぬ權幕に吃驚しながらも、

「只今御病人が非常にお樂ですから、お湯にやらせて頂いてゐました。」

和子は横から、物凄く睨み乍ら

「貴女達お湯に行くのもいゝけど、澤山な人の中で、私の悪口なんか言はないでもいゝでせう。貴女達に悪口を言つて、人に觸れて頂くために、お金を出して頼んだのでありませんよ。」

「私達、貴女の悪口なんか、申しては居りません。」

「まあ、よくそんな白ばくれた事が言へますね。」

「貴女達は今お湯場でどんな事を言つて見えたか、私はちやんと知つて居りますよ。」

「でもどんな悪口を言つてみましたか、承つて見ませう。」

「承るなんて言はなくても、自分の胸に手をおいて、自分に聞いて見たらよく分る

じやありませんか。」

「分りません、私達は人様の悪口を言ふ様な、呑氣な時間はございませんから。」

「それなのに、よくあんな、呑氣な話がして居られますね。」

「そんなに仰有るのなら、誰が何と言つてゐたか、仰有つて見て下さい。」

「私達は人様の悪口など、申した事はございませんから……。」

「絶対に言はないと言ふんですか、貴女達は……。」

「はい左様でございます、事實以外の事は申しません。」

「それじゃ貴女達が、今お湯場で話してゐた事、皆事實だつて言ふんですか！」

「私達の話してゐるのを聞きになつたとすれば、決して私達は殊更に悪口なんか申しませんから、皆事實のお話を、そのまゝしてゐたのでございます。」

「私達もお互に口を持つてゐますから、必要な時にはそれに應じて話も致します。」

「それを一々貴女様方にお断りしなければ、ならないといふことはございませんでせう。」

「それでは貴女方は、自分の口で言ふのだから、勝手だと言ふのですか。」

「おほゝゝゝ、さういふ譯でもないのですけれど、私達は殊更貴女の蔭口を申したといふつもりではありません。けれども貴女がそれをお聞になつて、お腹立ちになるのは、それは貴女の勝手でございます。」

「けれども貴女のように直接にひごい事を仰有るより、まだましではございませんか。」

「あらつ！ 私何時貴女達に、ひごい事を言ひましたか。」

「私達には格別仰有いませぬけれど、いつも奥さんに仰有る事は、姉様に對して、普

通の人では、ごも言はれない様な事を、平気で仰有るではありませんか。」

「え、？ 何時私そんな事を言ひました。」

「何時つて貴女、餘り毎日言ひなれてゐらつしやるから、御自分ではお氣がつかない  
のでせう。」

「まあ、いらぬお世話ですわ、ごれだけ酷く言つたつて、分らない様な無神経な人を  
相手にするには、少しは傍から見ても、諄すぎる様に言はなければ、通じやしない  
んですからね。けれども病人を大事に思ふ餘りではありませんか。」

「貴女のお心持はさうかも知れませんが、貴女の様に朝から晩まで、ボン／＼と喧し  
く仰有ると、御病人にひどく障りますから、私達としても大變迷惑を致します。」

奥さんは貴女が何と仰有つても、何も言はないでこ／＼してゐらつしやいますが  
私達は我儘者ですし、それに貴女からそんなに何も彼も 命令的に女中扱ひにされる  
必要はありませんから、貴女が御無理な事を仰有れば、それに對するだけの御答辯も  
致します。私達は院長の命令で、こ、へ參りました看護婦ですから、看護の事につ  
ては絶対に責任がございません。

他の方から私達の行動について、彼此と御指導を受けたり、色々な御用事を承つ  
てそれを果さなければならぬといふ様な、責任はないのでございます。

その邊の所は奥さんと同様に、お考へになつて頂く事は、御免を蒙ります。」

この時茂子は

「和子、まあお前は黙つておいで。看護婦さん、色々と有りがとうございました、貴  
女方も結構ですから、今日限りお断り致しますから、すぐに引取つて下さい。」

院長さんには私から申し上げますから、何も仰有らないでよろしうございますから、  
どうぞすぐに引取つて下さい。」

「あらさうでございますか、それは私達も却つて仕合せでございます。」

實は私の方からお暇を頂き度いと、此の頃申思つて居りましたが、院長さん  
からお許しが出ないものですから、仕方なしに今日までお世話させて頂きました。  
では御暇を頂きます。」

「さうして下さい、病人の世話もろく／＼しないで、蔭へ廻つて悪口ばかり言つてゐ  
る様な人を、頼んでおいても何もいゝことはないんですから……。」

それよりも私達が、これから一切世話をしますから。」

「それがおよろしうございます、それでは失禮致します。」

と二人は呆氣なく挨拶して立上ると、今迄とは打つて變つた態度になつて、病室へ入つて来て、好枝に小さい聲で、

「奥さん、今お聞き下さつたでせうけれど、お母さんがあゝいふ風に仰有いますから私達は今日限りお暇を頂きますが、貴女はどうぞ御體をお大切になすつて、一生懸命で御介抱下さいませ。御病人もお大事ですが、御自分でもお體に障る様な事をなさいません様に、充分お氣をつけて下さいませ。」

好枝は堪り兼ねて看護婦の手を取つて、

「吉澤さん、お母様が何と仰有つたか存じませんが、貴女に初めからお世話をして頂いたので、今暫くの間、御辛抱して、こゝにお出でになつて下さいませ。」

本當に御迷惑でせうけれど、私今貴女方にお手を引かれては、本當に困りますもの。お母様には私からお願ひ致しますから。ねえ、お願ひでございますわ。」

「でもね奥さん、私も松井さんも、是非行かなければならない所があるので、すけれど」

院長さんがもう二三日、こちらで勤める様に仰有いますので、他の方に繰かえて行つて頂いて居りましたのよ。だけでも今お母さんからお暇が出ましたから、今からその方へやらせて頂かうと思ひますの。

奥様には本當にお氣の毒だと思ひますけれど、もうこれからは養生だけで、ずんずん御全快になりますから。大して御心配はないと思ひますから、一生懸命で御介抱なさつて下さいませ。それにお母さんやお妹さんが、お出でになるんですから、私達はこの上おいて頂く必要もないと思ひます。」

「それはさうですけれども、今が大切な時でございますから、せめてもう二三日だけでも、御都合してゐて頂けませんでせうか。」

「おいて頂くといふのですけれど……一寸私の方都合もありますし、それに私も餘り失禮な事を申しましたから、却つてこれを切り、お暇を頂く方がよろしいと思ひますから、本當にすみませんけれど、お暇を取らせて頂きますわ、松井さんも一緒に……奥さんにはすみませんけれど……。」

と言つて、好枝がこれ程頼んでも、遂に聞き入れて呉れないで、看護婦は二人共歸つ

て終ひました。

好枝は力と頼む看護婦にも行かれて終ひ、今後は全く立場の違つた三人が、同じ病室に俊夫の世話をすることになりましたので、流石に好枝も悲しさが胸に迫つて来て、不安に胸を閉ざされて、堪えようとしても、涙が眼頭に滲んで来ました。

そして淋しいその夜は更けて参りました。

何時もは看護婦が交替で来て、世話をして呉れますのに、その夜からは看護婦がゐないため、好枝は全く一夜中、一眠りもしないで病人の枕許につき通しました。

和子は時々寢臺の傍へ来て、座つてはゐますけれども、別にこれといふ世話をすることもなく、夜が更けるとコクリ／＼と眠つたり、果は寢臺の椽に顔を埋めて、かすかに軒を立て、眠るのを見ますと、好枝はつく／＼と和子の頼りなさを感じました。

茂子が和子と代つて、起きて参りますと、俊夫の體に始終注意をして、體を一寸動かしても、頭を振つても口をうごかしても、すぐに寢臺の上から覗き込んで、

「口が乾いたのかえ。」と尋ねたり、

「向をかへて寝ますか。」

と言つて聞いたり、又

「頭痛はしやしませんか。」

お母さんが此處にいつもついてゐるから、安らかにお眠りなさい。」

と言つたりして、真心から溢れる様な慈愛の瞳で見凝めて、心配し慈しむ様は、二十八才にもなつた青年に對する母ではなく、まだ西も東も知らぬ幼児を、可愛がるのとちつとも違はぬ様な、底知れない慈愛を表はすのでした。

又俊夫もこの母親の愛に信頼し切つて、幼児の様に甘えて親しむ様を見ると、好枝は唯譯もなく、親子の愛情と母性愛に泣かされて終ひました。

### 清き祈り

看護婦を斷つてから後は、茂子と和子から思ふまゝに、好枝を罵り虐げられる事を観念して居りましたが、最初想像した程ではなく、看護婦がゐなくなつてからは、茂子も和子も甲斐々々しく、體を動かして看護に力を盡しますので、好枝は心の中で大



變嬉しく思ひ、感謝して居りました。

そして和子は買物や其の他の使ひ歩きなどには、氣がるく立ち働き、病人の世話でも一寸した事はたやすく用を達しますが、食事や用便の世話、又少し面倒な事は皆、好枝に委せておいて、自分は室内から姿を消すのが常でございました。病院の生活は平凡で變化がありませんので、茂子は時々ちつと考へ込む事がありました。

和子が事毎に好枝のする事を批難しやうとして、鋭く目を配つて、一寸した過ちも容赦なく、大袈裟な叱言を言ふのを見ると、何時とはなくそれが、茂子の眼には淺間しく映る様になりました。

それに對して好枝が、どんな場合にも、何時も變りなくこくとして、不満もなさうに働いてゐるのを見ると、何となく薄氣味悪さへ感じられる事がありました。けれども時には奥齒に物のこまつた様な感じがして、餘りのもごかしき頼りなさに腹立たしくなつて、いら／＼する事もあります。

しかし暇ある毎に、よく落着いて、ちつと考へて見ると、俊夫が入院して以來、好枝は夜も晝も、未だ一度も横になつて寝んだ事もなければ、病人に附添つてゐて、居

眠りをしてゐるのを見て、見た事もなく、そればかりか、幾ら食事を勧めても、俊夫のために取つた粥汁のからを、僅かに食べる以外には、一度も人並に食事をした事のない好枝の様子を考へると、どうしても當然とは思はれない、一つの不可思議さを感じました。茂子がさうした眼で、和子と好枝の行を平等に見較べてゐる時、餘りにも隔りの大きな事を知ると、我乍ら驚き呆れて、何時もの様に和子が、殊更に好枝の事を、聲高く罵りかけると、

「まあ和子、お前そんなに一々やかましく言はないで、自分で氣をつけてやつたらいいじゃないか、好枝も疲れてゐるんだから、少しはお前氣をつけて、代つておやり。」母のこの意外の言葉を聞くと、和子は呆れて

「あら？ お母さんまで私の事を悪く言ふのですか。」

「悪く言ふ譯ではないけれども、そんなに一々叱言を言つては、好枝だつて困るだらうし、人聞きも悪いからだよ。」

母にたしなめられると、和子は俄かに氣狂ひの様に逆上して、矢鱈に口惜しがつて泣き續けるので、茂子も手のつけようがなく、

「變な子じやないか、別に何も言つた譯じやないのに、一人で腹を立て、泣いたりして、外の室の方にも恥づかしいじやないの？」

泣く事なんか止めなさい、俊夫の病氣にも障るといけないから……。」

「現在のお母さんでさえ、私を馬鹿にして、悪く言つたり邪魔者扱ひにするんだもの。私はどうしたらいゝんだらう、あゝ、口惜しい〜。」

と尙も泣き續けます、茂子は困り抜いて、

「お前の分らないのにも、困つたものじやありませんか。」

誰もお前を馬鹿にしたりなんか、しやしないんですが、餘り大きな聲をして、ガミガミ言ふのは、見つともないから、お止めなさいと注意したゞけではないの？

お前だつて、人の事はばかり言はないで、自分の事も振返つて見たら、少しはこれじやいけないと、氣のつく事もあるでせう。

自分の事は忘れて終つて、人の事はばかりに眼をつけてゐるから、色々の事が言ひ度くなるのですよ。考へて御覽なさい、好枝は俊夫が病氣になつてからこちらへ、夜晝通して一睡も眠つちやゐないし、碌に食べ物を食べないで、あゝして附き切つてゐる

じやありませんか。お前にあの眞似が出来ますか。」

「自分の主人の世話をするのは、當り前の事じやありませんか。」

「それではお前も、自分の主人だつたら、あの好枝の通りに、お世話が出来ると思ふの？」

「當り前ですよ、誰だつて自分の主人なら、十日や二十日寝ないでも、吞まず食はずでも、命懸けの世話をする位の事、決つた事じやありませんか。」

「お前口では、どんな事でも言へるけど、却々本當には出来るものではないんですよ。現在肉身の兄の看護をするのにでも、お前はすぐに眠つて終ふじやないの？」

「そりや兄弟と主人とは違ひます。」

「それじやごちらが大事だと思ふのだえ？」

「そんな事聞かなくても、分つてゐるじやありませんか、主人の方が大事なのに決つてゐます、一生たよりにして、苦樂を共にする人だもの。」

「お前はさういふ事を言ふからいけないのです。肉身の兄弟より、夫の方が大事だと思ふ程の、眞心がありさえすれば、夫が妻や子を置いて、浮氣なんか出来るものじ

やない。

それに分別盛りの男が、家に妻子をおいて、つまらぬ所へ入り浸つて、馬鹿遊びをする事も、全部黒瀬さんばかりが悪いと言つて、責める譯には行かない。

屹度お前にも夫を満足させるだけの、真心が足りなかつたに違ひないと、私は此の頃漸く考へられる様になつた。

「それじやお母さんは、私が離縁されて来たのは、向ふが悪いんじゃないで、私の方がいけないと言ふのですか。」

「そうじゃないよ、今迄はお前の話ばかりを聞いて、何も彼も向ふが無理な事ばかりして、義理も人情もない人達だと、一圖に腹立たしく思つてゐたけれども、此の頃つくつく考へて見ると、さういふ結果になるのは、矢張り充分お前にも責任がある様に考へられるのです。尤もお前の責任は、矢張り私の責任で、お前を生み育てたお母さんの、躾や教育が間違つてゐた爲だから、お前の罪はお母さんが、全部負はなければならぬだけだ……。」

と言つて、茂子は思はず、涙をほろ／＼と膝の上に落ちました。和子は吃驚し乍ら

「お母さん、今日は貴女よつぽおかしいわ、どうかしてゐらつしやるのね。」

「どうしてそんな事を、言つたり泣いたりなさるの？」

「和子、私は別にどうもしたのでもないけれども、今日は何だか今迄と違つて、本當の私の姿がはつきりと、自分の目で見える様に思へてね。」

私はそれがためにお父さんにも倭夫にも、お前にも好枝にも、心から悔懺してお詫びして、許して貰はなければ、ちつとして安らかに生きて居られない様な、苦しい氣持がしてならないのです。」

「まあ お母さん、そんなしめついた話は止めて下さい、私も何だか氣が狂ひさうです。姉さんに聞へると厭だから、もうそんな事言はないで下さい。」

「聞えたつていゝじゃないの？ 別にあの子の悪い事を、言つてゐるのじやないんだから……。」

「でもお母さん、そんな事を言ふと、あの人ごんなに増長するか分りません。」

「お前はまた、どこまでも好枝を見損つてゐるんですね。」

心を鎮めてよく考へて御覽、何時までも自分勝手な事を考へて、罪のないものを苦

しめ泣かせるのは、悪い事です。好枝は前から、お前や私から何と言はれても、悪い顔一つせず、いつもにこ／＼としてゐるけれどもあれだとして馬鹿じやないんですから人並以上に考へて、心では何も彼も承知し切つてゐるに違ひない。

それを表面には少しも出さず、馬鹿と言はれても阿呆と言はれても、少しも怒つた様な顔もしないで、あゝしてゐるけれども、心の中では人知れず、どれだけ今迄泣いて来たか知れないでせう。

人に知らさず流した涙は、一體何處へ持つて行つたやらう。

それは必ず、苦しめた者の身に歸るに決つてゐます。人を泣かせた涙だけは、自分も泣かなければならない事は、當然の事ですから、それを思つてお前も、自分の今迄の總べての事は、天命であつたと、綺麗さつぱりと諦めて、自分の不幸を、あの子に負はせて、苦しめてはいけません。

和子！ よく胸に手を置いて、靜かに過ぎ去つた、年月の事を考へて御覽。

私達は二人ながら、本當に間違つてゐた事が、はつきりと分つて来る。

お父さんだつて、うちの爲を思へばこそ、成るべくいゝ嫁を俊夫につけ度いと思つ

て、色々心配なされたのです。俊夫だつてその通り、幾ら一時的に黒瀬さんのうちの人達の、御機嫌どりに宮子さんを貰つて、うちのお嫁にして見た所が、性質が合はなかつたり、一代弱かつたりしたら、ごんだけ不幸を見るか分らない。

遅かれ早かれ、そんな事のために不縁にでもなれば、却つて双方の家庭が揉めて、不和になるばかりです。さうして末の結果を考へると、一時的の感情に囚はれて、一生の過ちをしない様にと思つて、命懸けの反對をし通したのだ。

その事を前から知つてゐて、お前も私も得心で宮子さんの事は、二度と問題にしないたために、急いで好枝を嫁に貰ふ事にして、見合の時にはお前も私も一緒に行つて、充分に人柄も見て、これなら大丈夫と思つて、お前もうちへ歸つてから、あの娘さんなら、宮子さんより、どれ位優れてゐるか分らない。

明るい感じのする、愛嬌のある本當にいゝ娘さんだから、あんな人を貰はなければ外にはないと言つて、一生懸命で俊夫に勧めた程じやありませんか。

家内中が氣に入つて、喜んで貰つた嫁が、怠けて困るとか、お喋りでいけないとか、陰日向があるといふ様な事情があれば兎に角も、缺點など一つもなく、一生懸命で家